

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
－女性の役割を見据えた知の国際連携－

令和5（2023）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（カンボジア、ブータン）  
実施報告書

2024年2月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

## はじめに

本海外実習は、平成 23（2011）年度に学生による実習（海外スタディツアー）として開始し、平成 25（2013）年度から通年の単位認定実習科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」として実施して参りました。この科目は、専攻・学年を問わず開発途上国の社会・政治・経済に関わる問題や国際協力に関心を有する学生が、事前学習と現地調査を実施し、都市と農村の貧困問題、教育、保健、ジェンダー等に関するテーマについて、文献だけでは得ることのできない知識や経験を得、理解を深めることを目的としています。過去 11 年間に、東ティモール、ベトナム、フィリピン、バングラデシュ、ネパール、カンボジア、ブータンの 7ヶ国でフィールドスタディを行いました（2020 年度・2021 年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け実施を中止）。

2023 年度は、学部 1 年生から博士前期課程 1 年まで、専攻も学年も異なる合計 12 人の学生が、8 月にカンボジア、9 月にブータンでフィールドスタディを行いました（各 6 名）。フィールドスタディにおいては、現地 JICA（独立行政法人国際協力機構）事務所、農家、学校、企業などを訪れ、関係者の方々からお話しを伺うとともに活動を視察しました。

学生は、訪問国の状況を理解し、自らの調査課題を設定するため、フィールドスタディに先立ち、事前学習（6～7 月）を行いました。また、帰国後の事後学習を経て、11 月の徽音祭（学園祭）での発表を行い、報告書を取りまとめました。

本報告書は、本科目履修学生による調査報告と発表の内容をまとめたものです。事前学習、フィールドスタディ、事後学習、徽音祭での発表、報告書作成を経て、学生が訪問国の社会とその課題を理解し、自ら取り上げたテーマについて考察を深めてゆく様子が記録されています。本実習科目が、学生の今後の学習・研究や、グローバル社会における多様性への理解と共生のあり方について考えを深める契機となることを期待いたします。

末筆ながら、事前学習でご高話頂いたゲスト講師の皆様、並びに、現地での本学学生の受入れに快くご協力いただくとともに、見学・インタビュー等にご支援・ご協力を頂いた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

2024 年 2 月  
お茶の水女子大学グローバル協力センター  
センター長 由良 敬



グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和5（2023）年度  
「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツア（カンボジア、ブータン）実施報告書  
目次

はじめに

1. 活動の概要.....	1
(1) 科目概要 .....	3
(2) 2023 年度の内容.....	3
2. 学生報告 .....	5
2-1 カンボジア .....	7
(1) カンボジア基礎情報 .....	7
(2) 参加者名簿 .....	8
(3) 現地調査日程.....	9
(4) 調査報告書 .....	10
(5) 訪問記録.....	53
(6) 写真 .....	85
2-2 ブータン .....	87
(1) ブータン基礎情報.....	87
(2) 参加者名簿 .....	88
(3) 現地調査日程.....	88
(4) 調査報告書 .....	89
(5) 訪問記録.....	126
(6) 写真 .....	147
3. 事後学習成果（徽音祭発表、大学ウェブサイトでの報告） .....	149
4. 資料 .....	171
(1) 募集要項.....	173
(2) 全体スケジュール.....	175



# 1. 活動の概要



## (1) 科目概要

### 【主題】

本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的に実施する実習科目である。

履修生は、開発途上国における研究・国際協力の実績を有する担当教員の指導のもとで、①事前学習（6～7月）、②現地調査（8月もしくは9月、8日間程度）、③事後学習（10～11月）を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深める。具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会の開催等を通してその成果を外部へ発信する。

### 【到達目標】

- 漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。
- 現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。
- 現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。
- プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。

## (2) 2023年度の内容

今年度は訪問国をカンボジア王国（Kingdom of Cambodia、以下カンボジア）とブータン王国（Kingdom of Bhutan、以下ブータン）とし、8月渡航チーム（カンボジア）と9月渡航チーム（ブータン）の2チーム体制で実施した。

6月よりオリエンテーション、事前学習、自主活動、渡航前のミーティングを経て、2023年8月22日～29日（計8日間、現地滞在7泊8日）の日程で履修生6名がカンボジア現地調査を、9月11日～20日（計10日間、現地滞在7泊8日）の日程で履修生6名がブータン現地調査を行った。履修生は「カンボジアの政治と女性」「都市化と幸福度の関係」「ポル・ポト時代以降の社会再建を後押しした人々の心理的要素・内的体験」「地雷・不発弾被害者の社会的立場」「都市と農村の比較を通した貧困と労働の考察」「カンボジア

女性の社会経済的立場の現状とカンボジア政府の対策」／「ブータンから学ぶエコツーリズム形成に必要な観点」「ブータンの人々が抱く理想は GNH 政策によって達成できるか」「グローバル化による農業の変化に伴う文化・生活の変化」「ブータンにおける開発はどういうな“豊かさ”をもたらしたのか」「ジェンダーギャップに対する法・政策の実態と市民の認識（変化）」「ブータンにおける高等教育の“出口”」といった各自が設定した研究課題遂行のため、関連機関の訪問や現地の人々へのインタビューを実施した。

## 2. 学生報告



## 2－1 カンボジア

### (1) カンボジア基礎情報

※外務省 HP: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/index.html> (2023/12/21 最終閲覧) 他から抜粋、加筆

#### 【基礎情報】

面積	181,035 平方キロメートル（日本の約 2 分の 1 弱）
人口	15.3 百万人（2019 年カンボジア国勢調査）
首都	プノンペン
民族	人口の 90%がカンボジア人（クメール人）とされている
言語	クメール語
宗教	仏教（一部少数民族はイスラム教）
政体	立憲君主制
主要産業	農業（GDP の 24.3%）、工業（GDP の 39.2%）、サービス業（GDP の 36.4%）（2021 年、ADB 資料）
名目 GDP	約 262 億米ドル（2021 年、IMF 推定値）
一人当たり GDP	1,780 米ドル（2022 年、IMF 推定値）
物価上昇率	5.3%（2022 年、IMF 推定値）
経済概況	カンボジア経済は 2004 年から 2007 年までの 4 年間、10%を超える高い経済成長を記録した。しかし、サブプライムローン問題に端を発した世界同時不況の影響を受け、2009 年の経済成長率は 0.1%まで落ち込んだものの、翌年の 2010 年には 6.1%にまで回復した。2011 年以降 2019 年までは、堅調な縫製品等の輸出品、建設業、サービス業及び海外直接投資の順調な増加により、年率約 7%の安定した経済成長を続けていた。2020 年は新型コロナウイルスの影響を受けてマイナス成長となったが、2021 年及び 2022 年についてはプラス成長が見込まれている。
略史	1953 年 カンボジア王国としてフランスから独立。 1970 年 ロン・ノルラ反中親米派、クーデターによりシハヌーク政権打倒。王制を廃しクメール共和制に移行。 親中共産勢力クメール・ルージュ（KR）との間で内戦。 1975 年 KR が内戦に勝利し、民主カンボジア（ポル・ポト）政権を樹立。同政権下で大量の自国民虐殺。 1979 年 ベトナム軍進攻で KR 敗走、親ベトナムの「カンプチア人民共和国」（プノンペン（ヘン・サムリン）政権）擁立。 以降、プノンペン政権とタイ国境地帯拠点の民主カンボジア三派連合（KR の民主カンボジアに王党（シハヌーク）派・共和（ソン・サン）派が合体）の内戦。 1991 年 パリ和平協定。

	<p>1992年 国連カンボジア暫定機構（UNTAC）活動開始（1992～93年、日本初の国連PKO参加。）</p> <p>1993年 UNTAC監視下で制憲議会選挙、王党派フンシンペック党勝利。新憲法で王制復活。ラナリット第一首相（フンシンペック党）、フン・セン第二首相（人民党：旧プノンペン政権）の2人首相制連立政権。</p> <p>1997年 首都プノンペンで両首相陣営武力衝突。ラナリット第一首相失脚。</p> <p>1998年 第二回国民議会選挙。第一次フン・セン首班連立政権。</p> <p>1999年 上院新設（二院制へ移行）。ASEAN加盟。</p> <p>2003年 第三回国民議会選挙。</p> <p>2004年 第二次フン・セン首班連立政権発足。 シハヌーク国王引退、シハモニ新国王即位。WTO加盟 ASEM参加決定。</p> <p>2006年 第一回上院議員選挙</p> <p>2008年 第四回国民議会選挙。第三次フン・セン首班連立政権発足。</p> <p>2012年 第二回上院選挙。ASEAN議長国。（二回目）</p> <p>2013年 第五回国民議会選挙。フン・セン首相首班政権発足。</p> <p>2018年2月 第三回上院選挙。</p> <p>2018年7月 第六回国民議会選挙。フン・セン首相首班政権発足。</p>
--	--

## （2） 参加者名簿

氏名	学年	学部・学科・専攻（コース・講座）
平子 七海	2年	文教育学部人文科学科哲学・倫理・美術史コース
吉村 花香	2年	文教育学部人文科学科地理学コース
矢野 紗彩	2年	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
三枝 馨	2年	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
杉本 愛莉	2年	生活科学部人間生活学科生活社会科学講座
林 希枝	4年	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
引率者		
小田 亜紀子	特任准教授	グローバル協力センター（副センター長）
平山 雄大	講師	グローバル協力センター

(3) 現地調査日程

No.	月日	活動内容	宿泊地
1	8/22 火	羽田空港発	東京→(バンコク経由)→ プノンペン→タケオ
		プノンペン着	
		JICA カンボジア事務所訪問・現地職員インタビュー	
		プノンペン発	
		タケオ着・ecologgie 社事務所訪問	
		ecologgie 社関係者との会食	
2	8/23 水	ecologgie 協力農家訪問・インタビュー	タケオ
3	8/24 木	市場視察・朝食	タケオ→プノンペン
		タケオ発	
		プノンペン着	
		グループ①：Wonderfy（株）教育アプリ導入小学校訪問	
		グループ②：JICA 事務所スタッフ（女性省案件担当伊藤 奈緒子企画調査員）インタビュー@ホテル	
4	8/25 金	プノンペン発	プノンペン→シェムリアップ
		シェムリアップ着	
		シェムリアップ職業訓練校生徒との交流・インタビュー	
5	8/26 土	アンコールワット・アンコールトム訪問	シェムリアップ
		市場視察等	
6	8/27 日	シェムリアップ発	シェムリアップ→プノンペン
		プノンペン着・市内視察	
		カンボジアでオーガニック胡椒栽培を経営する Go Tatsuhiro 氏との会食	
7	8/28 月	カンボジア日本人材開発センター訪問・学生との意見交換	プノンペン
		プノンペン中央市場、トゥール・スレン虐殺博物館視察	
		市内視察	
8	8/29 火	プノンペン発	プノンペン →(バンコク経由)→東京
		羽田空港着	

#### (4) 調査報告書

氏名	タイトル
三枝 馨	カンボジアの政治における女性活躍度の現状と原因
杉本 愛莉	都市化はカンボジア国民の幸福度にどう影響するか
林 希枝	カンボジアにおける女性の社会経済的状況
平子 七海	「復興」を問い合わせる—ポル・ポト政権時代以後に紡がれる語りに着目して—
矢野 紗彩	カンボジアにおける地雷問題の形骸化と取り残された人々
吉村 花香	カンボジア国民の仕事と生活満足度の地域比較

# カンボジアの政治における女性活躍度の現状と原因

生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 2年

三枝 鑿

## 1. 調査テーマ

### 1-1 調査背景・目的

政治の場における女性の活躍が日本で社会課題となって久しい。カンボジアでは、フン・セン元首相が長く実権を握り、野党を排除するなど半ば独裁的な政治が行われてきた。現在その座は息子に引き継がれ、与党は今も圧倒的な力を誇っている。ジェンダー学を学ぶ私は、そのようなカンボジアにおいて、政治の場でどれほどの女性が活躍しており、活躍できていないとすれば何が原因であるのかに興味を持った。そこで本調査は、カンボジアの政治における女性活躍度の現状と原因を明らかにすることを目的とした。

### 1-2 先行研究

WORLD ECONOMIC FORUM (2023) によると、カンボジアのジェンダーギャップ指数ランキングは 146 位中 92 位であり、政治分野においては 115 位である。つまり、カンボジアの女性活躍度は全体的に低い傾向にあり、政治分野は特に低いということだ。同報告によると、女性議員は 20.8%、女性の閣僚は 11.1% となっており、政治の場におけるジェンダー不平等はやはり深刻である。一方で、カンボジアには日本にない大きな特徴がある。それは、内戦の影響で 50 代以上の女性人口が男性人口より多いことだ(Population Pyramid.net 2020)。

このことから、カンボジアの政治分野における女性の活躍度が低い理由として、人為的な障壁があることは明らかである。Khourn (2016) によると、現地の女性大臣は、その理由として教育、経済的支援、家族による支援等の不足と伝統が挙げられると述べている。同論文の筆者はこれに加えて、政府が政策を十分に実行できていないことや、政治的意志の欠如も原因だとしている (Khourn 2016)。

また、現在のカンボジアは、人民党が野党を排除し一党優位の状態である (初鹿野 2018)。人民党はメディアや一般市民に対しても圧力をかけていることから (初鹿野 2018)、本調査において、調査対象者が率直な意見を述べることには難しさがあることもわかった。

## 2. 調査設問

### 2-1 リサーチクエスチョン

調査するにあたり、2つのリサーチクエスチョンを設定した。

- (1) 女性は政治にどれほど参加しているのか。

(2) カンボジアでは、なぜ政治における女性の活躍度が低いのか。

これらを明らかにするために、3種類の対象者にインタビュー法を用いて調査を行った。対象者は、農村部の市民・都市部の市民・JICA カンボジア事務所スタッフである。

具体的な質問内容は、主に以下の通りである。なお、カンボジアは政情不安であり、政治について直接的に質問するのが難しい状況にあった。そのため、今回は地方自治について質問を行うことで、政治的活動を調査することとした。

## 2-2 調査項目

農村部・都市部の市民に対する調査項目は主に以下の通りである<sup>1</sup>。

- |  |
|--|
| Q0. 回答者の年齢（農家の方に対してのみ）・性別                  |
| Q1. 村長の性別（または、身の回りに政治活動を行う女性はいるか）          |
| Q2. 政治の場に女性が少ない理由は何だと思うか（または、なぜ女性が村長でないのか） |
| Q3. 男女の不平等はあるか                             |
| Q4. 回答者と配偶者の就業状況（農家の方に対してのみ）               |

なお、JICA カンボジア事務所日本人スタッフの方に対しては、「カンボジアの政治における女性活躍度が低い理由」について尋ねた。

## 3. 調査結果

### 3-1 農村部の市民へのインタビュー

農村部の市民については、農家の方4名とRTC（シェムリアップ職業訓練センター）の学生5名にインタビューを行った。まず、農家の方4名にそれぞれ質問を行った。Q0は、それぞれ30代男性、40代女性、50代女性、50代男性であった。Q1では、女性が村長をしているところはなかった。Q2では、50代女性・50代男性が、女性が家事をする必要があるためだと述べた。残りの2名は、それぞれ「特にない」「わからない」と回答した。Q3について、50代女性にはこの質問を出来ていないが、残り3名は全員「ない」と回答した。またこの際、初めは質問の意図が伝わらなかったことも併せて記しておきたい。Q4については、質問できていなかった1名を除いて3名全員が夫婦どちらも就業していると述べていた。

次に、RTCの学生5名（男性3名、女性2名）に対して質問を行った。Q1については、1名に質問できていないが、残り4名は全て男性であった。Q2では、地方部の女性は教育の程度が低いこと、女性があまりリーダーにならない慣習、女性は社会より家庭を重要視すべきだという規範のためだという回答を得た。Q3については、5名（男性4名、女性1名）が「あまりない」、1名（女性）が「ある」と回答した。「あまりない」と回答した理由としては、職業差別がないことや政府による女性に対しての支援があることなどを挙げ

ていた。

### 3-2 都市部の市民へのインタビュー

都市部の市民については、CJCC（カンボジア日本人材開発センター）の女子学生 4 名に話を聞くことができた。Q1 は、4 名全員が男性であった。Q2 では、女性が家事育児をする必要があることや、教育の程度が低いことなどがあるとの回答を得た。Q3 では、4 名全てが「ある」とした。具体的には、職場における性差別や、教育レベルの差、女性が家事育児をする必要があることが挙げられると回答した。

Q0~Q3 のインタビュー結果をまとめたものが表 1 である。

グループ	回答者	女性の村長	男女の不平等	政治分野で女性の活躍度が低い原因
農家	30代男性	×	ない	特になし
	40代男性	×	ない	わからない
	50代女性	×	—	女性が家事をすること
	50代男性	×	ない	女性が家事をすること
RTC学生	女子 1	—	ある	—
	女子 2	×	あまりない	教育の程度が低いこと、 女性がリーダーにならない慣習、 社会より家庭という規範
	男子 1	×	あまりない	
	男子 2	×	あまりない	
	男子 3	×	あまりない	
CJCC学生	女子 1	×	ある	教育の程度が低いこと、 女性が家事育児すること
	女子 2	×	ある	
	女子 3	×	ある	
	女子 4	×	ある	

表 1 インタビュー結果

### 3-3 JICA カンボジア事務所スタッフの方へのインタビュー

JICA カンボジア事務所の日本人スタッフの方 1 名に詳しくお話を聞いた。彼女は、カンボジアの政治において女性活躍度が低い理由を 2 つ提示してくれた。1 つ目は、女性がリーダーシップをとる経験をしないことだ。リーダーシップをとるのは大変なことであり、従属的な立場にいる方が快適な部分もあるからだという。加えて、カンボジアの女性たちは自分自身のリーダーシップによって物事を変化させ、恩恵を感じる経験をしてこなかつたために、あえて従属的な立場から抜け出そうと試みることがないそうだ。

2 つ目は、論理的思考力の不足だ。教育の程度が高くないことから、リーダーシップに必要な論理的思考力が不十分であることも、政治分野での女性活躍度が低い要因になっているそうだ<sup>2</sup>。

#### 4. 考察

以上の結果より、リサーチクエスチョン（1）（2）については次のように考察できる。

(1)について、調査対象者の村で、女性が村長をしているところはなかった。このことから、女性の政治的活動は活発でないことがうかがえる。

(2)については、背景として3つのことが考えられた。1つ目は、カンボジアではジェンダー不平等の考え方が一般的でないということだ。男女不平等があると答えた人の割合は図1のようになっており、全体の42%と半数を切った。1・2で述べたように、政治におけるジェンダー不平等は存在しているにもかかわらずこのような結果になったということは、カンボジアではジェンダー不平等の考え方が浸透していないと考えることができる。農家の方2名が、女性が村長に就任しない原因を「特にない」「わからない」と回答したことからも、男女格差が理解されていない状況がうかがえる。性別によるバリアがあることが広く認知されない限り、その改善に努めることは難しい。そのため、女性の政治活躍度が低い原因の1つに、そもそもジェンダー不平等の考え方が浸透していないことがあると言える。

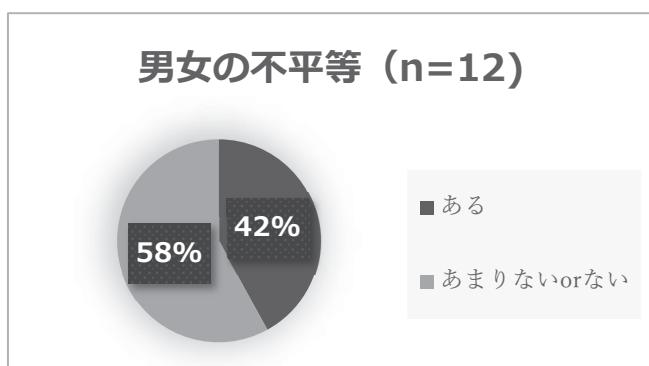


図1 男女の不平等意識

2つ目は、カンボジアでは一般的に女性が家事育児を行っており、政治活動に時間を割くのが難しいということだ。多くの回答者がこの点について言及していた。農家の方へのインタビューでは、夫婦ともに仕事をしていると回答者の全員が答えていたことから、女性は仕事・家事・育児の全てをこなす必要があるとわかる。これらの活動に加えて政治活動を行うことは、非常に困難である。

3つ目は、教育の修了レベルが低いことだ。上田ほか（2023）によると、中学校修了率は45%程度、高校修了率は都市部で33%、地方部で19%程度となっているという<sup>3</sup>。よって、カンボジアにおいて教育の程度は十分でないと言える。教育の程度が低いために、生徒は論理的思考力やその他リーダーシップに必要な能力を十分に養うことができない。これは、男性がリーダーシップを取る現状に女性たちが変化を求めなかつたり、男性が積極的に女性をリーダーに登用しなかつたりする要因になっているだろう。このことから、教育の程度が低いことは政治における女性活躍度が低いことの一因になっていると考えられ

る。

以上より、政治分野での女性活躍度が低い背景として 3 つのことが考えられたが、本調査では課題も多く残る。最大の課題は、農村部と都市部の市民を比較して回答の傾向を得ようとしたものの、対象者によって教育の修了レベルが異なっているために、教育の程度が影響しやすいジェンダー問題においては正確な比較ができなかつたことである。加えて、回答状況に応じて質問を変更せざるを得なかつたことも比較を行えない原因となつた。

## 5. 調査に参加した感想

私はこれまで、「ジェンダー平等」という概念が伝わる社会で生きてきた。しかし今回、カンボジアの農村地域で初めてジェンダー平等という価値観が通用しない場に置かれた。これは私にとって忘れられない経験となつた。ジェンダーの概念が浸透していることを前提に調査計画を練っていたため、質問の大幅な変更が必要となつた。

カンボジアで知り合った CJCC の女子学生は、貧困家庭に育つた周りの女子学生が自分の将来を変えるため必死に努力している様子を話してくれた。“Only education will change her destiny（彼女の運命を変えるのは教育だけである）”という彼女の発言を、私は帰国してから何度も思い出す。過渡期にあるカンボジアで、ジェンダーの視点から支援を行うことは間違ひなく彼女たちを救うことに繋がる。今回のスタディツアーパーを通して、自分が向き合う学問の使命に気づかされた。

## 6. 注

1. 農家の方への調査は、一人一人の対象者にインタビュー法を用いて行った。一方、RTC と CJCC の学生に対しては、対象者の集団に対してインタビュー法を用いて調査を行つた。
2. JICA スタッフの方によると、女性であることが政治分野での活躍を阻む原因となつてゐる一方で、現在のカンボジア政府では性別よりも家庭的背景（政治的に権力のある家庭出身かどうかなど）の方が政治分野での活躍度に影響するという。
3. 上田ほか（2023）によると、女子のみの中学校修了率は都市部で 48%、地方部で 51%、高校修了率は都市部で 34%、地方部で 22% 程度となっており、男子よりも高い数字となつてゐるという。女子の就学率が男子に比べてわずかに高い要因として、RTC の学生 1 名が、男性は両親の仕事を継ぐ必要があるからだと述べていた。なお、ここではジェンダーに関わらず全体的に就学率が低いことが、女性の活躍を阻む要因になつてゐると考察している。

## 7. 参考文献

上田広美、岡田知子、福富友子（2023）『カンボジアを知るために 60 章【第 3 版】』明石書店

初鹿野直美（2018）「2017 年のカンボジア 最大野党のカンボジア救国党解党」『アジア動向年報』vol.2018、pp.245-264

Chantevy, Khourn (2016) "WOMEN'S PARTICIPATION IN POLITICS IN CAMBODIA", *Human Rights and Peace in Southeast Asia Series 5: Pushing the Boundaries*, pp.19-34.

Population Pyramid.net (2020) 「人口：カンボジア 2020」  
<https://www.populationpyramid.net/ja/カンボジア/2020/> (2023/07/09 最終アクセス)

WORLD ECONOMIC FORUM (2023) "Global Gender Gap Report2023"  
[https://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2023.pdf](https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2023.pdf) (2023/07/09 最終アクセス)

# 都市化はカンボジア国民の幸福度にどう影響するか

生活科学部人間生活学科生活社会科学講座 2年  
杉本 愛莉

## 1. 調査テーマ

本稿では、「都市化と人々の主観的幸福度の関係」についてカンボジアでの現地調査と調査結果からの考察を論じていく。カンボジアは、ポル・ポト政権後多くの国の支援を受けながら経済成長を続けている。2016年には、低中所得国となりその後もGDPの成長率は7%前後を維持している。日本の2022年度のGDP成長率は1.2%であり、カンボジアが急速な経済成長を遂げていることがわかる。経済成長に伴う都市化は、人々の生活を豊かにする一方、都市部への人材流出、人間関係の希薄化に伴う孤独、過労など様々な課題の原因となっている。アメリカの経済学者であるリチャード・イースターリンが行った研究によると、「国際比較でみて所得の高い国のウェルビーイングが高いとはいえない」「時系列でみると所得の上昇が必ずしもウェルビーイングの上昇をもたらさない」ということが分かっており、このような経済成長と心の豊かさの関係は「幸福のパラドックス」と呼ばれている。今回の調査では、都市化に伴う「人間関係の希薄化に伴う孤独」と幸福度の関係に注目して現地調査を実施した。

## 2. 調査設問

- ・幸せに生活するために最も大切な要素は何か（「家族・友人・パートナー、お金、仕事・勉強、信仰、自由に使える時間、その他」から選択）
- ・日本とカンボジアで生活・文化・価値観に違いはあるか
- ・カンボジアの都市化が進むと日本の都市部のような課題（孤独、過労など）が生じると思うか
- ・将来は都市部（プノンペン・州都）と地方部のどちらに住みたいか
- ・都市部と地方部の印象

## 3. 調査結果

### 3-1 カンボジア国民の幸福感について

シール投票の結果

質問：幸せに生活するために最も大切な要素は何か（「家族・友人・パートナー、お金、仕事・勉強、信仰、自由に使える時間、その他」から選択）

調査対象：カンボジア国民 19 人

回答：「家族・友人・パートナー」10 人、「お金」3 人、「仕事・勉強」5 人、「信仰」0 人、「自由に使える時間」1 人、「その他」0 人

シール投票の結果は、「家族・友人・パートナー」を選択した人が最も多かった。「お金」や「仕事・勉強」を選択した人について、選択理由を質問すると「家族を養うため」や「家族との時間を過ごすため」などの理由が多くあり、設問時に私が想定していた「自分のために使うお金」や「やりがい・生きがいとしての仕事」と捉えている人はいなかった。また、現地で訪問した（株）エコロギー（於：タケオ州）の日本人スタッフに、日本とカンボジアの生活・文化・価値観について質問すると、「カンボジア人は日本人に比べて仕事に対する思い入れが少なく、家族や周りとの繋がりを重視しているように感じる」「カンボジア人はひとり行動が苦手だと思う」などの回答が得られた。

### 3-2 カンボジア国民の都市化への印象について

都市化が進むことについてインタビューを行ったところ、「交通など生活が便利になるから良い」「地方の都市化が進むと家族の近くで仕事ができるから良い」などといった都市化に対するプラスの印象が多く挙がった。また、地方と都市部のどちらに住みたいかという質問については、地方部出身の多くの人が地元に住みたいと答えた。その回答の理由としては、「家族の近くで暮らしたい」「慣れた土地で暮らしたい」というものが多かった。都市部出身の人は、普段は便利な都市部で生活し、休暇の際には地方にリフレッシュしに行きたいという回答が多かった。「カンボジアの都市化が進むと日本の都市部のような課題（孤独、過労など）が生じると思うか」について JICA カンボジア事務所のスタッフと CJCC（カンボジア日本人材開発センター）の学生に質問したところ、JICA カンボジア事務所スタッフは「カンボジアは日本に比べ仕事より家族を大切にする文化であるため日本のような課題は生じないと思う。」と回答した。一方 CJCC の学生からは「カンボジアではうつなどの精神疾患についての理解が進んでおらず、心の弱さとみなされる傾向がある。都市化に伴い競争の激化や仕事・生活が多忙になると自殺率が上がる可能性がある。」という回答が得られた。

## 4. 考察

インタビューを実施したカンボジア国民は、都市化に対しプラスのイメージを持っていた。これは、日本とのインフラの整備状況が大きく違うことが関係していると考える。例えば、カンボジアの地方部では道が整っておらず車移動には時間がかかる。そのような状況では都市化により、「道がきれいになる」というプラスの面をイメージし、その先に考えられる「道が整備されたら都市部に若者が流出した」などの都市化によってもたらされる課題はイメージしないだろう。私の立てた仮説が先進国的な視点であったことに気づかされた。しかし、都市化が進むにつれて新たな課題が生じるのは確実だろう。実際に現在も首都のプノンペンに企業や学校が集まっている。地方部からプノンペンの学校に入学した学生に理由を聞くと「プノンペンには多くの種類の学校があるから」と話していた。すでに地域間格差が生じており地方から都市への人材流出が進んでいるのだ。また、都市部

出身者が多い CJCC の学生は、都市化のメリットだけでなく、精神疾患の増加などといったデメリットを感じていた。先の調査テーマあげた「人間関係の希薄化」については、都市に出て家族と離れる寂しさはあるものの、一人暮らしではなく友人とシェアハウスをしているなど人との関わりに特別不満はないように感じられた。これらの結果から、①「人間関係の希薄化」だけが都市部の幸福度を下げる要因ではない ②カンボジアと日本では人間関係の築き方・捉え方に違いがある ③カンボジアの都市化・経済成長を幸福のパラドックスに当てはめるにはまだ不十分であるということが考えられる。①については、都市部に移り人間関係が希薄化することだけが幸福度を下げるのではなく、競争の激化や生活の多忙、精神疾患への理解などさまざまな要因が影響していると考えられる。②は、インタビューから、家族など周りの人間関係についての考え方にはカンボジアと日本で大きな差があることが分かった。このことから、都市という環境だけが人間関係を希薄化するのではなく、日本人の考え方や性格が孤独を招いているのではないかと考えた。③については、上記の通りカンボジアと日本では経済や社会の発展度が違っており、都市化によって生じる課題をイメージしづらいと考える。

また、調査テーマからははずれるが、支援のあり方について考えることがあった。JICAの支援を受けている CJCC の学生に将来の夢を聞いたところ、「海外で働きたい」または「海外で一度働いてカンボジアに戻りたい」という意見が多く挙がった。彼らは、外国人との交流が多くあること、海外について知る機会が多くあること、また幼少期からの語学教育によって英語を流暢に話せることで、カンボジアよりも豊かな国に行きたいという思いが強いと語った。このような課題は日本国内でも生じている。私の出身である沖縄県では、毎年数十人の高校生の長期留学を県費で支援している。その目的は、沖縄県の人材育成であるが、その支援を受けて留学をした多くの学生が県外に進学し、沖縄県内の仕事の幅が少ないことなどを理由に県外で就職をしている。県内の発展を目的とした人材育成が、結果人材の県外流出を促していると言える。どこで働くかや、どのようなキャリアプランを描くかについては個人の自由であるが、支援する政府や団体は支援後の人材流出について考える必要がある。

## 5. 調査に参加した感想

私にとって今回のスタディツアーレポートは初の現地調査であった。カンボジアでの調査では、難しさを実感するとともに文献調査だけでなく現地訪問やインタビューによる調査の重要性を感じた。私の立てた設問は、先進国的な視点のものであることや不十分な点が多くあることを現地で指摘されて気付いた。7 日間の現地調査の間に質問内容を変えるなど工夫をしたが、満足いく結果が得られたとは思えなかった。しかし、この経験から自分の視野が狭いことや考え方が偏っていたことに気づくことができた。カンボジアに渡航する前に事前調査・準備を行ったにも関わらず、やはり現地に行き現地の人々の話を聞かないと分からないことが多くあった。今回の「都市化と幸福度の関係」や「経済成長と心の豊かさ」

というテーマについては今後も継続して研究していくつもりだが、これからも文献だけに頼らず自分で調査するという姿勢を忘れずにいたい。

## 6. 注

1. 該当する回答の欄（本調査においては「家族・友人・パートナー、お金、仕事・勉強、信仰、自由に使える時間、その他」）に回答者にシールを貼ってもらう調査のこと

## 7. 参考文献

伊藤正憲（2013）「幸福のパラドックスについてのノート」京都女子大学現代社会学『京都女子大学現代社会研究』第16号、pp.119-129.

[http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/1532/1/0130\\_016\\_008.pdf](http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/1532/1/0130_016_008.pdf)（最終閲覧 2023/10/31）

外務省（2017）「カンボジア王国 国別開発協力方針」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/files/000072231.pdf>（最終閲覧 2023/10/31）

# カンボジアにおける女性の社会経済的状況

文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 4年  
林 希枝

## 1. 調査テーマ

カンボジア女性の社会経済的立場の現状やそれに対するカンボジア政府自身の対策、日本の支援の様子について、経済的自立を目指す女性や支援機関のスタッフの方への聞き取り調査を行うことによって、短い期間かつ少人数の回答ではあるが、実態を把握することに努める。このテーマに定めた理由は、日本における女性が置かれている状況とカンボジアのそれが近しいと感じ、興味を持ったからである。2023年のジェンダーギャップ指数では、カンボジアは92位、日本は125位と、両国ともに低い水準にある。また、「経済参画と機会」の分野では、カンボジアは58位である一方、日本は123位であり、カンボジアは日本より男女格差が小さいが、経済分野における格差で悩む人たちも少なくない。カンボジアでの調査を通じて、日本での経済分野における男女格差に対して何か改善できることはないか、活かせることはないかなどを考えていきたい。

## 2. 調査設問とその意図

自分で設定した質問と、自分の調査テーマに関連する可能性がありそうな、またはその質問に対する回答が、自分のテーマに参考になりそうなものであった他の調査参加学生が設定した質問を以下に記載する。

<JICA カンボジア事務所 対象：Tさん>

- 高等教育や職業訓練の分野でどのような男女格差があるのか、女子差別があるような事項は存在するか。

<エコロギー社 対象：日本人スタッフ4名（男女）、現地カンボジア人スタッフ2名（女性）C1さん、C2さん>

- エコロギー社に協力するコオロギ養殖農家の男女比は（同社CEO Aの氏）。
- エコロギー社で働く前は何をしていたのか（カンボジア人スタッフに）。
- なぜ前の仕事を辞めてエコロギー社に来たのか（カンボジア人スタッフに）。
- 女性議員が少ないのはなぜか。

<エコロギー社協力農家 対象：4名（男女）>

- なぜエコロギー社に協力する農家になろうと思ったのか。
- エコロギー社の協力農家になったことで、変化したことはあるか。
- どこまで進学したのか。他のご家族の進学状況はどうななのか。
- （女性農家の方に）女性が仕事に就く時に困難はあるか。
- 今の職業は何か。

- ・カンボジアの女性は社会進出しているか。男女の不平等はあるか。
- ・政治の場に女性が少ない理由は何か。

<JICA カンボジア事務所日本人スタッフ>

- ・高等教育や職業訓練の分野にある男女格差や女子差別という課題に対して、カンボジア事務所で行っていることはあるか。

<RTC（シェムリアップ職業訓練センター）対象：教師 1 名（女性）、生徒（男女）7 名>

- ・なぜこの職業訓練校に入学しようと思ったのか。
- ・出身地の男女の進学率について。
- ・（女子生徒に）結婚や出産、子育てを経験してもずっと働き続けたいか。

< CJCC（カンボジア日本人材開発センター）対象：施設関係者や女子学生>

- ・ビジネスプログラムにおける女性の参加割合はどれくらいか。また、男女ともに参加する生徒はビジネスに問題を抱えている人なのか、またはビジネスはある程度成功していて、もう一步成長させたい人なのか。
- ・授業を受けていて自分のどのような部分が変化していると思うか、例えば、就職へのモチベーションや、自信、将来の夢などの変化について。
- ・男女の進学率についてどのような印象を持っているか。
- ・男女格差はあるか。
- ・女性は出産後や育児中も働くことができるか。

### 3. 調査結果

以下に訪問先ごとに調査結果を述べていく。都合上、要約や省略がなされている。

#### 3-1 JICA カンボジア事務所へのインタビュー結果 対象：Tさん

Tさんは、「高等教育や職業訓練の分野でどのような男女格差があるのか、女子差別があるような事項は存在するか」について尋ねた。男子の方が弁護士などの授業を受けることが多かった10年前などと比べて、女子の進学率も上がり、また、会計などの分野は女子が多い場合もあり、男女差があるとは言い切れないのでは、と述べた一方で、エンジニアリングなどの理系の特定分野や、修士や博士などの大卒以上の学歴では男子が多いという現実がある、とのことだった。

#### 3-2 エコロギー社へのインタビュー結果 対象：同社 CEO の A 氏、現地カンボジア人スタッフ C1さん、C2さん

A氏には、「協力農家の男女比」について尋ねた。単純に男女比では表せず、家族単位での経営が多いとのことだった。また、全体的にコオロギ養殖経営は本業というより副業のような形で、子どものいる母親や父親が経営している状態である。男性が出稼ぎで、女性がコオロギ養殖を切り盛りしている場合もある、とのことだった。

「政治の女性参加が低い」理由について、エコロギー社日本人スタッフの方が、カンボジアの女性は、良い仕事に就ける場合が少なく、地位がある仕事には就きにくい、就くことが珍しい、と話していた。それは、女性の政治参加（特に中央政府のことを指すと思われる）が低い、つまり議員になる人が少ない理由でもあるのでは、と考察していた。また、女性議員がいたとしても、親が政治家であるなどの条件付きであり、世襲制のようになっているとも述べていた。

C1さん、C2さんには、①「エコロギー社で働く前は何をしていましたか」と②「どうして前の仕事を辞めて、エコロギー社に来たのか」について尋ねた。C1さんは、質問①について、障がい者NPO組織のアシスタントをしていた。質問②について、給料はあまり前の仕事と変わらないが、英語とクメール語の通訳の仕事で自己成長するためにエコロギー社に来たとのことだった。C2さんは質問①について、出身のコンポンチャム州で家政婦をしていたことがある。また、縫製工場でも働いていた経験を持っているとのことだった。そして、質問②には、前職の仕事量が多すぎて辞めたとのことだった。

### 3-3 エコロギー協力農家へのインタビュー結果 対象：農家①、②、③、④

#### 【農家①（女性）】

「今の職業」は、近くの小学校での教師。家庭は7人家族（自分、夫、姉、姉の夫、姉の子どもが3人）であり、夫はその小学校の校長を、姉は学校の中で屋台を営んでいる。姉の夫は警察官として働いている。「コオロギ農家になった理由」は、家族が多く、また家にいることが多い姉や姉の夫の仕事の収入の足しにしたいと思ったため。「周辺地域の進学の状況」について、毎日小学校に行ける児童は彼女の体感で70%ほど、残りの約30%は、貧困と親の仕事の手伝いによって行けない日があることで、休む児童の男女差はないようであった。中学・高校の進学率については、クラスの中で1人か2人を除き、ほぼ全員が進学しているとのことだった。以前は、両親が出稼ぎに行っている間、女子が兄弟の面倒を見たり、家事をするべきとの考えが主流であったりして、進学できないなどの事情があったが、それが徐々に改善されている。大学の進学率について、約70%（小学校を100とした場合、大学まで進学した割合は66.8となる<sup>1)</sup>）が進学できていて、両親が頑張って子どもに教育を受けさせよう、という流れが近年ある。「女性が仕事に就く時の困難」について、女性は外で働くと同時に、男性があまりやらない家庭の仕事もしなければいけないため、好きな仕事に就くことができない場合もある、とのことだった。

#### 【農家②（男性）】

「今の仕事」：米作り。「コオロギ農家になった理由」：豊作不作に左右される不安定な収入の米作りに、安定的な収入が見込めるコオロギ養殖を行って、生活の足しにしたいから。「カンボジアの女性の社会進出」について、以前、女性はあまり進出していなかつたが、男女の不平等はない。「住んでいる地域の小中高大の進学状況」について、彼の体感では小学校から中学校は80%の児童が、中学校から高校は70%（小学校の児童全体を100

としたとき 56) の生徒が、高校から大学は 70% (小学校の児童全体を 100 としたとき 39.2) の生徒が進学しているとのことだった。「政治の場に女性が少ない理由」について、女性は家庭の仕事があるが、男性は制限がないからではないかと予測していた。

#### 【農家③（男性）】

「今の職業」：米作りとコオロギ養殖。「コオロギ農家になった理由」：田んぼ以外の収入が欲しいと思ったため。コオロギ養殖農家になったことで、子どもが毎日学校に行き、田んぼの肥料をより多く買えるようになった、と話していた。「男女の格差」については、「無い」との見解を示していた。「政治の場に女性が少ない理由」について、分からぬが副村長は女性である、と述べていた。この他、「家事は誰がやっているのか」という追加の質問をした。家事は自分がしている、妻が家族のお金を稼ぐために縫製工場の前で朝早い時間から夜まで屋台を経営しているため、とのことだった。農家③は農家②と同じ地域だったので、進学率について質問する代わりにご自身について尋ねた。ご自身は、本当は大学まで学びたかったが、父親の仕事を助けるために中学 2 年生で学校を辞めた、と話していた。

#### 【農家④（女性）】

「今の職業」：米作りとコオロギ養殖。縫製工場で長く働いていたけれども年を取り体調を崩してしまったこともあります、辞めた、と話していた。夫は資源回収をしており、家事や育児はご自身がなさっていた。「コオロギ農家になった理由」について、安定的な収入を得ることができるから、また農家になったことで、子どもたちが学校に通うことができるようになった、とのことだった。農家になる前は、娘たちを学校に通わすことはできたが、塾には行かせてあげられなかつたとのこと。収入に満足しているか、という質問に対し、満足していないと答え、娘を大学に行かせたいが今の収入で行かせてあげられるかどうかが心配だ、と話していた。「男女格差」については、「無いと思う」と述べていた。「女性の政治参加が少ない理由」については、分からぬと述べ、村の議員の中には女性がいると答えていた。「住んでいる地域の進学状況」について、あまり分からぬとし、辞める人もいるが、進学する人は多いと思う、と答えていた。ご自身は進学したかったが、兄弟姉妹が多く学校に行くお金が無かつたので、中学 1 年生までしか出でていないとことだった。「女性が自由に仕事を選ぶことができる環境か」については、できること答えていた。

### 3-4 JICA カンボジア事務所スタッフ I さんへのインタビュー結果

I さんは、女性の経済開発と人身取引のサバイバーをサポートするプロジェクトに関わっていた。女性の経済開発では主に、カンボジア政府の女性省と女性の経済的自立を支援していた。プロジェクトの前半では、女性たちの内的啓発を行い、女性局の職員が講師として、国内のコミュニティで女性の啓発活動を実施した。例えば、自信のなさや自分で決めること、自尊心の向上、リーダーシップの促進などだ。様々な活動に参加すること

を促すことで、従属的な女性たちの内的変化を目指したことだった。職業訓練校や大学に行って自立をすることもできるが、大学に行けるような人は 20%ほどで、多くの人にとっては難しいため、そのプロセスをたどらなくても、自分の住む地域で自立できるということを伝えたという。他には、小学校でしか学べなかった農村に住む女性と観光業を掛け合わせて、女性の自立を目指す事業もあった。この事業では、女性が「何をしたいか」を尊重しているとのことであった。今後は、CJCC などで女性の起業の支援、登記や資本の確保も促していきたい、と語っていた。女性が働けない、自立できない原因は必ずしも内面の問題だけではないという。若年結婚という慣習や安全安心な保育園がないため安心して預けられず、子どもを連れて工事現場で働くような女性もいるという。昔は、祖父母に預けて仕事をするということもあったが、都市化で難しくなってしまった。村では柔軟に働くことができたが、都市ではフルタイムの労働が求められるため、子どもを持ち仕事をすることの難しさに拍車をかけているという。教育についての I さんの所感を聞いたところ、徐々に改善されてきてはいるが、STEAM 教育や高等教育の機会は制限があるという。日本と比べて、カンボジアは税制度や社会福祉が不足しているため、家族のために必然的に教育を受けず働くなくてはならない状況であるという。政治で女性参加が少ない理由において、やはり女性は従属的な立場にあり、リーダーシップを発揮したり、声を上げれば状況が変わる、という経験をしたりしてこなかったため、また家庭の仕事や子育てで忙しいためなど、複合的な原因で議員や村のリーダーになることに利益を感じないのではないか、と考察していた。教育的な課題として、論理的思考が欠けていることも指摘していた。女性のリーダーは全くいないわけではないが、政治家の家系の女性や、裕福な良い家系と教育で生まれ育った女性が主に高いポジションで活躍しており、一般的な人がそのようなポジションに就くのはまだ難しいのではないか、と述べていた。人身取引の被害に遭った女性のサポートについても話を聞いた。地方の女性が性産業に従事させられたり、だましで連れ去られ、中国人の妻にさせられたり、といったことが起こっているという。親が子を売ってしまう場合もあるという。その際に、帰る支援や心理的サポート、シェルターでの保護などを JICA で行っているとのことだった。

### 3-5 RTC（シェムリアップ職業訓練センター）へのインタビュー結果 対象：生徒 5 名（男女）

内訳は次の通り。（①女性 19 歳 建築学専攻、②男性 20 歳 マーケティング学専攻、③男性 20 歳 電気学専攻、④男性 23 歳 電気学専攻、⑤女性 会計学専攻）

「両親の職業や収入源」について尋ねた。どの家庭も米作りをしており、それにスイカで建築や屋台、出稼ぎなどをしていると答えていた。他の学生が設定した質問、「なぜ村長は男性が多いと思うか」については、3つ理由があると思うと述べ、1つは田舎の女性はあまり教育を受けておらず、受けていてもそのレベルが低いということ、2つ目は女性には出産や子育てがあるから、3つ目は社会より自分の家族が大事だと思っているから、と

回答した。他にも、カンボジアのことわざに「女性は台所回りしかしない。」というのがあり、家事が仕事だと思われている、と言っていた。「男女の格差はあると思うか」について、女子生徒の回答は、「現在は小学校から高校までは格差はほとんどないと思うが、高校を過ぎたら格差が出て、高校卒業時は結婚適齢期で、両親が結婚させてしまうから女子はあまり大学まで進めないことがある。その一方で男子は自由があると思う」、「女性が家事のみをしなければいけない、男性は外で働くなければならないというのは格差を感じる」との内容。一方、男性生徒からは「あまり格差を感じない」との回答が多かった。

「男女の賃金格差」について、能力によってなので、男女で差があるという感じではない、とのことだった。「カンボジアでは、女性が出産や子育てをしても、キャリアに影響は出ないか」について、出産後は 3 か月休むことができ、会社に戻ってこられ、休んでいる間も給料をもらうことができるという。3 か月会社を休んだ後は、自分の母（子どもからみた祖母）に面倒を見てもらうことがあり、もし祖母がいなかつたら、一時的に仕事を辞めて、子どもの面倒を見ることがある、との回答だった。「出産や子育てを経ても働き続けたいか」について尋ねたところ、「自分の子どもにも高等教育を受けさせたいので、働き続けたい」とのことだった。「自分の出身地での進学率」については、住んでいる地域によって異なり、「女子は大体高校までで、大学まで進学する人もいるが、男女ともに大学まで行かずに 16 歳～18 歳で結婚する人や、男子では働く人もいる」との回答や、「女子は小学校から大学まで、75%くらいの人が通えている。ただ、男子は両親の仕事を手伝うため、30%しか行けていない」との回答、「女子は小学校から大学まで 50%くらいの人が通えていて、男子は両親の仕事や出稼ぎで 30%ほど」との回答、「小学校から高校まで通う女子は 50%、大学まで通える女子は 1 人や 2 人までで、両親の仕事を手伝うために男子は高校まで 30%くらいの人しか行けない」との回答があった。また、「早く働くほうが良いと思われているため、男子は中学 2 年生まで通い、女子は教育が必要ではない」という「村の慣習」がある点、「高校から家までが遠く、通学に時間がかかり危険（レイプに遭う危険性）だから中学 3 年生までしか通えない」と話していた。両親に反対して勉強を続ける子もいるが、少ない、との回答だった。「なぜ RTC に入学しようと思ったのか」について、「卒業したら仕事が得られ、両親を助けることができるから」、「専攻する人が女子で少ない建築学を学んだら、建築学関係の仕事を探しやすいと思った」、「将来の自己成長に繋がるから」、「ビジネスを始めるため」との回答があった。

### 3-6 CJCCへのインタビュー結果 対象：施設関係者や女子学生

CJCC スタッフより CJCC の概要について説明を受けた後、CJCC の日本語コースに参加している学生にインタビューを実施した。

CJCC スタッフの方からは、ビジネスコースに女性が 35%ほどいることや、育成過程である Early Stage は 8 チーム中 5 チームが女性であるという事前の説明を念頭に、「どのような状態の女性起業家が参加するのか」について尋ねた。このコースに参加する人は大体

がビジネスや輸出を拡大させたい人であり、マイクロビジネスや零細企業の経営立て直しを支援するものではない、と述べていた。しかし、問題意識は持っているとのことで、いずれ彼ら向けのコースを作ることが理想である、と語っていた。

CJCC の学生には、ジェンダーに関するいくつかの質問をした。「村のリーダーは女性がなりやすいか、男性がなりやすいか」について、どの学生も昔は男性が担っていたと答えた一方で、政府が女性の登用を少しずつ増やそうとしていて、以前よりはいくつかの役割を女性が担ってきている、と述べていた。以前は「女性はできない」という伝統的な社会規範が女性の機会を制限していて、「男性が強い」というと考えていたという。女性は家事や結婚、家族の世話をのみをするべきだと考えていた。この考え方は未だ残りつつも、考え方を変えようという動きがある。女性も教育を受け始め、田舎に住む女性も権利や教育のために戦っている、と述べていた。政治家だけでなく、他の職業にも男性ばかりがなりやすいものがあり、医者や外科医などがその例だと述べ、女性は看護師などが多く、権限のあるポストには就かないという。もちろん能力による部分もあるが、小学校などの初等教育での教員は女性が、高等教育や大学の教員は圧倒的に男性が多い、ということを指摘していた。女性が教育を受けていなかった時代が影響しているのだろう、と考察していた。「女性は出産後や育児中も働くことができるか」について、女性は出産後も仕事に戻ってくることができる、と答えていた。仕事に復帰した後は、夫か自分の両親が子どもの面倒を見ているようだった。出産後、働き方を変えることによって両立していた、という体験談もあった。「男女格差」について、上の回答と同様、権限のある高いポジションにあまり女性がいないという点を挙げていた。格差のほか、女性への差別行為についても述べていて、女性はセクハラを受けたり、いじめに遭ったりすることがあり、女性が尊重されていない部分もある、とのことだった。また、田舎の貧しい家庭では、娘よりも長男の教育にお金をかけるため、優秀な女子が教育を得られないことがあるという。貧困以外にも、学校までの距離が遠い、女子の一人暮らし心配、インターネットが通じないなどの原因もあり、教育を受けられない人がいると述べていた。また、女性の肌の色や見た目によって、同じ仕事に申し込んでも、異なる業務を任せられたりする差別もあるという。「自分の出身地での進学状況」について、田舎においても、以前よりはかなり教育の重要性を皆が理解してきている現状がある一方、田舎では貧困により、アルバイトをして家族を支える必要があるため、学ぶ時間がなく途中で学校を辞めてしまう人がいるという。他の学生の出身地では、小学校卒業でその後進学できないのは大体が女子であるという。原因是、学校が遠くその道のりが安全でないからであるらしい。男性に限って、都市部で住宅を得られなかつた大学生や学者のためにパゴダ(お寺)が食事や住居を提供する場合があるという。これは、学費の援助ではなく、最後まで通うことができるようにするためのものである、と話していた。「CJCC のコースを将来にどう生かしたいか」について、ソーシャルスキルを高め、引っ越し思案などろを直して、自分に自信を持ち自分の意見を発信したり、より高い教育と仕事のために若い世代を鼓舞したりできるようになりたい、と答えていた。

## 4. 考察と調査の限界、反省点

この報告書は、女性の社会経済的地位やその男女格差をインタビュー結果から考察するというものであるが、社会経済的地位を測る指標は様々であり、幅広い考慮すべき項目があり、また時代によって産業や価値観も移り変わるものであり、それを正確に測ることは難しい。また、この短い調査期間でインタビューすることのできた人数は少なく、これを一般化することは不可能であるため、ここで得られた結果は、全体の一部として捉える必要がある。よって今回は、インタビュー先で聞き出すことができたことと、社会経済的地位を測るうえで最も指標として取り扱われることの多い教育の程度や職業、それに関係する項目について、社会経済的側面とジェンダーを交えながら、調査で得られた結果から推測しうるものを考察していきたい。

### 4-1 教育

現地ガイドのブティーさん（男性、60代）を含め、多くのカンボジア人が口をそろえて言っていたのが、以前と比べてカンボジア人の教育に対する態度が変わった、つまり教育を重要視するようになった、ということだ。事前調査で得た情報では、2016-17年 の実績で見ると、就学率（小学校 93.5%、中学校 55.7%、高校 25.1%）、中途退学率（同 4.6%、同 17.0%、同 19.4%）、修了率（同 79.9%、同 42.6%、同 20.2%）とも（いずれも私立学校を除く数値）（JICA, 2019）低い状態である一方、農村部と呼ばれるタケオ州の村においても、比較的高い進学率であるように当初感じた。しかし、RTC の学生や CJCC の学生からは、田舎の生活が厳しい家庭では親の仕事を手伝うため、学校に行けない、辞めてしまうことが多い、とのことだったため、地域によって、つまり都市と農村では大きく状況が異なることが窺える。

ジェンダーの観点での考察を行う。男女で大学の学部卒以上の学歴以外は、著しく進学率に差があるとの話は多くはなかった。しかし、地方や村の「慣習」によって、男女ともに左右されている事実があることを今回確認した。常に注目がなされるのは、女子に対する「慣習」であり、例えば、早く結婚と出産をし、家事を通じて家族を支えることが教育よりも重要視されることで教育を受けられないこと、（女性が就くべき職業ではないという偏見から）、就きたい職業に就けない、といったことが挙げられる。そして今回のインタビューでも、それらについての言及が多くかった。その一方で、女子に比べ男子の方が進学率の悪い地域では、男子を家の重要な労働力として必要としているため、学校を辞めてしまうという原因があった。男女それぞれが異なる原因で学校を辞めなければいけない状況になってしまっていると考えられる。しかし、その根本には貧困が早期労働と早期結婚（女性は働き手とみなされず、口減らしの意味もあるのでは、という点に基づく）に結びついているのではないかともいえる。女子の教育が妨げられる原因として、学校までの道が遠く、道中に連れ去りやレイプなどの危険性があり（JICA カンボジア事務所インタビューの項も参照）、安全でないからや、一人暮らしをさせるのが不安だからという理由が

挙げられていた。単に学校を増やすだけでなく、どこに建てるのかが重要であり、公共交通機関・スクールバスを普及させること、そのために道路の整備など地方のインフラを整備することなど、包括的な解決が必要だと考えられる。

#### 4-2 職業と給料

学生や農家の方にインタビューすることが多かったため、あまり職業のことや女性単体の収入について質問することはなかったが、RTC や CJCC の学生によると、男女でもらえる給料に差はなく、基本その人自身の能力によって決まるという。しかし、CJCC の学生からは、同じ仕事に対してもらえる給料は同じだが、そもそも女性が就くことのできる役職が低いことが問題である、ということを話してもらった。例えば、同じ職場内でも、男性のほうが昇進しやすく、管理職に就きやすいことがある、と述べていた。加えて、就く職業も男女で異なることに言及し、男性は外科医などの医者、女性は看護師、男性は高等教育の教師で、女性は初等教育の教師など、と例を挙げていた。さらに、今回得た回答の中には、理系やエンジニア系の科目にも男女差があるとのことだった。しかし、これを考察するには他のことについても検討する必要があると考える。まず、男女で科目によって学ぶ機会が異なるのか、女性がなれる職業が外部の可視的なまたは不可視的な原因によって制限されているのか、などについてである。また、職業選択においては、「女性が家事をしなければならない」という認識、つまり男女分業について今回の調査では深堀りすることができなかつたため、今後の課題として設定しておきたい。

女性の経済的自立について、CJCC の学生の一人は、改善されつつある、と言及していたが、JICA カンボジア事務所の I さんは、農村部では伝統的な「慣習」により、男性に対して従属的で、自己決定や自尊心、自信、リーダーシップが欠けてしまっていると語っていた。JICA では、コミュニティに講師を呼んで農村女性に啓発を行ったり、観光ビジネスなどの社会活動への参加を促したりすることにより、地方での経済的自立や社会的地位の向上を図っている。このような上からの啓発は、現在ほぼ自治体トップの女性がいない状況である、女性の政治参加を促すだけでなく、より重要な役職での登用や活躍の促進につなげができると考える。

#### 4-3 社会福祉の必要性

RTC や CJCC の学生に、「仮に出産をして子育てを始めても、仕事を続けるか/続けられる状況か」について質問した。彼らは、働いている時と同様に給料がもらえる産休が取れることや、育児中も両親に自分の子どもを預けてみてもらえる、と述べていた。それは、比較的大きな家族で住むカンボジアの家族形態だからこそ成り立ちうるものであると考えたが、JICA カンボジア事務所スタッフは、自分の両親から離れて住むことの多い都市部だと、両親に預けることができないため、仕事場に子どもを連れていくこともある、とのことだ。保育園に安心して預けられない現状もあるという。都市部での労働人口の増加や、

今後カンボジアでも核家族化が進むとすれば、子どもの安全や女性の働きやすさ、キャリアの構築を実現するうえで足かせになるのではないか。そのためにも、乳幼児に対する社会福祉政策が必要になってくるのではないかと推測する。そして、実態を把握するためにも、出産と子育てを経験した女性のインタビューや他の調査が不可欠となる。今回は、出産と子育てによるキャリアへの影響に関して、当事者であるカンボジア人から聞くことはできなかつたが、以後の課題として設定しておきたい。

## 5. 調査に参加した感想

今回のスタディツアーは、今までにないくらいとても大きな経験となった。グローバル文化学を学びながら、いわゆる途上国に一度も行ったことがなかったので、現状を知らないのに意見を述べているような感じで、どこか居心地の悪さを感じていた。初めて訪れて感じたことは、もちろんこの調査で多くの課題やすぐには解決できない大きな問題を知り、悔しく思うことはあったが、それよりも社会を変えようとする途中の熱意や、町の活気であった。出会った方々がとても心優しい方であったのと、短い滞在ですべてを見たわけではなく、良い部分が目立つたのかもしれないが、とてもポジティブな印象を持った。途上国という名前だけで、先進国と比べてネガティブな印象を持たれがち（私も含め、周りの人がかなりそう思っているようである）だが、とても魅力のある国であるし、様々な人と関わることで日本と異なる問題はもちろん、自分自身への気づきもたくさんだったので、とても充実した調査となった。インタビューの方法や質問内容には課題が見つかったのも確かだ。事前調査も不十分であったため、この反省を次の学びに活かしながら、今後とも何らかの形でカンボジアに関わっていきたいと強く思った。

## 6. 注

1. 小学校の児童数を 1 クラス 44 人としている World Vision

[https://www.worldvision.jp/children/education\\_07.html#d0e9d87eb78fa54e47cd213ca7606442](https://www.worldvision.jp/children/education_07.html#d0e9d87eb78fa54e47cd213ca7606442) (最終閲覧日 10 月 31 日) を参考にした値

## 7. 参考文献

JICA, 2019, 『カンボジアにおける教育と職業訓練の現状』

[https://www.jica.go.jp/Resource/project/cambodia/018/materials/ku57pq0000221pyv-att/education\\_and\\_vocational\\_training.pdf](https://www.jica.go.jp/Resource/project/cambodia/018/materials/ku57pq0000221pyv-att/education_and_vocational_training.pdf) (2023 年 10 月 31 日最終閲覧)

UNWOMEN, “Cambodia”, DATA,

<https://data.unwomen.org/country/Cambodia> (2023 年 10 月 31 日最終閲覧)

JICA, 2016, 『事業事前評価表』

[https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2016\\_1500240\\_1\\_s.pdf](https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2016_1500240_1_s.pdf) (2023 年 10 月 31 日最終閲覧)

## 「復興」を問い合わせる —ポル・ポト政権時代以後に紡がれる語りに着目して—

文教育学部人文科学科哲学・倫理学・美術史コース 2年  
平子 七海

### 1. 調査テーマ

「復興」という語を考える。人が「復興」と呼ぶものには、辛い過去を経験してもなお生き抜くヒロイズムのストーリーがあるが、輝かしい未来へと力いっぱいに向かっていくエネルギーが潜んでいる。しかし、「復興」という語を使うとき、どうしても人を束ねずにはいられない。実際、人が「復興」という語を当てる出来事やコミュニティの中には、我々が想像する以上に様々な語りやライフストーリーがある。ならば、それらを前提とした上で「復興」を説明できないだろうか。また、カンボジアはときに、内戦によって荒廃した国土からの復興を果たした国として語られる。しかし、カンボジアでフィールドワークを行った小林は著書『カンボジア村落世界の再生』の中で、世界の注目を集めたポル・ポト政権時代に関してステレオタイプが氾濫していることを指摘した上で、これまでの報道の多くが「『ジェノサイドの地』、『ポル・ポト政権の支配の犠牲者』、『地雷』、『貧困』といったステレオタイプによって人びとの存在を断片化することを前提としていた」と述べている（小林知 2011、p.8）。この記述は筆者にとって、非当事者としての我々のポル・ポト政権時代を見つめるまなざしや語りが、無意識に当事者にスティグマを与え、ときに事実を歪めてしまってはいないだろうかという問題意識を抱ききっかけとなった。

これらの問いに端を発し、本稿では、ポル・ポト政権時代から40年以上が経過した現在だからこそ語られる語りや、人々の心理的要素、内的体験に着目することで、メディアや有識者による語りには包摂されてこなかった重層的な社会的状況、心情、そして未来へのまなざしをインタビュー調査によって可視化していく作業を通して、ポル・ポト政権時代からの「復興」とは一体何を意味するのだろうかということを改めて問うていきたい。

### 2. 調査設問・結果

以下に、調査設問とその回答をまとめた。なお、ここでは、インタビュー対象者の発言の要点を箇条書きで記す。また、調査においては、対象者の年代つまりポル・ポト政権時代当時の社会を経験しているかどうかによって質問内容が異なる。

- 調査①：ポル・ポト政権時代当時を生きた人へのインタビュー調査
- 対象者：ガイドのブティーさん（60代男性）

Q1：ポル・ポト政権下の時代（1975年とする）に何歳だったか。

A1：1975年当時は13歳だった。

Q2：当時、どのような経験をしたか。最も記憶に残っているエピソードは何か。

A2：

- ・当時は、家族が別々の労働キャンプに泊まることが強制された。
- ・子どもたちの仕事は、肥料を作つて運んだり、水路を作つたりすることだった。乾季には収穫した米を運ぶこともあった。若者たちは、ダムや新たな畑を作るなど、体力の必要な仕事を任されていた。
- ・食事は、おかゆよりも薄いおもゆのようなものと、質素なスープだった。大きな鍋を使って大人数の食事を一度に作っていた。
- ・毎日ひどい仕事をさせられ、食事も少なかったため、徐々に痩せていき、病気になりやすくなつていった。
- ・労働キャンプにいた時代に最も印象的だった出来事は、自分のお父さんが亡くなったことと、自身がキャッサバ畑で旧人民<sup>1</sup>軍の人に捕まったことの2つ。
- ・自分が捕まったとき、殺されるだろうと思っていたため、今を生きているのが夢だと感じことがある。
- ・お父さんは日々の労働により体が弱くなり、ある日畑で倒れてしまった。仲間たちがお父さんを労働キャンプへ運んだが、おもゆすら食べられないほどの危篤状態にあり、入院することになった。
- ・ポル・ポト政権時代には看護師や医師が知識人として殺されたために、当時の病院では旧人民側の人々が漢方薬をお父さんに飲ませた。病院では、個人の症状や体质に関係なく、すべての患者が同じ漢方薬を飲まされていた。
- ・自身のお母さんが、お父さんが入院していることを人づてに知り、お母さんは夜にこつそりと労働キャンプを抜け出し、お父さんの様子を見に病院へと向かった。
- ・その夜、お父さんはお母さんに  
「見に来てくれたことは嬉しいが、もう自分（お父さん）のことは気にしないでほしい。自分の代わりに、お母さんが頑張って子どもたちを守ってほしい。子どもたちのことをよろしくお願いします。」  
と伝えた。お父さんはすでに自分の死を覚悟していたのではないだろうか。
- ・お母さんは自身の指輪と、旧人民側の人が持っている卵を交換してもらい、次の夜に病院でその卵をお父さんに食べさせてあげようとした。お父さんは、そのゆでたまごを口にくわえたまま、咀嚼することもできずにそのまま亡くなってしまった。

Q3：労働キャンプにいた時代に、何が生きる希望だったか。

A3：労働キャンプにいた生活の中でいちばん嬉しい瞬間は、家族に会えたときだった。当時、ごくたまに、家族で同じ労働キャンプに泊まらせてもらえることがあった。

**Q4**：労働キャンプにいた日々の中では、時間の流れをどのように感じていたか。

**A4**：

- ・労働キャンプにいた3年間は、とても長く感じた。15年間ほど経っているように感じた。
- ・労働キャンプにいる間は、時計を使用することが禁止され、時間も日付も分からなかつた。
- ・とても苦しかったため、神様に、どうか私を長生きさせないでくださいとお祈りしていた。

**Q5**：これからカンボジアの未来を生きる子どもたちに伝えたいことや残したい想いは何か。

**A5**：

- ・いちばん大切なことは平和。
- ・一生懸命に勉強して、知識をつけ、この国を発展させてほしい。
- ・同じ国や世界に生きる人々が、お互いのことを恨み合っていたら、いつまでも戦争が終わらない。だから、恨むということをしないでほしい。
- ・子どもたちには、ポル・ポト政権時代のことを教えてくれた人のことをいつまでも覚えていてほしい。そして、将来このようなことが二度と起こらないようにしてほしい。

**Q4**：ポル・ポト政権時代のカンボジアの歴史を、未来へと語り継いでいくことは必要だと思うか。

**A4**：語ることは辛いけれど、みんな（ブティーさんのようにポル・ポト時代を生きた方々）は、若い世代に伝えたいと願っている。教科書に詳しく書かれていなからこそ、口で伝えていきたい。

- 調査②：ポル・ポト政権時代以後に生まれた人々へのインタビュー調査
  - 対象者：ecologgie 社（在タケオ州）カンボジア人スタッフ1名、JICA カンボジア事務所カンボジア人スタッフ2名（男女）、王立プノンペン大学の学生4名、Wonderfy(株)教育アプリ導入小学校教員2名
- なお、調査②におけるこれらの対象者の年代は、全員が10代～30代である。

**Q1**：学校の授業で、ポル・ポト政権時代の人々の経験を学ぶ機会はあったか。どのように学んだか。

**A1**：

- ・カンボジアではポル・ポト政権時代のことが「タブー」として扱われる。
- ・公立学校での授業や教科書において、ポル・ポト時代に関する記述は非常に制限的であ

る。

- ・ポル・ポト政権時代のことを表立って話すことができない状況にある。私立学校ではポル・ポト政権のことやその時代に関連する場所を訪れ学ぶ機会があるが、公立学校ではあまり聞いたことがない。
- ・学校の歴史の授業では、ポル・ポト政権時代のことについて深く学ぶことはなかった。
- ・もっと先の未来では、学校の先生たちがポル・ポト政権時代のことを説明できなくなるかもしれない。

**Q2**：学校の授業以外で、ポル・ポト政権時代の人々の経験を学ぶ機会はあったか。どのように学んだか。

**A2**：

- ・ポル・ポト政権時代については、NGO団体で学んだことがある。
- ・母親から学んだ。
- ・当時のことを知るには、自分でソーシャルメディアや報告書を通じて調べたりする必要がある。
- ・ポル・ポト政権時代の大量虐殺のことや労働キャンプでの辛い生活について、ソーシャルメディアの動画を見て知った。
- ・ポル・ポト政権時代について詳しく学ぶには、カンボジア人ではなく、フランス人などの外国人が著した本を読む必要がある。
- ・祖母から自分にポル・ポト政権時代のことを話すことはあるが、孫である自分から祖母に当時のことを聞くことはしない。

**Q3**：ポル・ポト政権時代のカンボジアの歴史を、未来へと語り継いでいくことは必要だと思うか。

**A3**：

- ・祖母が母に語り、母が自分に語ったように、自分も子どもへと語り継いでいきたい。
- ・歴史を学ぶことはとても重要で、歴史を学ぶことによって過去の過ちを避けるべきである。

### 3. 考察

#### 3-1 「タブー」としてのポル・ポト政権時代

ポル・ポト政権時代以後に生まれた10代～30代の方々にインタビュー調査を行った結果、ポル・ポト政権時代のことをタブーとして扱う複雑な社会状況が浮き彫りとなった。調査②において複数の若者たちが揃って口にしていたのは、公教育においてポル・ポト政権下についての学びは制限的であること、そして、カンボジア社会の中でポル・ポト政権時代のことを公に話すこと自体が「タブー」とされているということであった。これらの

発言の背景にあるのは、ジェノサイドに加担した者たちをどう語るかという問題と、当時の過酷な労働や辛い内的体験をした人々をめぐる語りにくさの問題といった、いわば二重の語りにくさであると考える。インタビュー調査の対象者のうちの1人は、「今日におけるカンボジア政治の中にも、当時の政権でいうところの加害者側－被害者側が混在している」と語っていた。この点において、自然災害の文脈で使用される「復興」とは全く異なる、人為的な秩序混乱を経験したコミュニティに向けて使用される「復興」概念の複雑さがより一層際立つ。王立プノンペン大学に通う大学生の1人は、「もっと先の未来では、学校の先生たちがポル・ポト政権時代のことを説明できなくなるかもしれない」という考えを述べていた。この発言は、人が人を深く傷つけた負の歴史を語らない、あるいは語ることのできない現在のカンボジアの公教育は、いわば風化の装置として機能しつつある問題を示唆するだろう。

### 3-2 記憶の継承を担うものたち

では、果たして本当に、ポル・ポト政権時代の記憶は風化の一途を迎るだけなのだろうか。若者たちのポル・ポト政権時代に関する学びの経験についてインタビュー調査をさらに進めていくと、実際のところ、彼らは公教育とは別の場面でポル・ポト政権時代について学ぶ経験を得ていることが分かった。具体的には、1つは家庭内での口承文化、もう1つはソーシャルメディアの存在といった2つの側面が浮かび上がってきた。

調査②でインタビューに協力してくれた若者たちが筆者にまず語ってくれたのは、祖母や母など家族からポル・ポト政権時代のことを学んだというエピソードだった。では、なぜ、前述したような「ポル・ポト政権時代＝タブー」といった国民間での共通認識が存在するにも関わらず、家庭内での口承が広く存在しているのだろうか。その背景には、やはり、「タブー」だとしてもなお次世代へと受け継ぎたい想いや信念が、当事者たちの心にずっと宿り続けているからだろう。ブティーさんは、ポル・ポト政権時代のカンボジアの歴史を未来へと語り継いでいくことは必要かという質問に対して、「語ることは辛いが、当時を生きた人々は若い世代に伝えたいと願っており、教科書に詳しく書かれていないからこそ口で伝えていきたい」と答えていた。

他方、調査②においては、ソーシャルメディアで投稿される動画やブログを通してポル・ポト政権時代のことを学んだという声も散見された。この背景には、日本と同様にカンボジア国内においても若者のスマートフォンやソーシャルメディアの利用率の高さがあると想定される。実際、アメリカ合衆国国際開発庁 USAID による調査では、2016年時点でのカンボジアでの携帯電話の保有率は96%に達しており、ソーシャルメディアの利用が進んだという（上田広美 2023, p.39）。ソーシャルメディアは、ポル・ポト政権下を生きた人々の証言や写真、映像を記録・共有し、世代を超えた歴史理解の手段として利用されていることをうかがい知ることができる。

### 3-3 受け継がれる傷、託される希望

内戦下のカンボジア・プノンペンを離れ、米国に移住した背景を持つカターリヤ・ウム氏は、著書『From the Land of Shadows: War, Revolution, and the Making of the Cambodian Diaspora』の中で、以下のように述べている（Khatharya Um 2015, p.258）。

For many survivors, the passage from trauma to mourning means living with loss, not just of things in the past but of a future that may have been but will never be. For the generation that follows, it is about living with a “double awareness,” as Genard Fromm puts it, a simultaneous sense of knowing and not knowing.

(多くの生存者にとって、トラウマから哀悼に至るまでの道は、過去の出来事だけではなく、本来はありえたかもしれない未来への喪失とともに生きることを意味する。次の世代にとっては、ジェナード・フロムが言うように「二重の意識」、つまり知っているようで知らないという感覚を同時に持ちながら生きることである。)

つまり、ポル・ポト政権時代を生き延びた人々にとっての今とは、喪失感とともに生きることもある。その喪失という語の中には、過去に起こった出来事だけではなく、その出来事によって奪われた、あり得たかもしれない未来の喪失も意味するだろう。当事者にとって、ポル・ポト政権時代以後を生きることは、展開されたかもしれない潜在的な未来への憧れを抱き続けることになる。他方、ポル・ポト政権時代を経験していない次の世代は、「知っている」という感覚と「知らない」という感覚を同時に持ちながら生きる。それはつまり、歴史的出来事とその影響を認識しながらも、過去の体験の深さを完全に理解することが不可能であるということであり、まさに受け継がれたトラウマの複雑さを描写する。

ならば、ポル・ポト政権時代からの復興とは何を意味するのか。ここで改めて、この問いに答えよう。それは、次の世代もその出来事を語り継いでいるという状態なのではないだろうか。なぜなら、ポル・ポト政権時代を生き延びた人々と次の世代の人々をつなぎとめるのはことばであり、それはことばの力を信じ続けること、語り継ぐという行為によって実現されるからだ。

ポル・ポト政権時代以後に生まれたカンボジアの若者たちは、未来に対して何を想うのか。調査②でインタビューに協力してくださった方々からは、「祖母が母に語り、母が自分に語ったように、自分も子どもへと語り継いでいきたい」「歴史を学ぶことはとても重要で、歴史を学ぶことによって過去の過ちを避けるべきである」といった発言があった。彼らは、カンボジア社会で毎日を生きていく中で、ポル・ポト政権時代に対する語りにくさを肌で感じながらも、同じ過ちを決して繰り返してはならないという強い意志と記憶の継承の重要性を強調して筆者に語ってくれた。

そして、ポル・ポト政権時代を生きたブティーさんがカンボジアの子どもたちへ託すの

は、平和への想いであった。これからカンボジアの未来を生きる子どもたちに伝えたいこととして、以下のように語ってくれた。

「同じ国や世界に生きる人々が、お互いのことを恨み合っていたら、いつまでも戦争が終わらない。だから、恨むということをしないでほしい。でも、子どもたちにはポル・ポト政権時代のことを教えてくれた人のことをいつまでも覚えていてほしい。そして、将来このようなことが二度と起こらないようにしてほしい。」

かつて労働キャンプで、長生きさせないでほしいと神様に祈ったブティーさんは今日、人が人を恨むということのない平和なカンボジアの明日を祈る。復興のその先へ、カンボジアの人々はこれからも力強い歩みを進めていくだろう。そこで語られるのは、当時の人々に降りかかった悲劇についてだけでは決してなく、被害－加害の分断を超えた、人を信じることそれ自体の尊さであるだろうし、次の世代もまたその語りに応答するに違いない。

#### 4. 調査に参加した感想

ずっと、カンボジアという土地で、そこに生きる人々の生の語りを聞きたかった。現地調査に参加する前まで、筆者が日本語の教科書で学んだ「ポル・ポト政権時代」と、当事者としてその時代を生きた人々にとっての「ポル・ポト政権時代」が同じものではないような気がした。また、同じでないことは、どのような意味を持つのだろうかと問うたとき、現地でその答えを見つけたいと思った。そして、ポル・ポト政権時代以後のカンボジア社会を生きる人々の姿から、筆者自身の力でもう一度「復興」というものを解釈していかなかった。現地調査を通して筆者にライフストーリーを語ってくれたガイドのブティーさんは、笑顔と優しさの人であり、一方で、ポル・ポト政権時代に亡くなったお父様のことを話そうとすると言葉を詰まらせ涙を流す人でもあった。過去のトラウマや辛い記憶、生きていてほしかった大切な人の思い出を他者に語るということは、きっと、大変な痛みやエネルギーを伴う。だからこそ、その語りは誰かの胸を打ち、形を変えながらまた違う誰かへと語り継がれる。

ポル・ポト政権崩壊から44年の年月が経過した今日において、ポル・ポト派の中心人物は亡くなり、裁判も停止状態にあり、学校教育ではポル・ポト政権時代の大量虐殺における責任の所在を真っすぐに問うことができずにいる。このような現状を前にして、カンボジアの再生や復興を語るということは、ときに、その国に生きる当事者たちの視点がそぎ落とされていく危うさを孕んでいる。だからこそ、過去に起きた出来事をまっすぐに見つめ、「復興」の概念にまで立ち戻り、再定義し続けていくことが大切なのである。

復興という言葉ひとつで個々の感情を束ねられてしまわぬように、そして、そこにはどこまでも複雑で重層的な心情が息づいているということを何度も思い返せるように、語りという営みがいつまでもカンボジアの土地に受け継がれていくことを願う。

#### 5. 注

1. 旧人民とは、ポル・ポト政権発足以前から農村部に居住していた人々のこと。  
ポル・ポト政権はカンボジア国民を新人民と旧人民に分け、知識層や資本家など主に都市部の住民は新人民とされた（木村文 2019）。

## 6. 参考文献

- 上田広美, 岡田知子, 福富友子 (2023) 『カンボジアを知るための 60 章【第 3 版】』明石書店
- 小林知 (2011) 『カンボジア村落世界の再生』京都大学学術出版会
- 山田寛 (2004) 『ポル・ポト〈革命〉史 虐殺と破壊の四年間』講談社
- Khatharya Um (2015) From the Land of Shadows: War, Revolution, and the Making of the Cambodian Diaspora, the USA: New York University Press.
- 木村文 (2019) 「祖国を失うということ～ポル・ポト時代を日本で生き延びたカンボジア男性の話～」朝日新聞 GLOBE+ <https://globe.asahi.com/article/12629669> (2023 年 11 月 22 日最終アクセス)

# カンボジアにおける地雷問題の形骸化と取り残された人々

文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2年  
矢野 紗彩

## 1. 調査テーマと地雷について

### 1-1 調査テーマ

本稿では、カンボジアにおける地雷問題と地雷被害者の社会的立場について現地でのインタビューをもとにまとめていく。特に、今回のスタディツアーやでは都市部と農村部の両方でインタビューをする機会があったため、都市と農村という観点からも、カンボジアの人々にとって地雷とはどういうものなのか、地雷被害者への支援はあるのかを分析する。

私がカンボジアという国に興味を持ったきっかけは『地雷ではなく花をください』<sup>1</sup> という絵本を読んだことであり、そこからカンボジアに多くの地雷が埋められた歴史と地雷被害にあった人々への支援について調べたいと思った。

### 1-2 地雷について

カンボジアでは、1970 年代に始まった内戦の間に、多くの地雷や不発弾が国内に持ち込まれた。地雷とは、土地に埋めたりして敷設され、人や車両の存在、接近、接触によって起爆・爆発する弾薬類を指す。（小向 2015、p.9）カンボジア政府はオタワ条約（対人地雷禁止条約）の締約国であり、2025 年までに対人地雷除去完了を目指している。Landmine and Cluster Munition Monitorによれば、1979 年から 2020 年までの地雷・不発弾被害者は、64,720 人である一方、2017 年の死傷者は 58 人で、未だに被害は続いているものの減少傾向にある。

地雷には一度埋められれば半永久的に残るという残存性や、兵士だけでなく一般市民や子どもが被害にあうという無差別性がある。さらに、地雷はインフラ整備や農業活動の妨げになったり、国境を超えて移動する人々の脅威にもなったりするなど、長期的な影響が大きい。（小向 2015、p.10）地雷被害者支援や地雷回避教育などの地雷問題解決の中心は長年、多くの国際 NGO・NPO が担ってきた。

## 2. 調査設問

今回の調査では、プノンペン、シェムリアップ、タケオの 3 地域でのインタビューを行った。インタビュー対象者にはそれぞれ出身地を答えてもらい、プノンペン出身のインタビュー対象者とそれ以外の地域出身の対象者を分けて、都市部と農村部の意見とする。また、インタビューは、通訳を通して行ったものと、英語で行ったものの 2 種類があるが、本稿では全て日本語で記述する。

調査中に偶然出会った地雷被害者の男性へのインタビューは、現地住民へのインタビュ

一内容とは異なるため、2-2 で設問の概要を述べ、3-2 でインタビュー内容を詳しく述べる。

## 2-1 現地住民へのインタビュー

- ①地雷と聞くと、どんなことを考えるか。(イメージ)
- ②学校で地雷回避教育を受けていたか。
- ③今までに、あなたの家族や友人、周りの人で地雷の被害に遭った人はいるか。
- ④地雷被害者への支援は行われているか。

表 1 及び 3-1 から 3-4 までの調査結果に用いるインタビュー回答者 15 人は、地雷に関する質問項目に回答した者のみに限る。以下の表が回答者一覧である。不明なところは空欄になっている。

表 1 インタビュー回答者

	場所	年齢	性別	出身地
A	ecologgie 社事務所 (タケオ)		女性	タケオ
B	ecologgie 協力農家	56 歳	女性	タケオ
C	ecologgie 協力農家	53 歳	男性	タケオ
D	ecologgie 協力農家	37 歳	男性	タケオ
E	ecologgie 協力農家	40 歳	女性	タケオ
F	Wonderfy (株) 教育アプリ導入小学校 (プノンペン)		女性	コンポンチャム
G	Wonderfy (株) 教育アプリ導入小学校	19 歳	女性	プレイ・ヴェーン
H	Wonderfy (株) 教育アプリ導入小学校	19 歳	男性	プノンペン
I	RTC (シェムリアップ職業訓練センタ ー) <sup>2</sup>		男性	シェムリアップ
J	RTC		女性	シェムリアップ
K	RTC		女性	シェムリアップ
L	CJCC (カンボジア日本人材開発センタ ー) <sup>3</sup>	18 歳	女性	プノンペン
M	CJCC	18 歳	女性	プノンペン
N	CJCC	22 歳	男性	プノンペン
O	CJCC	19 歳	女性	プノンペン

## 2-2 地雷被害者へのインタビュー

地雷被害者へのインタビューは元々予定されていなかったため、はじめに通訳の方にインタビューの許可をとってもらい、主に被害にあった経緯やこれまでの生活について通訳を通して話を聞いた。なお、今回の調査中にインタビューできたのは 1 名だったが、その他にもプノンペンのマーケットにて、下肢を失っており木の板に乗って移動する男性 1 名と、プノンペンのマーケットで車椅子に乗って物乞いをしている男性 1 名の地雷被害者と思われる方を見かけた。

### 3. 調査結果

#### 3-1 現地住民へのインタビュー

##### ①地雷についてのイメージ

本調査では、インタビューの際に、対人地雷や不発弾も含めて「地雷」と総称した言葉を用いてインタビューを行ったが、通訳の方を通してインタビューをする際も、英語で話を聞く際も最初は「地雷」と聞いても何のことか分からないと反応する方がほとんどだった。「地雷」と聞くとどんなことを思うかという質問に対して、ほとんどがまず「怖い」「危険」という回答をした。他の意見は以下の通りである。

G: 「地雷を踏んでしまったら足を失う。最悪の場合は亡くなってしまうこともある。もし死ななかつたとしても、障がい者になってしまふと、将来が苦しくなる。」

H: 「地雷は、人間の役に立たない。田舎では、畑作業をしていて、気づかず地雷を踏んでしまう人がいる。2、3年前、メコン川で地雷が見つかったこともあった。今も残っているし、被害も出続けている。自殺する人もいて、メンタルへの影響が大きい。」

Gは、地雷を踏むことで体が不自由になり、障がい者として生きていくことを不安視していた。Gの様に、地雷被害者はそのほとんどが手や足を切断することが多く、治療後は障がい者という括りでみられることが多いようだ。またHは、地雷という兵器の残存性について触れつつ、農村部での被害が多いことを述べた。さらに、地雷被害にあうことはメンタル面への影響も大きく、障がい者となったことで社会復帰が難しくなったり、仕事が見つからず不安定な生活を送ることになったために、自殺してしまう人がいることを教えてくれた。

##### ②地雷回避教育について

カンボジアでの地雷被害者の大幅な減少には、地雷除去活動の推進の他に地雷回避教育活動が大きな役割を果たしている。政府は、教育青少年スポーツ省<sup>4</sup>を主導に、UNICEF<sup>5</sup>と協働し、地雷被害者の多い8つの地域で地雷回避教育を提供している。その他、CMAC<sup>6</sup>やThe HALO Trust<sup>7</sup>などの国内外の機関も地雷回避教育を推進している。調査対象者の大多数は、地雷回避教育を受けたことがあると答えた。しかし、インタビューの中では、

D: 「地雷回避教育を受けたことはない。しかし、父親から森に入るときは気をつけるように言われていた。」

I: 「地元のNGOが高校に来て、地雷原を示すドクロサインのことなどを教えてくれた。高校の授業の中でも少し学ぶことがあったが、技術系のコースでは同じような授業がない人もいた。」

という回答も得られた。他の回答者も、「中学の教科書に載っていたが、詳しく学ばなかった」という人もいた。NGO・NPO の行う地雷回避教育では、外部から教えにくるということもあるってか、詳しい内容や実践的な情報を得ることができるようだが、教科書ではほとんど地雷については触れられていないようだ。地雷回避教育を受けていないと答えた D については、8 年生（中学校 2 年生）まで学校を退学しており、そのため地雷回避教育を受けなかった可能性がある。他に地雷回避教育を受けていないと答えた回答者も、途中で学校を退学していた。しかしながら、D はカンボジア政府が 2025 年までに地雷撤去完了を目指しているというニュースを知っており、情報はいつも Facebook を通じて得ていると話した。

#### ③地雷被害者について

1-2 でも述べたように、カンボジアの地雷被害者の数は減少傾向にある。1979 年から 2000 年の間、地雷と不発弾による死傷者数は 5 万人を超えた。現在では、地雷にかわって交通事故が急増しているというのが現状である。（吉崎、青山、永井、小林 2006、p.43）

農村部においては、近所に 1 名の地雷被害者がいるという回答が複数あった。一方の都市部では、地雷被害者は障がい者と同じカテゴリーに入るという考え方のもと、障がい者の人を街で見かけても、その原因が地雷被害であるかは特定できないので分からぬという回答が多くかった。

A は以前、障がい者 NPO のアシスタントをしていた経験があり、障がい者の人たちのカンボジアにおける社会的立場について、「差別はある。」と答えた。

#### ④支援について

カンボジアでは、地雷被害者に対する支援として主に政府の政策、NGO・NPO の支援、地域コミュニティ内での助け合いの 3 つの方法がインタビュー結果から考えられる。特に、B へのインタビューの中で、

B：「田舎では、貧困証明カードが助ける方法の 1 つ。村長が各家庭の貧困を調査し、そこから何家庭に割り当てるかを決める。基準はなく、村長に判断が委ねられている。」

との回答があった。カンボジアには、ID poor と呼ばれる 2007 年より政府が導入した貧困削減政策が存在している。認定を受けたものは、医療扶助を受けることが可能となる。

### 3-2 地雷被害者へのインタビュー

本インタビューは、プノンペンからシェムリアップに向かう道中、立ち寄ったレストランにて行った。回答者は、P さん（58 歳・男性）である。P さんは、左足の膝下が義足になっており、普段は、物乞いをして生活しているとのことで、レストランの前に座ってい

たのも物乞いをするためだと答えた。以下、主な回答をまとめる。

○被害にあった経緯

志願兵として戦場で戦い、1981年、コンポンチャム州において戦場から帰る途中に地雷を踏み、足を失った。病院で治療を受けた後は、地元に送り返された。

○支援について

物乞いをして生活している。妻と子どもが8人いるが、妻も物乞いをして生活しており、子どもたちの生活も皆貧しい。政府からの支援は受けていない。

○社会の中での立場

孤立感を感じている。誰も自分と話そうとしたり、目を合わせたりしない。

○家族に対する想い

教育をまともに受けておらず、子どもたちには教育を受けて優秀になってほしいと思っていたが、お金がなかったためそれも叶わなかった。

#### 4. 考察

インタビューを通して、まずは、カンボジアにおける地雷問題は形骸化してきている可能性を考えた。これまでに多くの死傷者を出してきた地雷だが、その数が減り、ニュースなどで報道される機会も減っている影響もあるだろう。多くの人が最近のニュースではなく、何年も前の話について語っていたことからも、身近な話題ではなくなっていることが窺えた。都市部の人の中で地雷は怖いものである一方、日常の中で意識することはあまりない。農村部は地雷の埋まっている確率は高いにも関わらず、農村部の人の中には地雷回避教育を受けていなかったり、地雷についてイメージが湧かないと答えた人もいた。農村部のインタビュー回答者は、子どもを持つ親世代かつ中等教育までで学校を辞めたものも多かった。そのため、地雷問題は、単にその兵器が人々にもたらす脅威のみならず、農村部における貧困や教育格差の問題にもつながっていると言えるだろう。

これからますます多くのカンボジア人にとって地雷問題が他人事となってしまう可能性を防ぐため、また、一人でも多くの命を救うためにも地雷回避教育が有効であると考える。しかし、NGO・NPOが主体になっていることや、教科書内の記述が少ないと聞いては、政府の歴史教育に対する消極的な姿勢が関わっている可能性を示したい。歴史教育に関して、回答者のほとんどが内戦については授業で触れないということや、日常生活の中でも話しづらい話題だということを語っており、内戦と密接に関係する地雷についても同様に、教育や日常の中で触れる機会が少ないのでないかと考える。また、若者に関しては、普段から情報をFacebookやYouTubeなどのソーシャルメディアに頼っており、自国の歴史についてもそれらのメディア媒体を通して詳しく知る機会が多いようだ。貧困のために学校に通えない人や内戦後の教育格差の影響で地雷回避教育または教育を十分に受けられなかつた人への支援というのも必要である。そして、情報源をインターネットに頼る

というのも、偏った情報だけを受け取る可能性がある。内戦や地雷といったテーマは、メンタル面への影響も大きい。正しい知識を正しい方法で伝えていく努力を政府が主体となって行っていくべきではないかと思う。

最後に、地雷被害者へのインタビューと、彼らに対する現地の人々の考え方と支援について私なりに考えたことを述べたい。地雷被害者の方に実際にあったことで、支援の必要性を感じる一方、それが難しい現状を知った。被害者が障がい者全体に占める割合は低くなってしまうため、十分な支援が届きにくくなる可能性がある。実際に、インタビューをした地雷被害者の男性は政府の支援を受けられていなかったが、都市には物乞いをしている人々があちこちにいて、農村の人々の暮らしも決して楽なものではないという印象を受けた。都市と農村の間にある貧困格差が埋められていない中で、数も減少してきている地雷被害者に焦点を当てて支援することは可能なのだろうか。もし本当に、カンボジアにおけるすべての地雷原がなくなったら、残された被害者たちへの支援は縮小されてしまうのではないだろうか。先にも述べたように、地雷問題は他の問題が絡み合っている。貧しい暮らしを強いられている人々が地雷の被害にあいややすく、体が不自由になった後は働き口がないためにさらに厳しい生活を送る。社会的には「障がい者」という位置づけで差別されやすくなる。このように、地雷被害者への支援というのは、貧困格差や社会福祉の問題にも関係しているため、多角的な視点から支援の道、状況の改善を考えていく必要があるだろう。

一点、国の発展や地雷撤去が進むにつれ、地雷問題や地雷被害者の存在がこの国の中で見えにくくなるのではないだろうかという私の懸念について、異なる見解があることも付け加えておきたい。それは、インタビューを受けてくれた同年代の若者たちの前向きな姿勢である。彼らは地雷を自分達の身近な話題とは捉えていなかったものの、国内外のNGO・NPOが地雷問題に取り組んでいることをSNSを通して知っていたり、障がい者支援のあり方について「何ができるかではなく、何ができるかを考えたい」と話していた。自分達から学ぼうとする姿勢やできることに焦点を当てて支援を推進していくという考え方を持った若者が育っていることは、今後のカンボジアにとって、また社会の中で取り残された人々にとって変化をもたらすきっかけとなるのではないだろうか。

## 5. 感想

「カンボジアに行き、地雷問題について調査する」という小学生の頃からの夢を今回のスタディツアーで叶えることができた。幸運なことに、地雷被害者の方から直接お話を聞く機会に恵まれたことも、自分でカンボジアの地雷問題やそれに伴う貧困・格差にさらに興味を持つきっかけになった。首都プノンペンとシェムリアップ間を移動するバスの中で、見える景色がガラッと変わり、可視化できる格差がある一方、インタビューを通してでしか分からない一つ一つの家族の暮らしがあることを学んだ。スタディツアーのメンバーに恵まれ、出会う人々にも恵まれ、実習中のハプニングも半ば楽しみながら帰国した

が、自分の無力感を感じた旅でもあった。今回の実習で得たものや出会いを、また次の機会に生かしていきたいと思う。

## 6. 注

1. 絵：葉祥明 文：柳瀬房子（1999）『地雷ではなく花をください』、自由国民社。
2. RTC...シェムリアップ職業訓練センター。
3. CJCC...日本人材開発センター。JICAとカンボジア政府の支援によって運営されており、カンボジア国内におけるビジネス人材の育成や日本とカンボジアの交流などの役割を担っている。
4. 教育青少年スポーツ省...Ministry of Education Youth and Sport
5. UNICEF...United Nations International Children's Emergency Fund
6. CMAC...Cambodian Mine Action Center
7. The HALO Trust...the world's largest humanitarian mine clearance organization.

## 7. 参考文献

- 大谷賢二（2011）『地雷原の子どもたちと共に カンボジア地雷撤去キャンペーン活動の軌跡』海鳥社
- 小向絵里（2015）『平和構築に向けた糸 一カンボジア地雷対策センターの改革・成長と南南協力の軌跡』国際開発ジャーナル社
- 高山良二（2010）『地雷処理という仕事 カンボジアの村の復興記』筑摩書房
- 吉崎基弥、青山温子、永井真里、小林明子（2006）「カンボジアにおける身体障害者支援の現状と課題」『Journal of International Health Vol.21 No.1』
- グローバルリンクマネージメント株式会社（2016）「カンボジア国医療保障制度に係る情報収集・確認調査報告書」JICA
- Landmine and Cluster Munition Monitor. Impact | Report Cambodia. <http://the-monitor.org/en-gb/reports/2020/cambodia/impact.aspx> (2023/10/31 最終アクセス)
- LANDMINE FREE 2025 STARTS WITH YOU. THE HALO TRUST.  
<https://www.halotrust.org/latest/halo-updates/stories/landmine-free-20205-starts-with-you/> (2023/10/31 最終アクセス)

# カンボジア国民の仕事と生活満足度の地域比較

文教育学部人文科学科地理環境学コース 2年

吉村 花香

## 1. 調査テーマと調査背景

### 1-1 調査テーマ

本調査では、カンボジア国内の地域格差を「仕事」と「生活満足度」という視点から分析し、地域間の経済格差の実情を考察した。カンボジアは、順調な経済成長を遂げつつもいまだ地域格差が残る発展途上国である。現地の方々が実際に暮らしを営む中で感じる経済的な豊かさの変化について、現地調査を通して解像度を高めて理解し、国全体の経済発展と国民一人一人の生活の豊かさの関係を考察することを目的としている。本実習では、訪問した 3 カ所（プノンペン、シェムリアップ、タケオ）に在住する方々へのインタビューを通して家族収入や経済的な生活満足度に関する事項について調査し、都市部と農村部における生活格差やの現状を分析した。

なお、本文中における「都市部」と「農村部」の定義<sup>1</sup>は以下の通りである。

都市部：プノンペン

農村部：シェムリアップ（郊外）、タケオ

### 1-2 調査背景

2016 年 7 月、カンボジアは低所得国から低中所得国となり、順調に経済成長が進んでいる。しかし未だ貧困層の生活は豊かとはいえない、多元的貧困指標（MPI）<sup>2</sup>に基づくと、カンボジア国民のうち 16.6% の人々が貧困状態にあるとされている（Oxford Poverty and Human Development Initiative 2023, p144）。この貧困

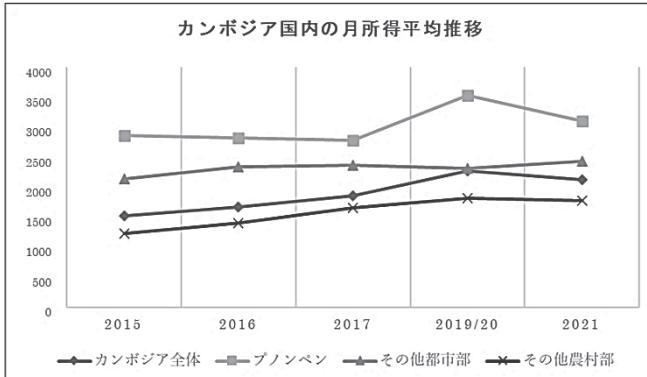


図 1 カンボジア国内の月所得平均推移

層の大部分は農村部に住む人々であり、地域格差が顕著であることがカンボジア社会の特徴である。図 1<sup>3</sup>は、カンボジアの首都プノンペン、その他都市部、その他農村部、カンボジア全体平均の月所得をグラフ化したものである。グラフを見ると、首都であるプノンペンとその他農村部との差が最も大きく開いており、その差の大きさは低中所得国入りを果たした 2016 年と直近の 2021 年の数値を比較してもほぼ変化がない。カンボジア全体としては経済成長が進みつつも、都市部と農村部には大きな所得格差があり、その差が縮まつ

ていないという現状が見えてくる。

また、所得格差が生まれる背景の1つとして、産業構成が挙げられる。図2<sup>4</sup>に示したように、カンボジア全体の産業構成は第一次産業が35.4%、第二次産業が26.1%、第三次産業が38.6%であり、主要産業は農業や縫製業となっている。これを先ほどと同様の区分で地域ごとにグラフ化して比較したのが、図2である。首都プノンペンでは圧倒的に第一次産業が少なく第三次産業が70パーセント近くを占めている一方で、その他農村部では第一次産業が50パーセントを占めている。このように、都市部には第三次産業、農村部には第一次産業が多い傾向があり、経済格差との関連が予想される。

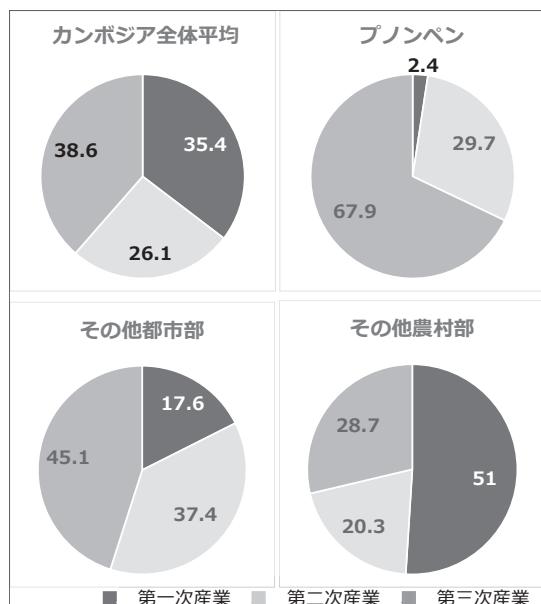


図2 カンボジア各地域の産業構成

## 2. 調査設問

本調査では、調査地域によって従事する産業と収入への満足度に違いはあるのかという問い合わせ元に、以下の質問事項に沿ってカンボジア在住の方16名にインタビューを行った。

- ・あなたとあなたの家族が就いている職業は何か
- ・収入は月（年）何\$か
- ・現在の収入に満足しているか（+回答理由）
- ・都会と田舎どちらに住みたいか（+回答理由）

また、今回の訪問先の中でシェムリアップの職業訓練校（RTC）の学生とカンボジア日本人材開発センター（CJCC）の学生には、以下の質問項目を追加してインタビューを行った。（以後、それぞれ RTC、CJCC と称する。）

- ・将来どんな職業に就きたいか（+回答理由）

## 3. 調査結果

### 3-1 「あなたとあなたの家族が就いている職業は何か」「収入は月（年）何\$か」「現在の収入に満足しているか」

上記のインタビューを行った都市部・農村部に住む方のうち、得られた情報から家族年収を計算することができた全9家族の在住地、家族人数、家族年収、1家族の月生活費、

(家族) 1人あたりの月生活費、そして「(経済的に) 生活に満足しているか」という質問に対する回答に対する回答を○と×でまとめたのが表1である。最低年収は家族A(タケオ在住、3人家族)であり、1人あたりの月生活費は40.3\$、そして最高年収は家族I(ブノンペン在住、3人家族)で、月生活費は500\$となっている。

また、「(経済的に) 生活に満足しているか」という質問に対する回答の理由は、以下の通りである。

表1 インタビュー結果（在住地・家族年収・生活費・生活満足度）

	在住地	家族人数	家族年収(\$)	1家族の月生活費(\$)	1人あたりの月生活費(\$)	生活に満足しているか
家族A	タケオ	3	1450	120.8	40.3	×
家族B	タケオ	4	10500	875.0	218.8	○
家族C	タケオ	6	4060	338.3	56.4	×
家族D	シェムリアップ	6	3600	300.0	50.0	×
家族E	シェムリアップ	6	5400	450.0	75.0	無回答
家族F	ブノンペン	4	12000	1000.0	250.0	○
家族G	ブノンペン	4	12000	1000.0	250.0	○
家族H	ブノンペン	3	12000	1000.0	333.3	○
家族I	ブノンペン	3	18000	1500.0	500.0	○

#### 【「はい(○)」と答えた理由】

- ・教育費にお金を割いており、貯金する余裕もある。
- ・(実家暮らしで) 月100\$のお小遣いをもらっている。(20歳女性)

#### 【「いいえ(×)」と答えた理由】

- ・万一病気になった際など、(経済面で) 健康が心配。
- ・子どもを毎日学校に行かせられるが、満足ではない。大学に行かせたいため、今後教育費がかかる。
- ・生活が貧しいと感じている。

また、インタビューを行った本人又はその家族の職業をすべて並べて勤務地ごとに都市部と農村部に分け、第一次産業、第二次産業、第三次産業に色分けして整理したものが表2である(出稼ぎは除外)。農村部の方が都市部と比べて第一次産業従事者が多く、特に米農家の数が圧倒的に多い。なお、米農家と回答した方全員が兼業農家であった。また、都市部では1人を除く全員が第三次産業という結果となった。

表2 農村部と都市部の産業構成

勤務地	
農村部	都市部
米農家	建築
米農家	教師(校長)
米農家	教師
米農家	小売(果物販売)
米農家	小売(菓子販売)
米農家	教師(講師)
漁師	清掃業
縫製工場	清掃業
縫製工場	清掃業(エアコン掃除)
縫製工場	料理人
縫製工場	計: 21人

黄: 第一次産業
緑: 第二次産業
青: 第三次産業

### 3-2 「都会と田舎どちらに住みたいか」

上記質問の回答結果は図3の通りであり、以下、回答の理由である。

#### 【「都会」を選択した理由】

- ・生まれ育った地だから
- ・家族や親戚と一緒に住めるから
- ・利便性が高いから
- ・仕事が多いから
- ・やりたい仕事が田舎にはないから
- ・交通アクセスがいいから
- ・教育や医療の水準が高いから
- ・チャンスが多いから

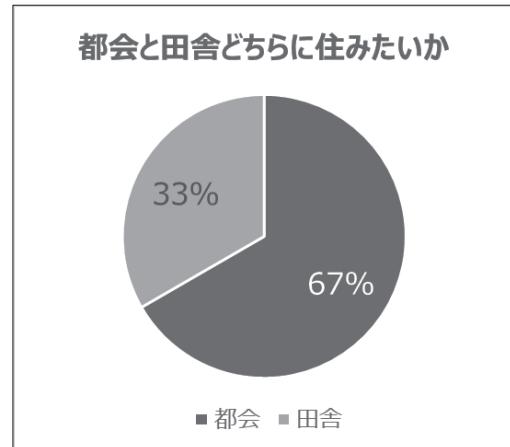


図3 都会又は田舎在住を希望する割合

#### 【「田舎」を選択した理由】

- ・長く住んでいるから
- ・収入源が米栽培であり、農村部の方が広い田が確保できるから
- ・自然があり空気がきれいだから
- ・田舎の方が建築資材を売りやすいから（建築業界就職希望）
- ・都会は忙しすぎるから
- ・自然が多くリラックスできるから
- ・家族と一緒に暮らせるから

#### 【その他】

- ・田舎が栄えることで家族と暮らせて利便性も高まるので、幸せになれると思う

### 3-3 「将来就きたい仕事は何か」

上記質問に対する回答は以下の通りである。

#### 【RTC の学生】

表3 インタビュー結果 (RTC 学生の将来就きたい仕事とその理由)

年齢	性別	将来就きたい職業	理由
19	女	建築の仕事	小さいときから好きだから。
20	男	起業	人の下で働くのではなく、自分で経営してみたいから。
20	男	エアコン専門修理業者	自分が好きなことだから。エアコンを使っている人が多く、ニーズがあるから。
23	男	電気技術者	建築開発やエアコン修理などが収入につながるから。

## 【CJCC の学生】

表 4 インタビュー結果（CJCC 学生の将来就きたい仕事とその理由）

年齢	性別	将来就きたい職業	理由
20代	女	外交官	両親も国家公務員だから。
20代	女	外交官	カンボジア国外で働いてみたいから。
20代	女	外交官	海外で働きたいから。
20代	女	外交官	海外で新しい人と出会ってみたいから。
20代	男	医者	回答なし

## 4. 考察

### 4-1 収入と生活満足度の地域格差

家族年収と生活満足度の調査から、都市部在住の方が農村部在住の方と比べて収入が多い傾向にあるということが明らかになった。この要因として、従事する産業の違いが挙げられる。都市部在住の方は国家公務員などといった高収入で安定した職業に就いているのに対し、農村部は主に収入の変動が激しい米農家や漁師などが多い。これは、3-1 の調査結果からも分かる通り、農村部では第一次産業が圧倒的に多く都市部では第三次産業がほぼ全体を占めるという産業構成の違いが深く関わっていると考えられる。勿論、農村部においても高収入を得ている家族（家族 B）もあり、一概に都市部ほど裕福で農村部ほど貧困に苦しんでいると言うことはできない。ただ、傾向として都市部の方が安定して高収入を得ている人が多いということがインタビュー調査結果から考察できる。なお、今回インタビューを行った都市部（プノンペン在住）の方は CJCC に通う比較的裕福な家庭で育った学生であるため、都市部在住のサンプルとして若干の偏りがあることは述べておく必要がある。

生活満足度に関しては、1人あたりの月生活費が 60~70 \$ 以下になると経済的不安が高まり、生活満足度が下がると考えられる。生活費と生活満足度の関係をより明確にするため、3-1 でまとめた調査結果をもとに月生活費を日生活費に換算<sup>5</sup>して国連が定める絶対貧困ラインの 2.15 \$ / 日（2022 年 10 月時点）と比較したものが、表 4 である。

青に塗りつぶしたのが、絶対貧困ラインを下回る家族の日生活費だ。日生活費が絶対貧

表 5 日生活費 (\$) と生活満足度

	在住地	家族人数	家族年収 (\$)	1人あたりの日生活費 (\$)	生活に満足しているか
家族A	タケオ	3	1450	1.3	×
家族B	タケオ	4	10500	7.3	○
家族C	タケオ	6	4060	1.9	×
家族D	シェムリアップ	6	3600	1.7	×
家族E	シェムリアップ	6	5400	2.5	無回答
家族F	プノンペン	4	12000	8.3	○
家族G	プノンペン	4	12000	8.3	○
家族H	プノンペン	3	12000	11.1	○
家族I	プノンペン	3	18000	16.7	○

困ラインを下回る家族は、右列の「生活に満足しているか」という問い合わせに対して×（いいえ）と回答しており、右の2列が対応していることが分かる。このことから、貧困の度合いと生活満足度は対応しており、その境界となるのが約2.15\$/日であると考察される。今回インタビューした方は現金収入以外に家族分の食糧を自分で栽培するなどして調達しており、実質的には絶対貧困にあたらない可能性が高い。しかし、経済的に困難な状況に置かれていることは確かであり、こういった貧困の問題は農村部において特に顕著に表れている現状が在住地から見てとれる。

#### 4-2 「都会」「田舎」への印象と、カンボジアの人々の生活様式

「都会と田舎どちらに住みたいか」という質問に関しては、日本人と似た感覚で回答している印象がある。都会は利便性が高く仕事が多い一方で、田舎は自然がきれいでゆったりとしているというイメージが、カンボジアの人々にも浸透している。しかし、回答の中でカンボジアならではの文化が表れている語りがあった。それは、家族との関係についてである。都会・田舎いずれにも「家族と一緒に暮らせるから」という理由が含まれている。これは、カンボジアの人々が家族と共に生活する又は複数人で生活をする文化を持ち、居住地選択をする上で家族の存在が大変重要であることを示している。家族全員で暮らすために各々が収入を得るという生活様式は都市部・農村部共通であるが、インタビュー結果に基づく家族の平均人数は都市部の方が少ない（農村部は5人、都市部は3.5人）ことから、必要な生活費と収入のバランスが農村部と都市部で異なり、経済状況に影響していると考えることができる。

#### 4-3 カンボジアの学生が描く将来像

RTCとCJCCの学生計9人が描く将来の夢とその理由が、3-3でまとめられている。RTCとCJCCを比較すると、将来就きたい職業に大きな違いがある。RTCの学生は自分の専門を活かせる職業として専門職等を挙げる一方で、CJCCの学生はインタビューした5名中4名は外交官志望であり、エリート志向であることが分かる。この違いには各学生の養育環境や両親の職業が大きく影響していると考えられ、出会うロールモデルの違いがその一因と予想される。ただ、学生全員に共通しているのは、自分のやりたいことや好きなことを職にしようとしている点だ。収入につながることだけではなく、自分の興味関心に合わせて職業選択をしようとする前向きな姿勢を持っており、なりたい職業に就くという目標が学校の勉強に励むモチベーションになっている。教育を受けることによって安定した職業に就くための具体的なビジョンを描けるという点で、学校教育は貧困問題の解決に不可欠である。

### 5. 調査に参加した感想

今回の調査で都市部と農村部の暮らしを収入という観点から比較してみて、地域による

生活レベルや教育レベルの違いを実感した。子どもをなんとか学校に行かせることができると程度の収入で生活する人がいる一方で、子どもにキャリア教育を受けさせる余裕がある裕福な生活を送る人もいる。この裕福度の違いを目の当たりにし、カンボジアは単に「経済成長」という語だけでは語れない複雑な発展過程の中にあることを実感させられた。

また、カンボジア訪問全体を通して、「発展途上国」「国際協力」という言葉に対して抱くイメージが大きく変わった。生きることそのものへの情熱を抱き、心に壁をつくらずまっすぐな温かさで迎え入れてくれる現地の人々と関わることは、今まで自分が持っていた「豊かさ」の基準を再考するのに十分すぎるほどの経験だった。活気ある市場や子ども達が走り回る小学校、現地語が飛び交う地元のレストランなど、訪れた場所すべてで感じられる「人」のエネルギーは、貧富という概念を飛び越えた豊かさの存在を教えてくれた。国際協力を学ぶ身として、この実習で得たたくさんの出会いや気づきを大切に自分の中に落とし込み、真摯な国際協力の姿勢について考え続けたい。

## 6. 注

1. インタビュー対象者のうちシェムリアップ在住の方全員が郊外在住であったため、シェムリアップを「農村部」に含んで調査分析を行う。
2. 所得・建康・教育・生活水準から見た貧困の指標のこと。
3. National Institute of Statistics (2022), “Report of Cambodia Socio-Economic Survey 2021”, p114 の Table 1 Income composition, average per month, 2015 – 2021 を使用して作成した。
4. National Institute of Statistics (2022), “Report of Cambodia Socio-Economic Survey 2021”, p89 の Table 18. Women share of wage employment aged (15-64 years) by geographical domain and industrial sector. 2021 を使用して作成した。
5. 日生活費=月生活費÷30 で計算している。

## 7. 参考文献

上田広美, 岡田知子, 福富友子 (2023) 『カンボジアを知るための 60 章【第 3 版】』明石書店

National Institute of Statistics (2022), “Report of Cambodia Socio-Economic Survey 2021”, National Institute of Statistics, p.89, p144.

Oxford Poverty and Human Development Initiative (2023). “Cambodia Country Briefing”, Oxford Poverty and Human Development Initiative, University of Oxford.

## (5) 訪問記録

### 1) JICA カンボジア事務所訪問

日時：2023年8月22日（火） 11:00～12:00

場所：JICA カンボジア事務所（16<sup>th</sup> and 17<sup>th</sup> floors, Keystone Building）

面会者：宮下明子さん、小川紀子さん、Mr. THOEUN Vongdy、Ms. PRAK Chanthy（日本人事務所所員・カンボジア人現地スタッフ） ※インタビューは、現地スタッフ2名との間で実施

内容：

まず、前半の30分でJICAについての全般的な説明とJICAによるカンボジア支援についてVongdyさんから聞いた。後半30分では、学生たちが用意した質問に対するVongdyさんとChanthyさんの意見を聞いた。

最初の質問は、JICAではどのような農業協力をやっているかについてだ。Vongdyさんは、灌漑の支援について言及し、それによって、以前は自然の雨に頼り、あまり生産的でなかった伝統的な方法からの転換を可能にしたと言った。

続いて、高等教育や職業訓練の分野における男女格差の有無や女子差別が存在する事項について聞いた。以前と比べて、女子の進学率も上がり、男女差があるとは言い切れないのではと述べた一方で、エンジニアリングなどの理系の特定分野や、修士や博士などの大卒以上の学歴では男子が多いという現実があるとのことだった。

3つ目の質問では、政治分野での女性が少ない理由についてお二人に意見を聞いた。Vongdyさんは、政府の重要な職に就いている男性は、学部卒以上の修士や博士などの高等教育を受けた人が多いが、女性はそこまでの教育を受けた人が少ないと、政治分野において女性が少ないのではないかと考察していた。しかし、最近では大卒以上の高等教育を受けた女性が以前よりも増加傾向にあるため、将来的に、政治に関わる女性が増えしていくのではないかという前向きな展望も持つようであった。Chanthyさんは、この質問について、女性が政治を学べる大学がほとんどないことが原因の1つではないかと指摘した。

4つ目の質問は、都市化によって、日本では自殺者の割合や過労、孤独の問題が発生しているが、カンボジアでも同じことが起こると思うかという質問であった。それに対して、カンボジアでは、家族や子どもを養うために働くという意識が強い習慣や文化を持っており、教育を受けた若い世代は働く傾向にはあるものの、日本人のように働きすぎのような問題は発生しないのではないかと述べていた。

最後の質問は、ポル・ポトの時代を経験した人々に対する若い世代の考え方や歴史を受け継ぐことの重要さについてであった。Vongdyさんは、歴史を学ぶことはとても重要で、歴史を学ぶことによって過去の過ちを避けるべきであると述べた。また、追加の質問で、カンボジア人はポル・ポト時代の出来事を学ぶ機会があるかということについても2人よ

り回答を得た。Chanthyさんは、ポル・ポトの時代のことを表立って話すことはできない状況にある、とまず説明してくれた。そして私立学校では、ポル・ポトに関連する場所を訪れ学ぶ機会があるが、公立学校ではあまり聞いたことがない、という感じであった。当時のことを知るには、自分でネットや報告書を通じて調べたりする必要があると述べていた。Vongdyさんもこれに加えて、ポル・ポトの時代について詳しく学ぶには、カンボジア人ではなく、フランス人など外国人が著した本を読む必要があると述べた。

考察：

この考察では、主に男女格差とポル・ポト時代の歴史の継承の 2 点について述べたいと思う。

まず男女格差についてだ。全体的な男女合計の進学率は不明であったが、二人からの話によれば、大学までの男女の進学率の格差は徐々に減っている傾向のように思えた。一方で、STEMなどの理系分野や学部卒以上の進学は男性が多いと感じているようで、男女差が表れていると考える。これは日本と同様の傾向にある。また、女性の政治参加が少ない原因について、二人は、上記とも関連する学歴について述べていた。しかし、これについて考慮するべき点があると考える。まず、政治を学べる場が少ないという Chanthyさんの発言である。カンボジア現政権は、ほぼ一党独裁の強権体制であり、一般的なカンボジア国民が自由に政治について意見できるような状況ではない中で、女性のみならず男性も十分に政治が学べる状況下にあるのかは不明である。女性だけに機会が限られているというより、男女ともに政治を学ぶ場が不足していることが要因の 1 つに挙げられるのではないか。また、過度の学歴主義にも注目したい。大学卒までの学歴は男女に差がなく、修士以上の学歴差が影響しているのではないかとのことであったが、修士以上の学歴を得るためにには、一定程度以上の家庭の経済力も必要だ。加えて、政府内で重要なポストについている現在の役人は、党幹部の子どもが多く、政府は全体的に世襲で体制維持を図っているようである（朝日新聞 2023 年 7 月 24 日朝刊）。つまり、政治に関わるには、ある程度の権力を既に保持している家庭でないと難しい側面があるということだ。一般国民や女性が政治にかかわるのには、学歴以外にも、経済力や出自の良さというハードルがありそうだ。

次に、ポル・ポト時代の出来事の継承についてだ。あまり積極的に伝承されていない事実は衝撃だった。確かに日本においても被害者意識のある原爆や戦争の記憶の風化が問題になっているが、公立学校での教育や本における自由闊達な議論までもがなされていないという事実は、政府があえて制限しているようにも思える。国どうしの戦争ではなく、政権のトップが国民に対して行ったことであり、あくまで国内に加害者と被害者が存在する点が、大きく異なる点の 1 つであるように思う。現政権への影響力を残すフン・セン元首相が、クメール・ルージュの革命運動に参加した経緯があるからか、自身が政権を握るまでの、ポル・ポト時代とも関わる、半ば暴力的で強制的な経緯（参考：ヒューマンライツウォッチ <https://www.hrw.org/ja/news/2015/01/13/266035>）を語るのに後ろめたさがある

からなのか、教育として積極的にポル・ポト時代を取り入れない理由は、個人的かつ政治的な事情がありそうである。

担当：林 希枝

## 2) ecoggie 社訪問・インタビュー

日時：2023年8月22日（火） 15:30～17:00

場所：ecoggie 社事務所（タケオ州）

面会者：葦刈晟矢さん（代表取締役 CEO）、高虎男さん（CSO）、神宮さん（現地スタッフ）、橘木さん（現地スタッフ）、チャンティさん（現地カンボジア人スタッフ）、チャンナさん（現地カンボジア人スタッフ）

概要：

カンボジアのタケオ州にある ecoggie 社の事務所を訪問した。前半は、CEO である葦刈さんにコオロギ農家との関係構築の方法やカンボジアの農村部における家族経営の在り方についてお話を聞くことができた。また、各自の用意した研究テーマに沿って、カンボジアの政治や労働環境についても意見を聞いた。後半は、現地カンボジア人スタッフであるチャンティさんとチャンナさんに前職や今の仕事内容を中心にインタビューを行った。

内容：

Q. 農家の信頼関係はどのように築いたのか。

A. 最初はよそ者として扱われたり、契約していた協力農家が別のバイヤーにコオロギを売ってしまうこともあったが、コロナ禍でも一定の農家と買取を継続的に行うことで信頼を得た。農家に何度も会いに行き、ecoggie 社が行っているフードロス削減の活動についても説明をしている。

Q. 政治の女性参加が低い理由は何だと考えるか。

A. ほとんど男性議員しか見たことがない。社会問題としてジェンダーが顕在化していないのではないか。以前よりも女性が会社で働くことが普通になっただけでも大きな変化である。

（現地カンボジア人スタッフに対するインタビュー）

Q. ecoggie で働く前は何をしていたのか。

A. （チャンナさん）コンポンチャム州で家政婦（コック）をしていた。また、工場でも断続的に1年ほど勤務したことがある。

(チャンティさん) 障がい者支援を行っているNPOのアシスタントをしていた。

Q. どうして前の仕事を辞めて、ecologgieに来たのか。

A. (チャンナさん) だんだん仕事が増えて、苦しくなって辞めた。ecologgieでは、ストレスなく働けて、居住スペースも提供してもらえる。

(チャンティさん) 母親の体調が良くなかったから。前の職場は首都プノンペンにあつたが、出身はタケオ州である。給料自体はあまり変わらないが、将来のキャリアアップや英語力向上のためにecologgieに来た。

考察 :

カンボジアにおいてコオロギはスナックフードやおつまみという位置付けにあり、元からコオロギの生産を行なっている農家が存在していた。そこにecologgie社が入り、既存の農家や新規の農家と連携し、安定したコオロギ生産やエサの改良に取り組んでおり、地域に密着したビジネスと栄養価の高いコオロギの市場へのさらなる拡大への可能性をみることができた。現地スタッフの方のお話の中で、カンボジア人は家族や友人との人間関係を大切にしており、仕事を選ぶ際にも知り合いの紹介やSNSでの口コミなどが重視されるため、雇う側も社員の満足度や会社のイメージを上げる必要があると聞いた。実際に、現地カンボジア人スタッフは2人とも、家族や前職とのつながりでecologgieに来ており、カンボジアにおける人間関係構築の重要性を学ぶことができた。

備考/コメント :

ecologgie社の事務所には、コオロギを加工する施設が併設されており、粉末状になったコオロギパウダーを袋詰めしている様子を見学することができた。

担当者 : 矢野 紗彩

### 3) ecologgie社関係者との会食

日時 : 2023年8月23日(水) 19:00~:21:30

場所 : ムルック・スバウ・レストラン(タケオ州)

面会者 : ecologgie社4名、ecologgieインターン生の鈴木さん

内容 :

ecologgie社の葦苅さん・神宮さん・高さん・橋木(カエル)さんと、現在ecologgie社でインターンをされている大学生の鈴木さんと、タケオのレストランで夕食を共にした。ecologgie社のみなさんに、おすすめの大皿料理を注文してもらい、香草やスパイスの効いた

たカンボジア料理の数々を堪能した。

会食中に、ecologgie 社の日本人スタッフの方々より、カンボジアでの暮らしや食事についてお話を聞くことができた。朝の市場で売られている生肉を調理したり、普段から昆虫を食べている様子などを語ってくれた。また、みなさんのバックグラウンド、特に ecologgie 社の活動に携わるまでの経緯についてお話しいただいた。橋木さんの大学院での蛙に関する研究活動や、神宮さんのカンボジアでの居酒屋経営の話が非常に興味深かった。葦苅さんからは、ecologgie 社の日本での活動や大学生インターの内容について教えてもらった。鈴木さんからは、昆虫食を食べられる東京都内の飲食店を教えていただいたり、大学生活の様子などを語っていただいた。

カンボジアのレストランの雰囲気や特徴についても知ることができた。今回訪れたレストランのように、カンボジアの飲食店には周りに池がある場所が多く、そこには鯉などの魚が泳いでいた。カンボジアでは、レストランの店員さんが残り物のごはんを池に投げ捨て、魚たちの餌にすることが多いという。今回の会食でも、我々が食べた大皿料理に残った魚の骨を橋木さんが傍にある池に投げ捨て、それをめがけて鯉たちが群がる様子など、日本では目にしないような新鮮な光景を目の当たりにし、とても楽しかった。

考察：

ecologgie 社の日本人スタッフからカンボジアでの暮らしについてお話しいただいたことは、我々が現地の文化を理解するための貴重な機会であったといえるだろう。また、今回の会食を通して、ecologgie 社では異なるバックグラウンドを持つ人々がコオロギベンチャーや持続可能性の分野で協力し、新たなアイディアやプロジェクトを生み出す大きな可能性を発揮していることを実感した。

担当者：平子 七海

#### 4) ecologgie 協力農家訪問①

日時：2023年8月23日（水） 9:30～10:30

場所：ecologgie 協力農家 ご自宅（タケオ州・トレアン郡）

面会者：クロイ・パウさん（56歳女性）

内容：

Q1. 家族構成と今の職業について

A1.7 人家族で生活をしている。現在は教師として近くの小学校で働きながら、兼業としてコオロギ栽培を行っている。

**Q2.コオロギ栽培をはじめた理由は？**

A2.家族が多く兼業をしやすいため。在宅で仕事ができることが大きなメリットであり、自宅にいることが多い姉に仕事を与えることも目的の1つと考えている。

**Q3.小学校に通う子どもたちは、毎日来ることができるのか？**

A3.全体の約 70%は毎日通うことができる。残りの約 30%は、貧困によって親の仕事を手伝ったり買い物を任せられたりするため、あまり通えていない現状がある。

**Q4.中学校・高校への進学率は？**

A4.どちらも（1 クラスあたり 1~2 人を除き）ほぼ全員が進学する。高校以降は進学するための試験があるが、中学は試験なしで進級する形をとっている。クラスのうち 1~2 人は、貧しさが原因で休みがちになったり中退したりして、進学できない。

**Q5.周辺地域の大学進学率はどれくらいか？**

A5.約 70%が大学に進学している。地域によっては 80%を超えるところもある。少し前までは働き手が減るため子どもを学校に行かせたくないと考える親も多かったが、近年では教育への理解度が向上しており、「勉強をして知識を得ることで将来仕事を得られるから、貧しくても学校には行かせよう」と考える親が増えた。

**Q6.ポル・ポト時代はどのような経験をしたか？**

A6.当時は 10 歳。水路作りのために土を運ぶ仕事をしていた。ポル・ポト時代に 4 人の家族を亡くした。

**Q7.学校ではポル・ポト時代について教えているか？**

A7.教えたいが、教科書には詳細な記載がない。そのため、教科書とは別に自分の経験を子ども達に聞かせることもある。将来この歴史を忘れないため、繰り返さないために、子ども達に伝えることは重要だと思う。

**Q8.幸せであるために一番大切だと思うことは何か？**

A8.仕事。仕事をすることでお金が得られ、それによって家族も幸せになるから。

**Q9.身近なところに政治参加している女性はいるか？**

A9.副村長が女性。政治参加する女性もいる。

考察：

コオロギ栽培農家としての話に加え、教師という立場から見た教育現場のリアルな現状

を知ることができた。予想以上に教育に対する親の意識が高く、農村部であっても学校に通わせる親が多い一方で、貧困により未だ十分な教育を受けられない家庭もあるという格差の現状を知り、教育支援の必要性を実感した。またポル・ポト時代に関するお話では、実際に自分自身が経験されたからこそ感じる歴史教育への意見を語ってくださり、カンボジアの学校教育について考える貴重な材料となった。

#### 備考/コメント :

協力農家の方への初回インタビューであったため、各自が準備した調査テーマに関する質問の意図が相手にうまく伝わらないことがあった。質問事項の設定や質問方法について、再検討するきっかけとなった。

担当者：吉村 花香

#### 5) ecoggie 協力農家訪問②

日時：2023年8月23日（水） 13:30～14:20

場所：ecoggie 協力農家（タケオ州）

面会者：チャ・ヌアンさん（男性、53歳）

#### 内容

タケオ州在住のコオロギ農家の方にインタビューを行った。チャ・ヌアンさんは、53歳の男性であり、家族構成は父親・自分・妻・息子の4人となっている。

チャ・ヌアンさんは、収入を増やすことを目的にコオロギの養殖を始めた。元々は米農家であったが、年によって収穫量が変動し、赤字になる年もあることからコオロギの養殖を副業として始めたとのことである。

以上のお話を聞いた後、それぞれの調査テーマに関する質問を行い、ガイドであるブティーさんの通訳を介して以下のような回答を得た。

（都合上一部省略・修正あり）

Q. 幸せのために最も必要なものは何か。

A. 仕事。

Q. カンボジアの女性は社会進出しているか。男女の不平等はあるか。

A. 以前はあまり進出していなかったが、今はそんなことはない。男女の不平等はない。

Q. 小中高大の進学状況はどの程度か。

A. 小→中は80%、中→高は70%、高→大は70%程度の進学率。

**Q.** 都会と田舎のどちらに住む方がいいと考えているか。

**A.** 田舎。田んぼが収入源となっているため。

**Q.** 政治活動を行う人は身の回りにいるか。政治の場に女性が少ない理由はなんだと思うか。

**A.** いない。男性は家事をしないが、女性は家事をしなければならないから。

**Q.** 地雷について知っているか。地雷についてどのような印象を持っているか。

**A.** 地雷についてはあまり知らない。Facebook で見たことがある程度で、直接見たことはない。地雷は怖いと感じている。

**Q.** 身の回りに地雷の被害に遭った人はいるか。

**A.** 同じ村に、地雷で怪我をした男性が 1 人暮らしている。

**Q.** ポル・ポト時代にどのような経験をしたか。

**A.** ポル・ポト時代にミルクを飲みたいと思い盗んだら、柱に括り付けられて叩かれた記憶がある。

**Q.** ポル・ポト時代の経験をもとに、子どもたちにどのようなことを伝えたいか。

**A.** ポル・ポトの時代は満足な食事や勉強ができず労働をさせられたが、今はそんなことはないので勉強してほしいと考えている。自分自身は勉強をしたかったと感じている。将来仕事ができるように、あまり遊ばず頑張って勉強してほしい。

**Q.** 収入の内訳はどのようにになっているか。

**A.** コオロギは 30 万リエル～40 万リエル/回（1 年で 8 回）なのに対し、農業は 250～500 ドル/回（1 年に 2 回）である。

**Q.** 金銭的に、将来に不安はないか。周りに助けてくれる人はいるか。

**A.** 貯金できていないので、将来健康でなくなったときのことが心配である。周りの人は、病院へ運ぶことはしてくれるが金銭的援助はしてくれないと想っている。

**Q.** 毎日の内で、大切にしているものは何か。

**A.** 田んぼ。

考察：

チャ・ヌアンさんへのインタビューを通して、彼が田んぼと密接した暮らしをしていることや子どもの教育を重要視していることなどが特に印象に残った。

また、このインタビューは、多くの調査メンバー（学生）にとって、用意してきた質問

がわかりやすく適切なものであるか再考するきっかけとなるものであった。例えば、チャ・アンさんは地雷やジェンダーについてほとんど知識がなかったため、質問の意味を理解してもらえなかつたり、予想とは違う回答が返ってきたりした。このインタビューの後、ほとんどのメンバーが質問の仕方や順番を変更しており、異なった価値観を持つ人にインタビューを行うことの難しさを知った。

担当者：三枝 馨

## 6) ecologgie 協力農家訪問③

日時：2023年8月23日（水） 14:30～15:30

場所：タケオ州ポー村

面会者：ノム・マッカラさん（男性、37歳 家族構成：妻と8歳、15歳の子ども 出身地：タケオ州ポー村）

内容：

以下に、インタビューの質問内容とその回答をカテゴリーごとに記す。本人の言葉そのままではなく内容を要約している。

まず、エコロギー協力農家と現在の詳しい状況、昆虫食に関する質問に対して回答を頂いた。

Q1：エコロギー協力農家としてのコオロギ養殖以外に仕事をしているか。

A1：農業（お米）をしていて、田んぼとして3haを持っている。

Q2：コオロギ養殖を始めた理由は何か。

A2：田んぼ以外の収入を得たいと思ったため。お米は年3回（1回2,500ドル）の収穫である一方で、コオロギ養殖は年に6回、約45日ごとに1度の収穫、200kg（1kg7,000リエル～10,000リエル）ほどの収入である。今の収入には満足している。

Q3：都市と農村のどちらに住みたいか。

A3：都市と比べたら農村に住みたい。都市だと、周りは知らない人ばかりで不安だけれど、村では、お互いに知っている仲だから。

Q4：農家になったことでどのような変化があったか。

A4：子どもが毎日学校に行けるようになった。また、田んぼの肥料をより多く買えるようになった。

**Q5** : 昆虫食を毎日食べるか。どのように食べるか。

**A5** : 昆虫を油で揚げ、味をつけて食べる。村の人々が食べたいとき、自分の家に来て、1 ~2 kg 持っていくこともある。また、昆虫食をお菓子やおやつとして販売するため、仲買人が自分の家まで買いに来ることもある。村の人より仲買人が先に自分の家に来たら、仲買人に売るようしている。

続いて、女性に関する質問に対する回答を頂いた。

**Q6** : 男女格差はあると思うか。

**A6** : 無いと思う。いつも男女で協力しながら生活している。

**Q7** : 政治の場に女性が少ない理由が思いつくか。

**A7** : 分からない。

**Q8** : 町や村で政治分野において働く女性はいるか。

**A8** : 副村長が女性である。

**Q9** : 女性の村長はいるか。いなかつたら、原因は何だと思うか。

**A9** : いない。原因はわからないが、副村長の女性は村を助けたり、村の発展のために尽くしている。

**Q10** : 家事は奥さんがしているのか。

**A10** : 家事は自分がしている。妻は縫製工場の前で屋台を経営している。朝 6 時から夜の 19 時 30 分まで、家族のためのお金を稼ぐために働いている。

続いて、地雷に関する質問の回答を頂いた。

**Q11** : 地雷についてどのようなイメージを持つか。

**A11** : 怖い。無いほうがいい。武器を見たくない。

**Q12** : 地雷を見たことはあるか。

**A12** : 見たことはないが、父から「気を付けて」と注意を受けたり、地雷について教えてもらったことがある。

**Q13** : 地雷被害者が向こうの区画に住んでいると、隣に住んでいる方（エコロギー協力農家②の方）から聞いたが、その人は知っているか。

**A13** : 知っているし、助けている。

**Q14** : その地雷の被害者の方は政府から支援を受けているようであるか。

A14：どれくらいの量か分からぬが、月に 1 回、政府からお米をもらっている。ナンプラー や砂糖ももらっているようである。

Q15：地雷被害者(貧困層)に差別意識はあるか。

A15：差別意識はない。かわいそうに思う。あえて交流する人もいる。

Q16：「2030 年までに地雷をなくす」という政府の政策を知っているか。

A16：知っている。Facebook や YouTube などでよりクリーンな情報を得ている。国営テレビは品物宣伝が多く見たくない。

次に、ノムさんのあらゆる側面における信念について聞いた。

Q17：日々の生活の中で「楽しい、生きていてよかった」と思うことは何か。

A17：お米やコオロギを収穫する時。親戚との集まりで会食する時。

Q18：長く大切にしたいものやことは何か。

A18：近所とのつきあい。また、今持っている土地を守りたい。

Q19：子どもの世代にどのようなカンボジアでいてほしいと思か。

A19：(どのような子どもになってほしいか、という質問に誤解した可能性がある。) 優秀な子どもになってほしい。

Q20：あなたにとって何が「幸せ」か。(家族・友人・パートナー、お金、仕事・勉強、宗教の信仰、自由時間、その他から選ぶ。)

A20：家族が、自分が最も幸せを感じる要素だ。家族（妻子）を持たないと幸せでないと感じるし、家族に問題があると幸せでないと感じる。2 番目は仕事だけど、家族がいないこれも大事に思えなくなる。

そのほかの質問は以下のとおりである。

Q21：ご自身の学歴はどのようにあるか。

A21：自分の父の仕事を手伝うために学校を中学 2 年までやめた。自分も本当は大学まで行きたかったができなかった。そのため、息子 2 人には、大学まで行かせたいし、大卒以上まで進学させてやりたい。

Q22：家の表にあった、漢字が書かれた飾りは何か。

A22：中国の新年を祝うもの。自分の妻が中国人とのハーフなので。

Q23：日本についてどのようなイメージを持っているか。

A23：機械や車がなくて、いい国だと思っている。

考察：

考察では、主にジェンダーと報道と情報収集について述べたい。

まず、ジェンダーについてだ。今回のインタビューでは、男女格差や政治分野で働いている女性について質問した。男女格差の有無については、無いとの回答を頂いた。実際、ノムさんの家庭では、奥さんも働いていると話していたので、女性による労働は制限されていないことが分かる。むしろ、ノムさん自身が主に家事を担っているとのことだったので、各人の生活や仕事スタイルに合わせた役割分担を行っているように思える。一方で、中央政府に関わる女性の少なさには問題意識をお持ちではなかった。地方単位では女性が役職を持って行政に関わることがインタビューから見受けられるが、村長の女性はあまり見たことがなく、村長に女性がいない原因もあまり考えたことがないような感じであった。政治分野において、女性に対する差別はないものの、政治に関わり、リーダーシップを取るのは男性だという潜在的な意識が根付いているのではないかと考える。

次に、報道と情報収集についてだ。ノムさんは、よりクリーンな情報を得るために、Facebook や YouTube を利用していると回答なさった。国営テレビを見ない理由として、宣伝が多いことを挙げていたが、実際、カンボジアの報道の自由度ランキングは、180 か国中 147 位（2023）と低（国境なき記者団 <https://rsf.org/en/country/cambodia>）。つまり、国民が知りたいと思った情報に、政府の制限の下、たどり着けない場合が多いかもしれないということが分かる。ではインターネットが、唯一国民が信頼し、情報を得ることのできる手段かというと、そうとは限らないことが、前述した国境なき記者団の記事に載っている。インターネット上の情報も政府が一部にアクセス制限を設けているとのことだ。多くの国民が Facebook を使うという習慣も、実は政府が意図的に導いた結果なのかもしれない。

担当者：林 希枝

## 7) ecologgie 協力農家訪問④

日時：2023年8月23日（水） 15:30～16:45

場所：ecologgie 協力農家（タケオ州）

面会者：ナウル・シーヌアンさん（40歳、女性）

内容：

Q. 家族構成

A. 夫、子ども4人

**Q.** コオロギの養殖をする前はどのような仕事をしていたか  
**A.** 縫製工場、コオロギの養殖を始めてから工場での仕事はやめた

**Q.** なぜ縫製工場の仕事をやめたのか  
**A.** 年をとって工場での仕事が大変だと感じていた、体調を崩し働けない時期があった

**Q.** コオロギの養殖を始めて生活はどう変わったか  
**A.** 生活が豊かになった（子どもが学校に通うことができる、家を改築できるなど）

**Q.** 現在の収入に満足しているか  
**A.** 以前よりは収入が増えたが満足ではない、  
娘を大学に通わせたいが十分なお金を用意できない

**Q.** 自身の学歴  
**A.** 中学1年  
兄弟が多くお金がかかったためそれ以上進学できなかった、進学希望はあった

**Q.** 周りに政治活動をしている女性はいるか  
**A.** 村の役員に女性が数名いる（村長・副村長は男性である）

**Q.** 政治の場に女性が少ない理由はなんだと思うか  
**A.** 分からない

**Q.** 女性が自由に仕事を選ぶことができると思うか  
**A.** そう思う、しかし女性には家の仕事もある

**Q.** 地雷についてのイメージはあるか  
**A.** TVで観る程度であまり知らない、知り合いに地雷被害者はいない

**Q.** 幸せに生活するためには何が一番重要か  
**A.** 家族、家族がいれば楽しく暮らすことができるから  
娘たちの進路は本人の希望に任せるが、できればずっと一緒に暮らしたい

考察：

本インタビューでは、受けてきた教育や生活による価値観の違いがあることでの調査の難しさを感じた。ジェンダーや地雷など大きなトピックの質問について、社会全体がどう

であるかより、自分の生活の中ではどうであるかの回答が多いように感じた。海外での現地調査では、このような価値観や考え方の違いを考慮した質問を準備する必要があると強く感じた。また、ナウルさんを含む現地の方々が豊かに生活するためには教育が重要であると考えており、自身の子どもに良い教育を与えたいくつも思っていることは驚きであった。

担当者：杉本 愛莉

## 8) JICA 事務所スタッフインタビュー

日時：2023年8月24日（木） 16:00～17:30

場所：Salita Hotel Phnom Penh 1階ロビー

面会者：伊藤奈緒子さん（JICA カンボジア事務所企画調査員）

内容：

JICA カンボジア事務所に勤務する伊藤さんにお話を聞いた。伊藤さんは、2年ほどJICA カンボジア事務所でお仕事をされている。その中で、女性の経済的エンパワーメントを行う事業の後半部分にも携わっていたという。それは、農村地域の女性が経済的に自立することを目指した事業である。その事業で重要であったのは、収入という外的変化よりむしろ内的変化であったという。なぜなら、女性たちが経済的に自立するためには、「本来持っている力を出しきれていない」という感覚（気づき）を持つことが重要であるからだという。そのため、特に女性の自信をつける段階に時間をかけたそうだ。

事業の内容についてお話を聞いた後、自分たちの調査テーマに基づいた質問を行った。そこでは、経済的もしくは政治的に女性が活躍しづらい理由などについてお聞きすることが出来た。カンボジアにおける女性の活躍度が低い理由として、リーダーシップを発揮する機会が得られないことや論理的思考力が不足していること、託児する場所がないことなどがあるという。

一方で、カンボジアにおいては裕福で権力のある家に生まれた女性であれば活躍できるという事実もあるとのことで、ジェンダーよりも貧困が活躍の壁となっていることもわかった。

考察：

カンボジアで初めて有識者の方からお話を聞くことができ、カンボジアにはジェンダーの問題が多く残されていることに改めて気づかされた。しかし、力のある家で生まれたら女性でも活躍できるというお話から、カンボジアの状況は日本と異なったものであるということもわかった。

また、伊藤さんはカンボジアにおける人身取引の問題にも取り組まれており、女性が売

られた後に性労働に従事させられたり他国に妻として売られたりする現状もあると知った。このことから、政治的・経済的なものに限らず、カンボジアのジェンダー問題についてもっと広く知識をつける必要があるとわかった。

担当者：三枝 馨

## 9) Wonderfy（株）の教育アプリを導入する小学校訪問

日時：2023年8月24日（木） 15:30～17:00

場所：プレア・ノロドム小学校（Wonderfy（株）教育アプリ導入小学校、プノンペン市内）

面会者：ナイさん（Wonderfy（株）スタッフ）、ネイさん（地理の先生）、ペックさん（数学の先生）、ヘインさん（ITの先生）

概要：

Wonderfy（株）は、「子どもたちから“知的なわくわく”を引き出す」ことを目的につくられた「Think!Think!」という教育アプリ事業を展開している会社である。カンボジアでは、公立小学校でのIT授業の時間に「Think!Think!」のアプリを導入する事業を行なっている。また、富裕層向けの塾の展開も行っており、同国における教育課題に取り組んでいる。今回訪問したのは、プレア・ノロドム小学校という公立学校であり、首都プノンペンに位置する。インタビューを受けてくださったのは、Wonderfyのスタッフ1名と、実際に子どもたちに授業をしている教師3名であった。

それぞれの出身地について聞くと、コンポンチャム州やラタナキリ州といった地方出身者が多く、皆、プノンペンの大学に進学していた。カンボジアにおいて、教育の重要性は高く、大学進学理由には両親からの後押しがあった。また、首都の大学に進学する理由として、地方には大学が少なく、学べる科目も限られていることを教えてくれた。

カンボジアの学校は主に午前と午後の2部制に分かれており、プレア・ノロドム小学校でも同様の制度で授業が行われている。また、私立小学校と公立小学校の2種類があり、公立である同小学校では、中流階級の子どもが最も多いという。この小学校でのIT授業の導入はまだ始まって2ヶ月ほどであり、具体的には、ITの授業を20分行った後、残りの20分で生徒たちに「Think!Think!」のアプリを実施してもらう。先生たちもその効果についてはまだ分からない部分があるが、子どもたちの興味は高く、自主的に学ぶ姿勢が見えるという。

質問内容：

Q. これから子どもたちに対して願うことはあるか。

A.（ナイさん）勉強は、自分自身を変えることのできる唯一の方法である。教育を受ける

ことによって、自立した大人に、そして社会に貢献できるような人になって欲しい。私立小学校の子どもたちは、公立小学校の子どもたちよりも自信に溢れしており、公立小学校の子どもたちは差別を受けることもあるが、もっと自信を持って欲しいと思う。

考察：

カンボジアにおいて教育についてインタビューをすると、いかに教育というものがこの国において重要視されているかが分かる。内戦の影響から、教師や知識人が不足し、学力向上のために教育が重要なのかと思いきや、それだけではなく、教育を受けることにより、自分自身を変えることができる、お金を稼いで家族を養うことができるといったような、教育の大きな意義が見えてくる。IT を教えていたヘインさんは、家庭が貧しく、小学校から大学までのお金を見て NPO が負担してくれていることを話してくれた。どんなに貧しくても教育を受けさせたいという親の願いと、子どもたちの意欲的に学ぶ姿勢を聞いて、日本の教育のあり方や子どもたちの勉強意欲の姿勢の違いについて考えさせられるきっかけとなった。

備考/コメント：

インタビュー対象者はスタッフの方と先生のみであったが、学校で遊んでいる子どもたちと少しだけ交流することができた。いきなり来た私たちに笑顔で駆け寄って来る子どもたちの姿に驚きつつ、予定にはなかったカンボジアの子どもたちに会うことができ、とても嬉しかった。

担当者：矢野 紗彩

## 10) RTC（シェムリアップ職業訓練校）学生 訪問①

日時：2023年8月25日（金） 14:30～16:30

場所：シェムリアップ footprint cafés

面会者：ロッタナー先生、パンニヤーさん（男性 20歳 マーケティング学専攻）、ヴァットさん（男性 20歳 電気学専攻）、リーさん（男性 23歳 電気学専攻）、サインさん（男性）、ターさん（女性）、スレイリヤックさん（女性 会計学専攻）、ルオンチャンさん（女性 19歳 建築学専攻）

内容：

2つのグループに分かれて、学生にインタビューを行った。私が担当したグループでは、ルオンチャンさん、パンニヤーさん、ヴァットさん、リーさんの4人からお話を聞いた。そして最後にスレイリヤックさんのお話を個別に聞いた。ひとつの質問に対して、個別の

回答を頂いている場合は分けて、話し合って出して頂いた回答はひとつの回答として記載する。また、便宜上、回答してくれた学生の名前を頭文字 1 字で表示する。

まずルオンチャンさん、パンニヤーさん、ヴァットさん、リーさんの 4 人にインタビューを行った。最初に彼ら自身や家族のことについて聞いた。

Q1：どこの出身か。

A1：

- (ル) シエムリアップ州のスレイスマン郡
- (ハ) シエムリアップ州のスワイランコン郡
- (ヴァ) バンテアイミエンチェイ州
- (リ) シエムリアップ州のソワニコン郡

Q2：家族構成は。

A2：

- (ル) 6人家族（父母、祖母、3人姉妹<長女＝自分、次女＝16歳、三女＝12歳>）
- (ハ) 7人家族（父母、兄弟5人<長男＝自分、長女＝19歳、次男＝17歳、三男＝15歳、四男＝13歳>）
- (ヴァ) 4人家族（父母、双子の姉＝20歳）
- (リ) 4人家族（父母、妹＝14歳）

Q3：両親の職業や収入源は。

A3：

- (ル) 毎日食べるため両親ともに農業（お米）、それに加えて父は建築の仕事、母はバナナの天ぷらなどお菓子の屋台をしている。
- (ハ) 両親はお米（年間 7トン。1kg=1,150リエル）を作っている。果物を販売する仕事もしている。父は少し文字が読めるが母は文字が読めない。肥料代もかかるので、余裕はない。
- (ヴァ) お米を作っている（しかし、浸水が多発するためそこまで収穫できない）。それ以外にも仕事をしており、父は漁師（1日 10万リエル）、母は掃除の仕事（月に 200ドルほど）をしている。
- (リ) 両親がタイに出稼ぎに行っている。2人で月に約 400～500ドルくらいの収入。両親が送金したお金を祖母が受け取り、祖母から週に 5万リエル受け取っているが、足りないので、勉強しながらエアコンの掃除などをするアルバイトをしている。その仕事は 1日に 7.5ドルほどの収入である。

Q4：どこまで進学しているか。

A4 :

- (ル) 高校卒業まで
- (パ) 高校卒業まで
- (ヴァ) 高校卒業まで
- (リ) 中学3年生まで

Q5 : どれが一番大切で幸福の要素か。(家族・友人・パートナー、お金、仕事・勉強、宗教の信仰、自由時間、その他から選ぶ。)

A5 :

- (ル) お金が大事。お金があれば、勉強できて、仕事も得ることができる。仕事を得て、お金がもらえれば、家族を養うことができる。
- (パ) 仕事が大事。勉強したら、働くことができる。働くことができたらお金を稼ぐことができる。お金を稼ぐことができたら、家族を助けることができるから。
- (ヴァ) お金が大事。お金がないと勉強できないし、学校も中退しなければなくなり、将来がなくなってしまうから。
- (リ) 家族や友人が大事。家族がいたら温かい。今、家族と離れているため苦しいから。家族が自分の教育が終わるまでサポートしてくれているから。

次に、ジェンダーやリーダーについて聞いた。

Q6 : 学校や村などでリーダーになったことはあるか。

A6 :

- (ル) 3年生の時、学校の委員長をしていた。
- (パ) 今、クラスリーダーをしている。
- (ヴァ) 今、クラスリーダーをしている。
- (リ) 今、副クラスリーダーをしている。

Q7. : リーダーになるのは、男性・女性のどちらが多いか。

A7 : 大体どちらも同じくらいなっていた。

Q8 : 自分の住んでいる地域では、男性女性どちらのリーダーが多いか。

A8 :

- (ル) 自分の村には女性のリーダーがいない。
- (パ) 自分の村では、村長は男性が、副村長は女性がしている。
- (ヴァ) 自分の村では、村長も副村長もどちらも男性がしている。
- (リ) 自分の村では、村長も副村長もどちらも男性がしている。

Q9：なぜ村長は男性が多いと思うのか。

A9：3つ理由があると思う。1つは、田舎の女性はあまり教育を受けておらず、受けていてもそのレベルが低いということ。2つ目は、女性には出産や子育てがあるから。3つ目は、社会より自分の家族が大事だと思っているから。カンボジアのことわざに、「女性は台所回りしかしない。」というのがあり、家事が仕事だと思われている。

Q10：男性と女性の格差はあると思うか。

A10：

(ル) 現在は小学校から高校までは格差はほとんどないと思うが、高校を過ぎたら格差が出てくる。女子はあまり大学まで進めない。原因是、高校を過ぎたころは大体結婚する年齢だから。そして両親が結婚させたいと思うから。男子は自由があると思う。社会関係では格差はあまり感じない。

(ハ) 格差はあまりない。社会も教育も、政府が女性を支援している。男女の権利を同じにしている。

(ヴア) あまり格差はない。権利は同じ。お互いに助け合っている。

(リ) 若い子ではあまり格差はない。男女ともに同じ仕事ができる。例えば、エアコンの機械は男女ともに洗う。

Q11：男女の賃金格差はあるか。

A11：能力によってなので、男女で差があるという感じではない。

Q12：カンボジアでは、女性が出産や子育てをしても、キャリアに影響はでないか。

A12：出産後は3か月休むことができ、会社に戻ってこられる。休んでいる間も給料をもらうことができる。

Q13：3か月会社を休んだ後、子どもの面倒はだれが見るか。

A13：自分の母(子から見た祖母)を見てもらうことがある。もし祖母がいなかつたら、一時的に仕事を辞めて、子どもの面倒を見る。

Q14：自分の出身地の同じ年代の人の男女の進学率は。

A14：

(ル) 女子は大体高校まで。大学まで進学する人もいるが、大学まで行けずに結婚する人も。小さい商売をする人も。男子も結婚で大学に行けない人がいる。田舎は結婚が早いから。16～18歳で結婚する。

(ハ) 女子は小学校から大学まで、75%くらいの人が通っている。ただ、男子は30%しか行けていない。男子は、両親の田んぼの仕事を手伝わなければならないから。

(ヴァ) 女子は小学校から大学まで 50%くらいの人が通えている。男子は 30%ほど。両親の仕事を手伝う他、出稼ぎや建築の仕事をしなければならないから。

(リ) 小学校から高校まで通う女子は 50%、大学まで通える女子は、1 人か 2 人まで。男子は高校まで 30%くらいの人しか行けない。途中でやめてしまう人が多い。高校まで行ける人は少ない。中学までは多いが。両親の仕事を手伝うため。

続いて、RTC に関することや将来について尋ねた。

Q15：なぜ RTC に入学しようと思ったのか。

A15：

(ル) RTC で勉強するのが好きだから。カンボジアは現在発展していて、ここを卒業したら仕事が得られるから。また、建築学を学ぶ女性は少なく、女子だったら建築学関係の仕事を探しやすいと思ったため。

(パ) マーケティングが好きだから。今勉強をしたら、仕事をもらいやすくなるから。将来的な自己成長に繋がるから。

(ヴァ) 電気学が好きだから。この訓練校を卒業したら、国内で仕事を得やすくなるため、出稼ぎをしなくてもよくなるから。家族を養うことができるから。

(リ) 電気学を学ぶのが好きだから。ここで勉強したら、会社に勤めることができる。もし会社に勤めることができなくても、自分でビジネスを始めることができるから。ここでの奨学金が多いから。

Q16：将来、どんな仕事に就きたいか。

A16：

(ル) 小さい時から建築が好きだから、親と同じ職業に就きたい。

(パ) 将来自分でガソリンスタンドかコンビニなどのビジネスをしたい。人に使われるのが好きではないから。

(ヴァ) 優秀なエアコン修理をする人になりたい。自分が好きなことで、世間からのニーズがあるから。

(リ) 電気の技術者になりたい。現在、カンボジアが発展している途中で、ニーズがありそうだから。

Q17：将来働く時、街で働きたいか、自分の出身地で働きたいか。

A17：

(ル) 自分が就きたい仕事は、田舎にないから、都会に住むかなと想像している。

(パ) 都会で働きたい。特に、海の方で働きたい。仕事が多いと思うから。

(ヴァ) 都会で働きたい。都会にはたくさん仕事があって、エアコンや冷蔵庫などのニーズも多いから。

(リ) 都会と村の両方で働きたい。都会は、仕事がたくさんある。村では建築資材を売ることができるから。

Q18：都会で働いたら、家族と離れることになるけど、さみしくはないか。

A18：

(ル) さみしいと思うが、将来のため。

(ハ) 都会で色々な経験をしないといけない。さみしくてもやらなければいけない。

(ヴァ) さみしいが、自分のためだから。

(リ) さみしいのはしょうがない。両親が出稼ぎに行っているので、孤独な状況にはもう慣れている。

Q19：RTC で授業を受けることによって、就職へのモチベーションが上がったり、自信がついたか。

A19：自信もモチベーションも上がっている。早く仕事についたら、早く両親を助けることができる。

#### 【以降、ルーチャンさんとの個別インタビュー】

最後に、ルーチャンさんが特別に時間を設けてくれたため、ジェンダーのことを尋ねることができた。

Q1：村やクラスなどでリーダーになったことがあるか。

A1：小学校と中学校の時にクラスリーダーになったことがある。

Q2：小学校、中学校、高校のどこまで卒業しているか。

A2：高校 1 年生まで。

Q3：出身地での男女の進学率は。

A3：男子は中学 2 年生まで通う。女子は中学 3 年生まで通う。その後は、みんなやめてしまう。男子はそのまま教育を受けてから働くより、早く働き始めたほうがいいと思われているから。また、両親の仕事を手伝わなければいけないから。女子は昔の習慣があるから。昔の習慣とは、女子はあまり高い教育を受ける必要がないと思われていた。また、自分が住んでいる村は、高校がある街まで遠いため、通学に時間がかかるから。もう 1 つは、道中で危険な目に遭う（レイプなど）があるため、心配だから両親が行かせないことが多い。両親に反対して勉強を続ける子もいるが、少ない。

Q4：なぜ RTC に入学しようと思ったか。

A4：両親は高い教育を受けていないが、村のことわざ（女子は家事が仕事）や習慣（子どもに教育はあまり必要ない）に負けないように、自分を通わせてくれている。

Q5：授業を受けていて、就職へのモチベーションや自信は上がったか。

A5：奨学金で勉強して、寮にも泊まることができている。早めに仕事できるようになりたいと思っている。

Q6：卒業後はどんな職業に就きたいか。

A6：会計学の勉強をしているので、将来その教師になりたい。大学で教えたい。

Q7：夫婦で家事の役割分担はあるか。

A7：分担せずに、協力して家事を行っている。

Q8：両親の職業は。

A8：父は亡くなり、母はお米を作ったり、鳥を養殖している。

Q9：将来、出産や子育てをしても働き続けたいか。

A9：続けて仕事がしたい。やめたくない。両親が自分に高い教育を受けさせたように、自分も自分の子どもに高い教育を受けさせたいから。

Q10：男女に格差はあると思うか。

A10：格差はある。家事は女性がしなければならない。男性は外で仕事ばかりしなければならない。

考察：

ジェンダーや教育、そこから見えてきた新たな課題について考察したい。社会における男女格差について、インタビューした多くの学生が「無い」と答えたが、最後にインタビューしたルーチャンさんは、女性が家事をして、男性が外に働きに行くことが多いと述べていた。この発言は、実際に「なぜ村長には男性が多いのか」に通じる部分もある。村長に男性が多い理由として、女性は家事や家族の方を優先していることが挙げられていた。それに加えて、農村部の女性はあまり教育を受けていないから女性村長が少ないのではないかという意見も見られた。これは、JICA カンボジア事務所のスタッフやそこで働く日本人職員の伊藤奈緒子さんがお話しされたように、「政治に関わる人は高い学歴が必要だ」という意識が根付いているのかもしれない。しかし一方で、今回学生から聞いた、学生の出身地における男女の大学までの進学率は、男子が女子よりも低いという状況だった。その原因の多くが、両親の仕事を手伝うためであった。このように、農村部では、女子の方が男子よりも進学者が多いということと、加えて回答者の母親の多くが家事だけでなく仕事をしているという事実にもかかわらず、村長には男性が多いという状況になっているのは、女性がリーダーとなり政治を行うこと自体が、そもそも一般的でないことを表してい

るようと思える。また今回、回答して下さった学生の多くの出身地で、家庭の事情で男子の進学率が低いという問題点が顕わになったことに加えて、男女ともに、農村部では高校が遠いということ、そして通学路での安全性が担保されていないことが子どもを学校へ通わせるうえでの妨げとなっていることが分かった。ガイドで今回通訳をして下さったVuthyさんが、女子の場合はレイプが多いのではないかと考察してくれたが、JICAにおいても女性の家庭内暴力や人身取引などの解決を目指すために女性の経済的エンパワーメントのプロジェクトを進めている点から、女性が受動的な立場になりやすい状況があることは確かである。また、女性のキャリアについて、出産後は育児休暇を給与有りで取得できる仕組みがあるそうだが、その後は誰かに子どもの面倒を見てもらうか、キャリアを諦めるしかないとの発言もあったことから、必ずしも女性が出産や育児をする中でキャリアを築きやすい環境ではないかもしれないことが分かる。大きな家族単位で住んでいるところも多く、親戚同士のつながりも濃いため、対処できることが多いのかもしれないが、今後、都市化やそれに伴う核家族化が進むと、大きな課題となってくるかもしれない。総合的なジェンダーギャップは日本よりも少ないが、特定の分野における女性への支援は不足している部分も多そうだ。

担当者：林 希枝

## 11) RTC（シェムリアップ職業訓練校）学生 訪問②

日時：2023年8月25日（金） 14:30～16:30

場所：footprint cafés

面会者：RTC（シェムリアップ職業訓練校）ロッタナー先生、学生7名

※2 グループに分かれてインタビューを行った。本報告ではそのうち1グループ（RTC学生4名）のインタビュー内容を記録している。①19歳女性、②20歳男性、③20代男性、④23歳男性

内容：

Q1. 専攻・出身・家族構成について

A1.

①建築専攻/シェムリアップ（田舎）出身/6人家族（祖母、父、母、兄弟3人）

②マーケティング専攻/シェムリアップ（田舎）出身/7人家族（父、母、兄弟5人）

③電気工学専攻/バンテアイミエンチェイ州（田舎）出身/4人家族（父、母、姉妹2人）

④電気工学専攻/シェムリアップ（田舎）出身/4人家族（父、母、兄弟2人）

Q2. 家族の仕事について

A2.

- ①父は建築（250\$/月）、母は屋台にて菓子販売（200\$/月）をしている。また、自分達の食料のため米農家の仕事もしている。
- ②米農家（170\$/月）をしつつ、屋台にて果物の販売も行っている。
- ③父は漁師（25\$/日）、母は清掃業（200\$/月）をしている。また、小規模ではあるが米農家の仕事もしている。
- ④両親はタイに出稼ぎに行っている。自分はエアコン掃除のアルバイト（3.75～7.5\$/日）をして稼ぎつつ、仕送りをもらって生活している。

Q3. リーダー経験はあるか？

A3.4 人全員が「ある」（クラスリーダー、副クラスリーダーなど）※リーダーの男女比は同じくらい

Q4.なぜ RTC に入学しようと思ったのか？

A4.

- ・自分が好きなことを勉強したかったから
- ・特に女性が少ない分野（建築）に関心があるので、（女性である自分は）将来雇用を得やすいと思ったから
- ・勉強科目が好きだから。
- ・将来仕事に就きやすく、自分が成長していくと思ったから
- ・就職はもちろん、起業もしやすいと思ったから
- ・出稼ぎをせず、家族と一緒に暮らしながら働けると思ったから

Q5.男女格差はあると思うか？

A5.

「ない」と回答（4人中3人）

- ・女性のエンパワーメントが行われていて、権利が尊重されているから
- ・男性の仕事を女性でも選べるから

「ある」と回答（4人中1人（女子学生））

- ・大学の進学率が女性の方が低いと思う
- ・親が「結婚させたい」と考える

Q6. 将来就きたい仕事

A6.

- ・建築の仕事

- ・起業（ガソリンスタンド・コンビニエンスストア）
- ・エアコン専門修理
- ・電気技術者

Q7. 将来都会と田舎のどちらに住みたいか

A7.

- 「都会」と回答（4人中3人）
- ・自分のやりたい仕事は田舎にないから
  - ・都会の方がたくさんの仕事があり、ニーズも多いから

「両方」と回答（4人中1人）

- ・都会の方が仕事はあるが、田舎の方が建築資材がよく売れるから

Q8. 都会に出て家族と離れて過ごすことはさみしくないか？

A8.

- ・さみしさはあるが、将来のためならしょうがない
- ・生活を良くするために必要だと思う
- ・今も両親と離れて暮らしており、既に慣れている

考察：

学生達はRTCに入って学ぶ理由として、自分の好きなことを学びたいという想いに加え、将来の仕事に結びつく点を重視していた。インタビューをした全生が将来どのような職に就きたいのかを既に決めていたことからもわかるように、勉強が職に結びつくという強い意識があると考えられる。また、仕事を得るために教育を受ける必要があるという認識は彼ら本人だけでなく家族の中でも根付いており、裕福とはいえない生活環境の中でも学校に行かせるという選択が、教育への理解度を示している。

担当者：吉村 花香

## 12) 地雷被害者インタビュー

日時：2023年8月25日（金） 8:30～9:00

場所：スクン（コンポンチャム州チェアング・プリー郡の群都）にあるレストラン前

面会者：ニヨーカエムさん（物乞いをしながら生活している地雷被害者）

概要：

プノンペンからシェムリアップへと向かう道中、朝ご飯を食べるため立ち寄ったレストランの前に男性は座り込んでいた。左足の膝下が義足になっており、身につけている服はボロボロだった。ガイドのブティーさんに通訳をしてもらうかたちでインタビューが実現した。

名前は、ニヨーカエムさん。ご年齢は、58歳。家族構成は妻と子どもが8人。ほとんどが結婚して家を出ていた。どうやって生活しているのか尋ねると、地雷で足を負傷してからは、ずっと物乞いをして生活しており、妻も同じく物乞いをして生活しているという。

1981年、地雷埋没数の多いバッタンバン州で兵隊をしていて、地元であるコンポンチャム州に帰る途中で地雷を踏み、吹き飛ばされて意識を失った。次に起きた時には病院に居て、自分の足がなくなっていることに気づき、苦しんだという。

支援について尋ねると、被害直後は、治療のために入院したり、義足を作ってもらったりした。しかし今は、政府からの支援を受けておらず、周りからのサポートも特にないと言う。

内容：

Q1. 政府からの支援を受けられていないことについて、どう思いますか。

A1. 嬉しくない。大きくなつてすぐに志願兵になった。国のために働いたのに。

Q2. 地雷被害者として、社会の中で孤立感を感じることはありますか。

A2. ある。周りの人は誰も私を見ようとしない。話しかけてこない。

Q3. 8人のお子さんに対して思うことはありますか。

A3. 地雷被害者であるが故に、自分自身を助けることができない。子どもたちには教育を受けさせて、優秀になってほしいと思っていたが、貧しくてそれも叶わなかつた。

考察：

私が今回の実習中に話を聞くことができた地雷被害者は、ニヨーカエムさんただ一人だけだった。地雷の被害者が年々減少していることは分かっていたが、地雷被害者と思われる人を見たのは3回ほどだった。カンボジアにおける地雷除去活動はまだ終わっておらず、地雷被害のニュースもまだあるのだが、カンボジアにおける地雷の位置付けは明らかに変わっていた。男性のライフストーリーを聞いただけでも、この国の貧困の要因に、地雷被害や教育格差、政府の支援などが複雑に絡み合っている様子が見てとれた。今後、地雷除去活動が収束に向かい、今までNGOの支援に頼っていたものが収縮していったら、ますます地雷に対する意識や支援は消えていってしまう可能性があるのではないかと不安になった。

備考/コメント :

物乞いをする地雷被害者を見て、私を含めた学生たちは大きな衝撃を受けた。何もできない自分たちの無力さを感じつつも、移動のバスの中で、それぞれが感じたこと、思ったことを共有する機会となった。

カンボジアの人々はほとんどの人がスマホを所有しており、物乞いをして生活をしていると語ったニヨーカエムさんもスマホを持っていたことに少々驚いた。

担当者：矢野 紗彩

### 13) アンコール・ワット、アンコール・トム訪問

日時：2023年8月26日（土） 5:00～12:00

場所：アンコール・ワット、アンコール・トム（シェムリアップ）

面会者：アンコールワットガイドのティーさん（チャーイソカー・ティリアックさん）

内容：

朝の4時半に集まり、アンコール・ワットの朝焼けを見に行つた。ホテルを出たときは空気はまだ冷たく、あたりは薄暗かったが、アンコール・ワットに到着すると空は深い藍色から淡い空色に変化し、雲間に太陽の淡いオレンジ色の光が差し込んでいるのがとても美しかった。アンコール・ワットは朝日が昇るにつれてその輪郭を現し、その壮大さと神秘的な雰囲気に包まれた。また、アンコール・ワットの目の前の広場には、大きな池のような場所が存在するが、朝日が昇ると、その池の水面が鏡のようになり、美しいアンコール・ワットが水面に映し出された。自然と歴史が融合する美しい光景に立ち会い、私たちはその特別な瞬間を味わうことができた。

そして、朝食後の9時頃に再度アンコール・ワットに向かい、その内部を探索することができた。壁一面に広がる精巧なレリーフ彫刻が印象的だった。ガイドのティーさんより、壁に描かれたヒンドゥー教の神話やカンボジアの歴史について解説をしていただき、まさにこの遺跡がクメール建築の傑作であることを実感として学んだ。

アンコール・ワットの見学を終えた後は、大きな門を通り抜け、アンコール・トムを訪れた。アンコール・トムには東西南北の4つの巨大な石造りの門があり、それぞれが像や神々の彫刻で飾られているという。塔に刻まれた巨大な顔にはほほ笑みが浮かんでおり、壁には日常生活や神話の物語を描いた精巧な彫刻があった。

考察：

アンコール・ワットとアンコール・トムへの訪問を通して、古代の人間による精巧な建築技術と芸術、歴史、文化に対して深い尊敬の気持ちを抱いた。これらの遺跡の壮大なス

ケールと細部にわたる彫刻からは、クメール人の知恵と技術の高さをうかがい知ることができた。また、アンコール・ワットの壁の彫刻やアンコール・トムの顔の彫刻は、宗教的意義だけではなく美的価値も持ち合わせており、宗教的信念が芸術表現と融合する瞬間を体感することができた。

その一方で、アンコール・ワットの内部の壁や天井の一部は、カンボジア以外の国々の援助による修復工事が進められていたり、アンコール・トムの壁は時間の経過と共に傷んできていることを学んだ。ここから、人間の遺産は決して永遠ではないことを思い知ることができた。これらの遺跡を筆頭とした観光産業は地域経済に貢献するが、遺跡の持続可能な維持と保護管理の重要性についても我々は何度も思い返さなければならないだろう。

担当者：平子 七海

#### 14) カンボジア人実業家との食事意見交換会

日時：2023年8月27日（日） 19:00～20:00

場所：リーフアン・レストラン（LY HOUNG、プノンペン）

面会者：Mr. Go Tatsuhiro（カンボット州で胡椒栽培農園を経営するビジネスマン、日本のカンボジア料理店「アンコールワット」の子息）

内容：

GOさん一家は、ポル・ポト政権時の1977年頃カンボジアからタイに渡り、タイの難民キャンプで2年ほど生活を送った後、1980年インドシナ難民として日本に渡り、国際救援センターにて日本語教育などの支援を受けた。言語が通じない環境での生活には大変な苦労が伴い、父はネジ工場勤務、母は内職をして生計を立てていたが、金銭的に厳しい生活を強いられる毎日を過ごした。そんな中ある一人の日本人との出会いによって金銭的支援を受けられることとなり、両親がカンボジア料理店「アンコールワット」を代々木にて開業した。その後、長男であるGOさんは2007年に一人カンボジアへと戻り、様々なビジネスを経験した末、カンボットペッパーと呼ばれる最高品質の胡椒農園の経営者となった。現在は約60haの畑を所有しており、35人のスタッフと共に胡椒の栽培を行っている。スタッフの労働条件は良好であり、月120\$の給与に加えて住宅費・生活費・毎1人あたり1ドルの食費・必要分の米も現物支給しているとのことだ。また、最高品質のカンボットペッパーとして販売するためにはオーガニック認証（ECOCERT認証）が必要であるため、GOさんの農園でも肥料などにこだわりオーガニックの胡椒栽培を行っている。

考察：

胡椒農園経営者として成功するまでの苦労や経験を知り、自分の仕事に対する誇りに溢

れたいきいきとした語りに圧倒された。一方で、雇用主と労働者という上下関係と貧困格差の現状について考えるきっかけにもなった。今までインタビューを行ってきた労働者側の立場にある人々は生活費や教育費をまかなうための地道な生活を送っていた印象を持ったが、今回初めて雇用主側の方の話を聞き、その生活への意識の差を実感した。都市と農村という地域的比較だけではなく、社会的立場の上下関係を捉えて比較する必要性を改めて実感し、調査テーマを再考する材料の1つとなった。

備考/コメント：

インドシナ難民として日本に渡ってくるまでの経緯等について、より詳しくお話を伺ったかった。

担当者：吉村 花香

## 15) トゥール・スレン虐殺博物館訪問

日時：2023年8月28日（月） 14:30～16:00

場所：トゥール・スレン虐殺博物館（プノンペン）

面会者：ガイドのブティー（Kor Vuthy）さん

内容：

ポル・ポト政権下で実際に農村地域のキャンプでの労働を経験したガイドのブティーさんとともに、トゥール・スレン虐殺博物館を見学した。かつてトゥール・スレン刑務所として知られていたこの施設は、ポル・ポト政権下において、拘留者の拷問、尋問、虐待、処刑の場となっていた。博物館の敷地内には、拷問や尋問が行われたA棟、教師や技術者などの知識人が監禁されたB棟、ポル・ポト派に所属していたが命令を守らなかつた者が監禁されたC棟、お金持ちや学歴のある一般人が監禁されたD棟の計4棟が残されていた。ブティーさんの解説によると、ポル・ポト政権下の時代に処刑された人数はトゥール・スレンにおいては2万人、全国では合計300万人に上るという。拷問や尋問が行われていたA棟の部屋に入ると、そこには、骨組みだけのベッドや足枷やトイレ箱があった。トイレ箱は、当時収容されていた人々が外のトイレに行って自殺することを防ぐ目的で、使用することが強制されていた。また、博物館内では、一人ずつ入れて監禁した独房の異常な狭さを体感として学ぶことができた。博物館には、当時の拷問の様子を物語る絵画が展示されていた。刑務所に収容されていたひとりの画家が描いたものだという。パネル一面に貼られた写真に写るポル・ポト派の少年兵たちのまなざしは幼く、博物館の棚には犠牲者の無数の頭蓋骨が積まれていた。

考察：

博物館には、かつてこの施設に収容された拘留者一人ひとりの顔写真が貼られていた。番号札を持った彼らの見つめる目は、我々に何かを訴えているような力強さと、死の恐怖と絶望を予感しているような儚さを持ち合わせていた。博物館を歩いている最中に何度も、当時この空間に蔓延っていたであろう残虐な行為の数々の面影を感じ、言葉を失う瞬間があった。この場所で、逃げようのない悲しみや失われた命があるという事実を実感し、言葉や涙すら出ないような深い絶望の感覚を、非当事者としてこの場所を訪れた私はどれほど肌で感じられるのだろうかということを考えていた。そして、何を思えば、亡くなつた方々と誠実に対峙できるのだろうかということに思いを馳せながら歩いていた。

担当者：平子 七海

## 16) カンボジア日本人材開発センター（CJCC）訪問①

日時：2023年8月28日（月） 9:00～13:15

場所：CJCC

面会者：内藤千愛さん（CJCC職員・JICA専門家）、CJCCに通う学生10数名（他CJCC職員の宮嶋さん他カンボジア人スタッフが同席）

内容：

まず、内藤さんより CJCC の概要について説明を受けた。それによると、CJCC は日本の ODA によって建設された後、日本やカンボジア政府の支援を受けつつも独立採算で運営されている教育機関であるという。CJCC はビジネス、日本語、文化・教育を 3 つの柱としており、それぞれに沿った活動を行っているそうだ。

その後、内藤さんに CJCC と連携している経営者について話を聞いた。その中で、女性の経営者が多く活躍している一方で、それが都市部の裕福な家の女性に限られていることや、大規模な企業になると未だ男性中心であることなどがわかった。

最後に、学生に対して 3 チームに分かれてインタビューを行った。私のチームでは、女子学生 3 人がインタビューに応じてくれた。全員が高校まで卒業していて、3 人のうち 2 人はプノンペン出身であり、1 人が地方部出身であった。3 人に対して、性別による格差はあるかという質問を行ったところ、全員があると回答していた。具体的には、職場での性差別やセクシャルハラスメント、結婚後の性別役割分業、育児などといった面で格差があるという回答を得ることが出来た。一方で、カンボジアにおけるジェンダー格差は解消されつつあるという話も聞くことができた。

考察：

インタビューの対象者全員がジェンダーについて知識を有しており、これまでで最も議

論が挿ったという点で、都市部と地方部の差や教育の程度による差を感じさせられたことが印象的であった。また、カンボジアにはジェンダー問題が残っており、それを問題だと感じている学生がいることに希望を感じた。

一方で、貧富の差が教育を受ける機会の差と繋がっている現状も垣間見え、カンボジアにおいて教育の問題が根深いということにも気づかされた。

担当者：三枝 馨

## 17) カンボジア日本人材開発センター（CJCC）訪問②

日時：2023年8月28日（月） 9:00～13:15

場所：CJCC（カンボジア日本人材開発センター、プノンペン）

面会者：内藤千愛さん（CJCC職員・JICA専門家）、CJCCに通う学生10数名（他CJCC職員の宮嶋さん他カンボジア人スタッフが同席）

内容：

### ① CJCCの概要

CJCCは、日本政府の支援を受けて運営されているカンボジアの人材開発を目的とした教育施設である。人材開発センターは、旧ソ連・社会主義国を中心に、カンボジアを含め9カ国10センター設置されている。CJCCでは、ビジネス研修や企業家の育成を行うビジネスコース、日本語の言語教育を行う日本語コースのふたつのコースに加え、年2回の文化交流事業などの日本文化教育が行われている。

### ② 学生との対談

私のグループでは、5名の学生と対談した。

Q1. 将来の夢はあるか

A1. 外交官（4名）、医者（1名）

理由：両親の仕事だから、海外で仕事をしてみたいから

Q2. 都市と田舎ではどちらで生活したいか

A2. 都市（4名）

理由：交通アクセスがいいから、教育や医療の水準が高いから、チャンスが多いから

田舎（1名）

理由：自然が多くてリラックスできるから、都会は忙しすぎるから

**Q3. なぜ CJCC のプログラムに参加しようと思ったのか**

A3. 様々な国の人と交流できるから、興味のある内容だった、海外情勢を学べるから

**Q4. 幸せに生活するためには何が一番重要か**

A4. 家族（4名）

理由：どんな時でも支えてくれるから、メンタルケア、応援してくれる

お金（1名）

理由：家族や友人と充実した時間を過ごすにはお金が必要だから

**Q5. 日本の都市では過労や孤独による高い自殺率などの問題があるが、カンボジアがさらに発展すると日本と同様の問題が起こると思うか**

A5. 起こりうると思う

理由：精神的な病気について理解している人が少なくメンタルヘルス＝弱いと受け取られることもしばしばある、気持ちについて人に話す文化がない

考察・感想：

CJCC で対談した学生はカンボジアの中でも特に優秀な学生であり、その知識量・語学力の高さに非常に驚いた。英語力や海外情勢について詳しいことについて理由を尋ねると、幼少期からの英語授業や家族と英語で会話をする、授業で海外情勢について学ぶ機会が多いということがわかった。このように、カンボジアの今後を担う人材に非常に高い教育がなされていることを知ると同時に、農村部と都市部で深刻な教育格差があるという現状を知ることができた。

担当者：杉本 愛莉

## (6) 写真



Phnom Penh空港到着時の様子



JICA カンボジア事務所でのインタビュー



ecologgie 社でのインタビュー



ecologgie 社スタッフとの会食



ecologgie 協力農家インタビュー



ecologgie 協力農家観察（コオロギ養殖）



タケオ市のマーケット観察



Wonderfy Inc.協力学校でのインタビュー



地雷被害者インタビュー



シェムリアップ職業訓練校生徒インタビュー



アンコール・ワット視察①



アンコール・ワット視察②



胡椒農園経営者との意見交換（プノンペン）



CJCC 学生との交流（プノンペン）



トゥール・スレン虐殺博物館（プノンペン、内部撮影は禁止）



プノンペン市内マーケット視察

## 2-2 ブータン

### (1) ブータン基礎情報

※外務省 HP: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html> (最終閲覧: 2024/01/10) から抜粋。

#### 【基礎情報】

政体	立憲君主制
面積	約 38,394 平方キロメートル (九州とほぼ同じ)
人口	約 78.2 万人 (2022 年: 世銀資料)
首都	ティンプー (Thimphu)
民族	チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言語	ゾンカ語 (公用語) 等
宗教	チベット系仏教、ヒンドゥー教等
主要産業	農業、林業、電力 (水力発電)、観光
名目 GDP	25.4 億ドル (2021 年: 世銀資料)
一人当たり GDP	3,266 米ドル (2021 年: 世銀資料)
経済成長率	4.1% (2021 年: 世銀資料)
経済概況	<p>(1) ブータン政府は、1961 年以降、5 年ごとに策定される開発計画に基づく社会経済開発を実施。2018 年からは、第 12 次 5 ヶ年計画が開始された。就労人口の多くが農業に従事しており農業が重要な位置を占めているが、近年は水力発電所の建設や周辺国への売電を含む電力セクターの開発により、工業部門の GDP に占める割合が上昇している。</p> <p>(2) ブータンは、国内市場が小さく、ほとんど全ての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、慢性的な貿易赤字を抱えている。インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要な課題となっている。</p> <p>(3) 開発の原則として、国民総生産 (GNP) に対置される概念として、国民総幸福量 (GNH: Gross National Happiness) という独自の概念を提唱している。経済成長の観点を過度に重視する考え方を見直し、(ア) 経済成長と開発、(イ) 文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、(ウ) 豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、(エ) 良き統治の 4 つを柱として、国民の幸福に資する開発の重要性を唱えている。</p>

#### 【歴史】

17 世紀、この地域に移住したチベットの高僧ガワン・ナムゲルが、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握。

19 世紀末に至り東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、

1907年、同ウゲン・ワンチュクがラマ僧や住民に推され初代の世襲藩王に就任、現王国の基礎を確立。1952年に即位した第3代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後に任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。1972年に16歳で即位した第4代国王は、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。2006年12月、第4代国王の退位により、現国王（第5代目）が王位を継承。2007年12月及び2008年の総選挙を経て、2008年4月に民主的に選出されたティンレイ政権が誕生し、5月には国会が召集され、7月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。2008年11月に、現国王の戴冠式が行われた。2013年には、第2回総選挙が実施され、また、2018年11月の第3回総選挙を経てロティ・ツェリン・ブータン協同党（DNT）党首が首相に就任した。

## （2）参加者名簿

氏名	学年	学部・学科・専攻
岩波 七菜	1年	文教育学部人間科学科
林 知里	1年	文教育学部人間科学科
伊藤 更紗	1年	文教育学部人間社会学科
吉村 紫織	2年	文教育学部人間社会学科グローバル文化学環
阿部 綾舞	3年	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
林 卓菲	M1	人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻
引率者		
小田 垣紀子	特任准教授	グローバル協力センター（副センター長）
平山 雄大	講師	グローバル協力センター

## （3）現地調査日程

	月日	活動内容	宿泊地
1	9月11日（月）	羽田空港集合	—
2	12日（火）	羽田空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着 パロ空港到着 JICA ブータン事務所訪問 JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフヘインタビュー	ティンプー
3	13日（水）	ブータン日本語学校訪問	ティンプー

		ブータン日本語学校の学生と交流 ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー一等）	
4	14日（木）	王立自然保護協会（RSPN）訪問 ブータン女性起業家協会（BAOWE）訪問 タシチョ・ゾン訪問 ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー一等）	ティンプー
5	15日（金）	RSPN オグロヅルエデュケーションセンター訪問 ガンテ・ロッジ訪問 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流	ポブジカ
6	16日（土）	ポブジカ散策（ネイチャー・トレイル） ガンテ・ゴンパ訪問 各自の研究活動（インタビュー等） 農家ホームステイ／ホストファミリーと交流	ポブジカ
7	17日（日）	JICA 海外協力隊の方々と懇談	パロ
8	18日（月）	タクツアン僧院訪問 西岡ミュージアム（農業機械公社／農業機械化センター）訪問 農家訪問 パロ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	パロ
9	19日（火）	王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問 王立ブータン大学パロ教育カレッジの学生と交流 パロ空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着	機内
10	20日（水）	成田空港到着	—

#### （4）調査報告書

氏名	タイトル
岩波 七菜	ポブジカから学ぶ持続可能なエコツーリズムに必要な支援体制
林 知里	「幸福の国ブータン」の政府と若者のギャップの実態
伊藤 更紗	ブータンにおける農業形態の変化が生活に与えた影響について
吉村 紫織	ブータンにおける開発－近代化と伝統文化の観点から－
阿部 綾舞	ブータン社会は男女平等であると言えるのか
林 卓菲	ブータンにおける高等教育の「出口」

# ポブジカから学ぶ持続可能なエコツーリズムに必要な支援体制

文教育学部人文科学科 1年  
岩波 七菜

## 1. 調査のテーマ

オグロヅルの越冬地としてラムサール条約に指定されているポブジカ谷に根ざした持続可能な観光事業（CBST）<sup>1</sup>をモデルに、エコツーリズムの形成プロセスについて調査する。エコツーリズムとは、自然環境や歴史文化を対象とし、観光客に地域の資源を伝えることによって、地域住民も資源の価値を再認識し、資源の保全に責任を持つ観光のありかたである。一方、エコツーリズムは経済的効果と環境保全のバランスをとる難しさをもつ。ブータンは持続可能な開発の概念に自然環境だけでなく、宗教や文化も含めているため、自然に対する敬意は仏教の教えと通ずる（上田 2006, p.142）。そのため、伝統文化に対する信仰心はエコツーリズムを支える要素であり、ブータンは独自のエコツーリズムを形成していると言える。

2022 年の GNH（国民総幸福量）調査<sup>2</sup>によると、2015 年以降ブータンの人々の環境保全に対する姿勢はより前向きになっているが、都市部の意識が低いことが課題となっている。2015 年には農村部住民の 78.1%が環境保全に「大いに責任を持つ」と回答し、2022 年にはその割合が 83.2%に増加した。一方、都市部に住む人々については 81.6%から 81.7%とわずかな上昇にとどまった。王立ブータン研究所は、主に農村部に住む人々によって生活困窮の減少がもたらされていると分析する（Bhutan Administer 2023, pp.284-289）。これは、農村部にて行われているエコツーリズムが環境保全に対する意識を増大させ、経済的効果をもたらしたことを意味する。このように、エコツーリズムは地元に新たな雇用をもたらし、環境教育を施すため、ポブジカ谷の地域では環境保全に対する意識が高いと考えられる。本調査を通して、ポブジカにおけるエコツーリズムの組織体制を図示化することで、地元住人の生活と自然保護を両立させるために必要な先進国の支援体制について考察する。

## 2. 調査設問

ポブジカのエコツーリズムを支える立場の異なる人々に共通の質問を行うことで、各組織間の関係性やエコツーリズムが形成されていったプロセスを視覚化する。

### 【対象】

国際協力機構（JICA）ブータン事務所：ナショナル・スタッフ

王立自然保護協会（RSPN）：オフィススタッフ  
RSPN オグロヅルエデュケーションセンター（@ポブジカ）：センター長  
ポブジカで暮らす地元の人：ホームステイのホストファミリー、ホームステイを行っていない農家  
現地ガイド：Bhutan Delight Tours & Treks 社長、社員

#### 【質問内容】

- ① エコツーリズムは、環境保護のために観光客のアクセスの困難さを維持する一方で、観光客の利便性を追求する矛盾を含んでいると考えるが、これらのジレンマを克服するためにはどんなことをしたか
- ② CBST 事業時、開発に対する地元の人々の態度はどうであったか  
地元の人はポブジカ谷の環境の希少性を知っていたのか
- ③ 他組織と協力する上で、自分たちの役割は何か

### 3. 調査結果

- ① 観光業は国の主要産業であるが、ブータンでは動植物の保全も重視しているため、GNH哲学に則って中道のアプローチを行なってきた。インタビューによって得られた具体的な原則は表1の通りである。

RSPN オフィススタッフは地元を中心に考えることで、それまで根付いていた地元の文化や生活様式を損なわずに開発が可能になると答えた。CBST 事業が“community” based program であることを強調していた。

当時 CBST 事業に従事した JICA ナショナル・スタッフによれば、ポブジカは 2009 年まで電気が通っていなかったため、当初は環境保護よりも技術開発を優先して開発を進めたと言う。JICA ナショナル・スタッフの中には、発展途上国がエコツーリズムを実行するには経済成長により重きを置くべきだと考える人もいた。一方、RSPN オグロヅルエデュケーションセンター長を含むポブジカに暮らす地元の人々は今までそのようなジレンマによって問題は起きていないと回答した。

表1 ブータンのエコツーリズムにおける原則

原則	内容
高品質・少量性	高いクオリティのサービスを保つため観光客の数は少なく保つ。 観光税を導入し、オーバーツーリズムを防ぐ。
ガイドの必要性	すべての観光客は、ブータンでの滞在期間中、ブータン観光局によって認定されたエージェントとガイドを同行する必要がある。
保護エリアの査定	厳重に保護された地域ではエコツーリズムは行われていない。トレッキングルートは専門家の意見を取り入れて設定している。
廃棄物管理	エコツアー中、ガイドはペットボトルやプラスチックの持ち込みを許可しない。

立ち入り禁止域の設定	指定された場所でのみ車を停止することができる。エージェントはバイオガスストーブを使用して食事を準備するか、最小限の薪を使用する責任がある。薪の使用が禁止されている場所もある。
------------	---

② RSPN は CBST 事業を始める以前からポブジカの開発に携わっていたため、ほとんどの人が前向きであった（表 2 参照）。なかには、ホームステイプロジェクトに対して後ろ向きの人もいたが、開発の必要性は感じていたため、実際に利益を得る体験を経て、徐々に前向きになっていった。ホストファミリーの方は、ホームステイプロジェクトによって不利益を被ったことはないと言う。ポブジカの農家からは、新たに家を建てる際には必ずホームステイプロジェクトに申請したいという回答を得た。

一方、ポブジカ谷の環境の希少性を知っている人は元々少なかった。しかし、地元に暮らす人々からは、区域ごとに定期的に行われる研修会（政府から人が派遣される）を通して、ポブジカの自然を守る責任感が芽生えていったという回答が目立った。

表 2 ポブジカにおけるエコツーリズムの展開<sup>3</sup>（網掛け部分は CBST 事業）

年	事業内容
1998	11月：RSPN によるオグロヅルフェスティバルの開催
1999	RSPN Conservation/Sustainability Program 開始
2001	RSPN オグロヅルエデュケーションセンター創設
2003	代替エネルギーの検討（当時の政府にはポブジカ地域に電力を供給する経済的余裕がなかったため、RSPN は太陽光発電の設置を検討した）
2004	
2006	エネルギー省がポブジカに電気を通すことを提案し、オーストリア政府支援のもと電線を地中に敷設
2009	
2011	5月：日本環境教育フォーラム（JEEF）と提携し、JICA からの資金援助を受けて CBST 事業を開始
2013	2月：地元の人を対象にタイ北部スタディツアーを実施（エコツーリズムを体験し学ぶ機会） 3月～11月：19世帯に向けたホームステイ研修と9名に対するガイド研修を実施、お土産プロジェクト始動 12月：旅行会社に向けた説明会を実施
2014	3月：ボードウォーク、ガイドブック、ホームステイマニュアルの作成
2015	10月：CBST 事業終了
2016	5月：ラムサール条約に指定
2021	オグロヅルの生息地マップとガイドライン作成
2022	RSPN オグロヅルエデュケーションセンターを2階建に改裝

① インタビューによって得られた回答は表 3 の通りである。

表 3 エコツーリズムを支える主体とその役割

主体	役割の例
地元住民	エコツーリズム導入の主体、資源の保全と紹介、地域振興の主体

JICA、RSPN	地域資源の価値化、開発プロセスのアドバイザー、人材育成、ガイドライン作成、資源の調査研究
現地ガイド	地域の理解者、観光者への情報提供、観光者の管理、エコツアー商品の造成
観光者	エコツアーへの参加、地域振興への協力、情報発信

#### 4. 考察

##### 4-1 現状に対する認識の違い

ブータンでは国民総幸福量（GNH）に沿うことが「中道<sup>4</sup>」を実現させる策であると信じられていた。国王への忠誠心が根強いからこそ、GNH が完全性と総意性を担い、地元の生活様式や文化を破壊することなく無理のない開発が進められてきたのだと考える。

一方、立場の異なる各組織にインタビューするなかで、ポブジカのエコツーリズムを「批判的に捉える JICA ナショナル・スタッフと現地ガイド」に対し、「前向きに捉える RSPN スタッフと現状に満足しているポブジカの地元の人々」という対立構造が見えてきた。JICA ナショナル・スタッフと現地ガイドは、経済的成長の視点を重視した現実的な立場に立っており、政府が掲げる“High Value, Low Impact”<sup>5</sup>の線引きについて疑問視し、コロナ禍から回復しつつある現状を鑑みてオーバーツーリズムへの懸念を示していた。財政面にフォーカスした批判的な意見は他地域とポブジカを比較しての視点だと言える。RSPN スタッフの意見には、ポブジカにおける CBST 事業は完了しているためエコツーリズムは達成された、という意図が含まれていたと考える。なぜなら、RSPN オフィススタッフは CBST 事業を成功事例とし、他地域にも応用するプロジェクトに移行しており、地元の RSPN オグロヅルエデュケーションセンター長からは「ポブジカの開発は終了した」という言葉があったからだ。地元の人々にとって、ホームステイプログラムに参与することが誇りとなっており、仏教における「足るを知る」精神が現状を満足させていると考える。このような、立場によって異なる認識の違いは、開発のなかの関係性によって生じたのではないだろうか。

##### 4-2 パートナーシップの主体間関係の変化

CBST 事業は当時のブータン政府の新しい観光政策（草案段階）に基づいて、自然環境の保全と観光による地域住民への直接的な裨益を目指して JEEF が JICA に提案したものであり、元々ポブジカの開発に従事していた RSPN をカウンターパートとして進められた事業<sup>6</sup>であった。そのため、ポブジカの CBST 事業は、ブータン政府が全体を包括するトップダウン型ではなく、図 1 のように JICA・RSPN・地元の人が一列に並ぶ関係性で進められたと言える。当初は観光サービスの土台が整っていなかったため、地元の人は RSPN ポブジカ環境管理委員会と協働で全ての CBST 事業に関与していた。また、マーケティングのノウハウや分野別の専門家は JEEF が日本の一般社団法人やフリーランスのデザイナーに委託する形で一斉開発が行われていた。

CBST 事業が終了してから 8 年が経過した現在、JICA や JEEF の介入はなくなり、ブ

ータン政府観光局のもとで制度化されたホームステイプログラムやツアープランが存在する（図2参照）。そのため、旅行会社が担う「観光者の管理」はエコツーリズムにおいて重要な位置づけになっている。一方、エコツーリズムにおける地元の人の関与はホームステイプログラムに参与する一部の人のみであり、限定的である。そのため、インタビューを行ったポブジカの農家は、観光客と接する機会は皆無だと回答した。そこで、RSPNはエコツーリズムに関与しない地元住民の環境保護意識を維持することに貢献している。RSPNはNGO組織であり、政府の管轄下ではないが、変わらずポブジカの環境保全を担っている。RSPNオグロヅルエデュケーションセンター長は、地元住民の入場料を無料にすることで誰にでも学習機会を提供していると回答した。また、RSPNオグロヅルエデュケーションセンターには研究室が設けられており、毎年オグロヅルの生態観察を行っている。現在RSPNはエコツーリズムのうち、環境保全により従事しているといえるだろう。

よって、前項で述べたポブジカの現状に対する認識は開発のなかで変化した主体間関係によるものだと考えられる。現在RSPNがポブジカの経済開発にほとんど関与していないことを踏まえると、JICAナショナル・スタッフや現地ガイドの意見のように、ポブジカのエコツーリズムは経済的に停滞していると捉えることができる。

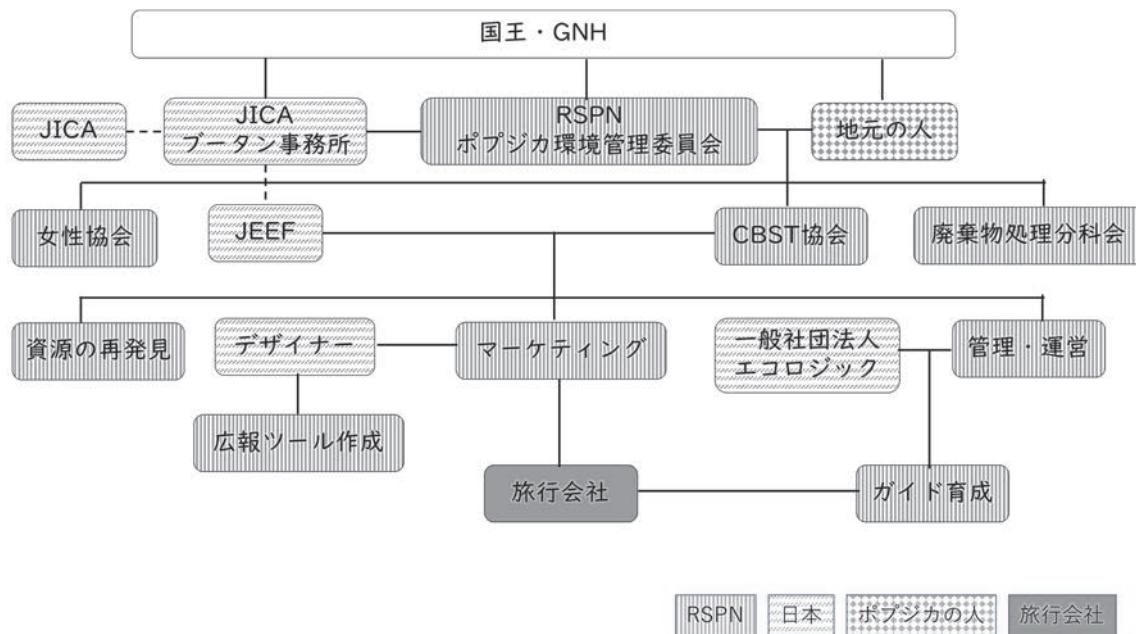


図1 CBST事業時の各組織の体制

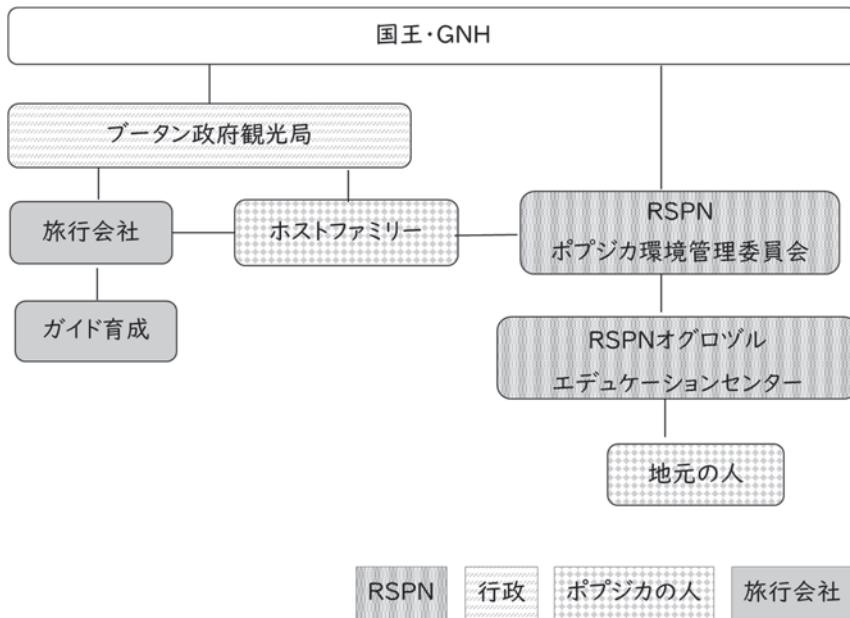


図2 2023年現在の各組織の体制

#### 4-3 先進国の介入の是非

CBST事業はポブジカにエコツーリズムをもたらした礎であり、JICAやJEEFの介入がなくなった現在もエコツーリズムは持続している。しかし、先進国の組織が抜けたことにより、パートナーシップの関係性が変化し、現状に対する認識の差や住民間の関与の差が浮き彫りになった。改めて、先進国側のサポートのあり方が問われる。

CBST事業には、ホームステイをしにきた観光客に向けたお土産プロジェクトや地元の人が作成したガイドブックの提供が含まれたが、現在は確認できなかった。CBST事業時、地元の人は開発の広範囲に従事していた（図1参照）。しかし、農業を生計の手段としている住民にとって、先進国のサポートがない状態で複数の事業を持続することは難しかったと考える。その結果、政府の後押しを受けたホームステイのみが持続し、現在のような構図（図2）になったのではないだろうか。先進国は、開発サポートの集大成として自身の組織がなくなった後を想定し、運営体制の構築支援までを実行するべきである。

開発途上地域において、資金やノウハウを支援できる点で先進国の介入には大きな意義がある。しかし、先進国の介入はグローバル化を意味し、環境破壊も、その反作用である環境保護も、どちらもグローバル化がもたらす先進国による新自由主義や環境思想の影響を受けて進行しかねない。先進国側は、グローバル化の強者が求める自然や文化ではなく、地域住民との闇き合いの中で存在してきた自然と文化を保護するべきだ。

観光資源に最も近いのは、その地域で暮らす住民である。住民が自主的にエコツーリズムを先導していくには、地域の自然や文化へ愛着や誇りを持つ「地域アイデンティティ」を形成する必要があると考える。CBST事業終了から8年経った現在、地元の人は「地域アイデンティティ」の形成段階にあるのではないだろうか。本調査は新型コロナウイルス

感染症が落ち着き出した時期に実施したため、観光客が少ない期間が長かった状況が少なからず調査の結果に影響を与えていえると言える。今後、経済活動が活発になるにつれ「地域アイデンティティ」がどのように組織の関係性に影響を与えるか注視する必要がある。

## 5. 調査に参加した感想

調査に参加する前まで、私は文化の差異を超えるために必要な感性・知識・態度として「多様性の根底にある共通の価値観」を見つけることで相互理解が実現できると考えていた。しかし、実際にブータンを訪れたことで、その土地の文化を一般化するのではなく、個別性に真摯に向き合う姿勢が求められているのではないかと思うようになった。私は人間の生死に対する尊厳は時間や場所を越えて普遍的であると考えるが、宗教を前にすると生命の前提が異なってくることをブータンで痛感した。「多様性の根底にある共通の価値観」は果たして存在するのか、これからも問い合わせていきたい。そして開発において、異文化の者がその土地の歴史的文化的背景を視野に入れながらコミュニティの試行錯誤をどのように後押しすべきか、専門的に学びたいと強く思った。調査に参加することで、自分を相対化することができるようになり、自分を改めて見直すことで、見失っていた将来像を再発見することができた。

## 6. 注

1. Community Based Sustainable Tourism の略。JICA 草の根パートナー型事業として公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）が王立環境保護協会（RSPN）と協働で 2011 年 5 月から 2014 年 10 月まで行ったエコツーリズム開発事業のことである。
2. GNH（国民総幸福量）とは、物質的な発展と精神的な発展を考慮したブータン独自の開発指標。「良い統治・持続可能な社会経済的発展・文化の保存と促進・環境保全」を 4 本の柱として調和をとる多次元的な開発アプローチ。
3. インタビューのほか、以下の資料を元に作成した。

日本環境教育フォーラム（JEEF）（2013）「JICA 草の根技術協力事業ブータン王国ポブジカにおける地域に根ざした持続可能な観光の開発」『地球のこども』9 月号。

Institute for Studies in Happiness, Economy and Society “Conserving Black-Necked Cranes in Bhutan” [https://www.ishes.org/en/eda\\_column/2013/clm\\_id000975.html](https://www.ishes.org/en/eda_column/2013/clm_id000975.html) (2023/10/29 最終アクセス)

Royal Society for Protection of Nature (RSPN) (2013) *COMMUNITY BASED SUSTAINABLE TOURISM (CBST) BUSINESS PLAN PHOBIKHA CONSERVATION AREA*, Thimphu: RSPN.

4. 対立や矛盾しあう両極端のどれにも偏らない中正な立場を貫くことを説く仏教の実践的な考え方。
5. 表 1 の「高品質・少量性」と同義。

6. 独立行政法人国際協力機構「JICA 草の根パートナー型事業 平成 22 年度第 1 回採択内定案件」

## 7. 参考文献

- 上田晶子（2016）『ブータンにみる開発の概念-若者たちにとっての近代化と伝統文化-』  
明石書店。
- 前田弘（2011）「エコツーリズムとパートナーシップ」真板昭夫、石森秀三、海津ゆりえ  
(編)『エコツーリズムを学ぶ人のために』世界思想社、pp.104-112。
- Bhutan Administer (2016) “A COMPASS TOWARDS A JUST AND HARMONIOUS SOCIETY 2015 GNH Survey Report”, *Centre for Bhutan & GNH Studies*, pp.211-216.
- Bhutan Administer (2023) ”2022 GNH Report”, *Centre for Bhutan & GNH Studies*, pp.284-289.
- Pacific Asia Travel Association (PATA) (2015) “Community Based Tourism in the valley of Phobjikha: Successes and challenges”, *PATA Adventure Travel and Responsible Tourism Conference and Mart 2015*, pp.7-9.

# 「幸福の国ブータン」の政府と若者のギャップの実態

文教育学部人文科学科 1年  
林 知里

## 1. 調査テーマ

ブータンは、1970年代に第4代国王であるジグミ・シンゲ・ワンチュク国王が「国民総幸福量は国民総生産よりも重要である」と提唱しているように、国民の幸福度である「国民総幸福量（GNH）」を国の政策の中心にしている。そして、ブータンは発展途上国でありながら「世界一幸福な国」として知られていて、実際にGNHは国際社会におけるブータンのブランドイメージになっている。ブータンと聞いて「世界一幸福な国」というイメージを思い浮かべるものは多い。

ブータンが幸福な国であるというイメージの根拠となるのは、2005年に行われた国勢調査の「国民の97%が幸福である」という結果であろう。しかし、この結果は「とても幸福である」「幸福」「あまり幸福ではない」の3択式の回答の「あまり幸福ではない」の3.3%を除いて四捨五入をすると得られるものである。さらにこの調査は、国勢調査員の戸別訪問による対面式の聞き取り調査で行われた。人口が80万弱程度しかないブータンでは、少しだれど誰もが何かしらの関係を持つ。国をあげてGNHを推し進めているなかで、権力を持つ人々に何らかの形で繋がっている国勢調査員の戸別訪問による聞き取り調査でどのくらいの人が素直に自分の気持ちを話すことができるだろうか。よって、この国勢調査の結果からブータンの多くの国民が幸福であると判断するのは早計であると考えられる。さらに、アフターコロナでブータンの国民の海外流出が加速したり若者の失業率が上昇したりしている。2022年だけで16,973名が海外へ移住をし、2023年は1月と2月の合計だけで10,000名以上がブータン唯一の空港であるパロ空港から飛び立った。このことからも、ブータンのイメージを捉え直す必要があると考える。したがって今回のスタディツアーレポートの調査テーマを、「国民の幸福を願う国家とブータンの国民とのギャップの実態」とした。

## 2. 調査設問

調査にあたり、ティンプー、ポブジカ、パロでインタビューを行った。

- Q1. 将来どのような職業に就きたいか。（子どもの頃はどのような職業に就きたかったか。）
- Q2. Q1を実現するために海外留学などで海外へ行きたいと思うか。
- Q3. ブータンで現在問題になっている海外への人材流出についてどのように考えるか。
- Q4. Q3の問題に対してブータンの政府はどのように対処すべきか。

## 3. 調査結果

インタビューで得られた結果を設問ごとにまとめる。

**Q1)**医者や教師といった人のために役立つような職に就きたいと考える人が多かった。また、現在 8 歳の子どもがいる男性に、子どもの世代で人気の将来の夢は何かと聞いたところ、医者が最も人気であるとの回答を得た。

**Q2)**ブータン国内で十分に学べるため海外留学は必要ないという意見と、ブータンでは学べない新しい知識や技術を得るために海外留学したいという意見があったが、海外留学を望む意見の方が多かった。ブータンで海外の大学と同じ水準の教育を受けることができるのなら海外へは行かないという声もあった。

**Q3)**公務員や専門知識を持つ人が国内から減少してしまうので問題であると捉えている人がいる一方で、海外へ行った人が帰ってくることでブータンに新しい知識とビジネスをもたらしてくれるので、ブータンの将来のためには良いことだとポジティブに捉えている人がいた。また近年の SNS の普及によって、海外移住したブータン人が豊かに暮らしている様子を SNS で見て海外に行きたがる人も出てきた。しかし最近では逆に、SNS の人々への波及のしやすさを利用して、海外移住してもブルーカラーのきつい仕事で働くなくてはならない、と忠告する人が増えている。

**Q4)**まず、賃金の上昇という意見がインタビューの回答に共通して出てきた。ブータンで 1 ヶ月働いたときの月給とオーストラリアで 1、2 日働いたときの給料が同じであり、賃金が働く時間と見合うようになることが求められている。その次に多かった意見は雇用の創出である。優秀な人材でもブータン国内に雇用の機会がないと海外に職を求めるようになる。また海外へ行く人も最初はお金をある程度稼いだらブータンに帰りたいと考えていたが、次第に、帰っても仕事がない、と言って帰りたくなるそうだ。さらに、先進国から技術を学んでブータンのレベルを高め、オーストラリアなどの国と競えるようになる必要がある、という意見もあった。

#### 4. 考察

精神的な充足や豊かさを重視するという政策はリーマンショックやユーロ危機による経済の停滞を経験した先進国に刺激を与え<sup>1</sup>、また「幸せな国」ブータンの国王が 2011 年に日本の国会で行った演説は、東日本大震災という困難を経験した日本人々の心を打った<sup>2</sup>。しかし現実は簡単なものではなく、「ブータンは幸福な国である」というイメージの一方で、その「幸せな国」から出て行こうとするギャップが生じていた。このようなギャップはブータンの国民性と関係して生まれたのだと考えられる。実際にブータンを訪れて現地の人々と触れてみると、彼らは立ち居振る舞いがゆったりとしていて穏やかな表情を

していることがわかった。加えてブータンではチベット仏教が広く受け入れられていて、その仏教の「足るを知る」という教えが国民に浸透している。これらが物質的な豊かさだけを重視しない GNH という考えが生まれる土壤となったのではないかと考える。そしてその GNH からブータンと幸福のイメージの繋がりができた。

しかし、ブータンの人々に人気のある職業は医者や公務員といった第三次産業の職業であり、手作業でやるきつい仕事は敬遠される傾向にある。それに、自らは農業に従事していても、しっかりと教育を受けた自分の子どもには農業のような肉体労働の家業を継ぐのではなく都市でホワイトカラーの仕事に就いてほしい、と願う親も多い。現に、ブータンのいわゆる 3K の仕事はインドからの出稼ぎ労働者が担っているのだ。スタディツアーノード訪れたパロの市場には、たくさんのインド人労働者がいた。精神面での豊かさが注目されがちだが、物質的な面にも目を向けてみると、2021 年の時点でブータンにおける一人当たりの国民総所得は 11,250 米ドルで、インドの 7,130 米ドルを約 60% 上回っている。その上ブータンよりも人口の多いネパールは 4,230 米ドルで、ブータンのおよそ 3 分の 1 程度である。一人当たりの国民総所得の数値だけを見れば、ブータンは南アジアの中で 1 番豊かなのだ。これはインド人労働者と関係していると考えられる。

したがって、きつい肉体労働はしたくないブータンの人々とブータンにある仕事のミスマッチが起きていることがわかる。海外へ移住した人は国に帰っても仕事がないからと言ってブータンに帰らないが、国内に仕事がないのではなく、先進国で働いていたときと同じ水準で賃金がもらえる仕事がないのだ。また、ホワイトカラーの職に就くのではなく農業を継いで、政府が進めているオーガニックな農作物を栽培したとしても、ブータンのオーガニック野菜はしっかりととしたブランド化がなされておらず国民に浸透していないため、あまり利益を上げられないのだ。

以上のことから、ブータンは国外から幸福な国だと思われても実際には人材の国外流出が増えているといった問題が発生していることが分かった。そう言った問題は国民性と関連していると考えられるため、政府はそれを踏まえた賃金の上昇や、農業などの政策の見直しを求められていると考察する。

## 5. 調査に参加した感想

調査に参加する前まではブータンに「秘境」などの印象を抱いていたが、訪れてみるとその近代化の進展に驚かされた。都市ではほとんどの人がスマートフォンを持っている。さらに、ポブジカでホームステイ先のホストマザーにインタビューを行っているときに、ホストマザーが彼女の孫をスマートフォンで大人しくさせていたのには衝撃を受けた。電子機器が普及しているとは聞いていたが、自分の目で見るとまた違う印象を持つようになり、フィールドワークの重要性を改めて感じた。また、私はこの調査中に体調を崩して十分に参加できなかつたため、自身の体調管理の大切さを痛感した。

## 6. 注

- 1 日本経済新聞「幸せの国ブータン 揺れる幸せの定  
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO87199540T20C15A5000000/> (2023/11/24 最終アクセス)
- 2 JICA 海外協力隊「知られざるストーリー」  
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/story/09/index.html#:~:text=%E3%80%8C%E5%B9%B8%E7%A6%8F%E3%81%AB%E3%81%AF%E7%89%A9%E8%B3%AA%E7%9A%84,%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6%E4%B8%80%E8%BA%8D%E6%9C%89%E5%90%8D%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%82%8B%E3%80%82> (2023/11/24 最終アクセス)

## 7. 参考文献

- NHK 「ドキュメンタリーWAVE」取材班、アグネス・チャン (2013) 『ブータン 幸せの国の子どもたち』東京書籍株式会社 Kuensel 紙
- BUSINESSINSIDER 「国民の幸せが最優先『国民総幸福量』で確立したブータン王国の地位」 <https://www.businessinsider.jp/post-259078> (2023/10/31 最終アクセス)
- Date Commons 「ブータン」  
<https://datacommons.org/place/country/BTN?category=Economics&hl=ja> (2023/10/31 最終アクセス)
- Date Commons 「インド」  
<https://datacommons.org/place/country/IND?category=Economics&hl=ja> (2023/10/31 最終アクセス)
- Date Commons 「ネパール」  
<https://datacommons.org/place/country/NPL?category=Economics&hl=ja> (2023/10/31 最終アクセス)

# ブータンにおける農業形態の変化が生活に与えた影響について

文教育学部人間社会科学科 1年  
伊藤 更紗

## 1. 調査テーマ

ブータンでは、20世紀末ごろまで自給自足の生活が行われていた。しかし、商工業の発達により農業従事者の数は減少した。また農業機械の導入や品種改良による高地でも栽培可能な農作物の登場によって、農家の農業のスタイルにも変化が起こっている。本調査では、このような農業の形態の変化がブータンの人々の食生活にどのような変化をもたらしたのか、ということに焦点を当てた。また、現在ブータンでは若者の海外への人口流出やインドからの出稼ぎ労働者の増加など社会の変化もめまぐるしい。このようなブータンにおいて、社会の変化がブータンの農業、市場に与えた影響についても調査した。これら2つの観点からの観察によって、社会の変化と文化の変化の関係性や、グローバル化とそれに伴う均一化が進む現代社会において文化とはどのような意味を持つのかということについて考察した。

現在、ブータンの農業は諸外国の支援に支えられている。上記に加えて、農業従事者へのヒアリングを通して、ブータンの直面する農業の問題点や農業支援の問題点を洗い出し、それに対してブータン人と支援国の人々の間に存在する意識のギャップを明らかにした。また、それらの結果からブータンにおける今後の農業支援のあり方について考察した。

## 2. 調査設問

初めの3日間滞在していた首都ティンプーでは、農業を実際に営んでいる方々へインタビューを行うことができなかった。しかし、JICA ブータン事務所を訪問した際、ナショナル・スタッフの方へ現在の JICA が行っている農業支援について質問することができた。また、日本語学校の学生との交流の際に、「ここ10年で食べるものに変化があったか」という質問を行い、ブータンの一般市民の食生活について調査した。また、日本語学校の学生と市内散策を行った際に、ブータンの学生が日常的に食べているスナックなどを実際に食べることができた。4日目から訪問したポブジカは、かつては放牧を行ない、その傍らでそばのような作物を栽培していたが、じゃがいもの導入によりじゃがいも栽培やその他の作物の栽培が盛んになった地域である。ポブジカでの滞在では農業を営んでいるホームステイ先の方々を中心に「近年、食べるものに変化があったかどうか」「じゃがいも栽培によってどのように生活が変化したか」「政府の農業支援についてどう思うか、不安なことはあるか」といった質問を行った。また調査の途中でブータン人は家族と一緒に食事をとることを大切にする、ということがわかったので、「商業の発達など生活が近代化する中で、家族で食事をとることに対する意識の変化はあるか」という質問も加えた。最後

に訪れたパロでは JICA 海外協力隊の方に農業支援の課題についての質問や、農家の方に生活の変化についての質問をした他、市場でのインタビューも実施し、販売する作物の変化や客層の変化などについて質問した。

### 3. 調査結果

「ここ数年で食べるものに変化はあったか」という質問に対して、都市部のティンパーではハンバーガーなどのファストフードを食べるようになったという回答があった。しかし、ファストフードをよく食べるのは若者に限られるようで、30代以降の人々は、存在は知っているが若者の食べ物であるといった認識を持っていた。また、JICA 海外協力隊の方の話によると、ブータン人は食べ物の調理法に対して保守的な意見を持つ人が多く、日本食の調理法を紹介されてもあまり率先して取り入れようとしないというように、新しい調理スタイルを好まないということがわかった。そして、この質問に対しては、食べなくなったものと食べるようになったものがあるのではなく、料理に使用する食材が多様になったという回答が多く見られた。

ポブジカでのホームステイ先でのインタビューでは、じゃがいもの栽培によって起こった生活の変化について聞くことができた。訪問した農家では、30年前まではそば栽培を行い自給自足の生活を行なっていた。じゃがいも栽培が始まると、じゃがいもという換金作物を手に入れることで貨幣を獲得できるようになり、それまでにあった借金を返済できるようになったという。またそこで得た資金をもとにポブジカの自然環境下では本来栽培できないような作物のビニールハウスでの栽培や、市場でさまざまな食材を購入できるようになり、食生活の多様化が進んだことがわかった。

「生活のスタイルの変化によって、家族が揃って食事をとることに対して意識の変化はあるか」という質問に対しては、一緒に食事をする機会が減少してしまっているが、できる限り家族で食事をとりたいと考えている人が多かった。ただし、家族揃っての食事という行為は会話を通して家族の状況を知る、家族を守るための情報交換の場としての機能を備えていたが、その機能が損なわれない程度になら家族が揃う食事の回数が少なくなるのは悪いことではないのではないか、という意見も見られた。

市場でのインタビューでは、現在のブータンが抱える社会問題と市場の様子の関係を浮き彫りにすることことができた。現在、ブータンではオーストラリアを中心とした外国への若者の流出と、インドからの労働者の流入が起こっている。市場で話を聞くと、購入者の多くはインド人であり、ブータン人の客は減少傾向にあるという。それに合わせて、インド産の農作物を販売している店舗が多かった。JICA の方や市場の店員さんの話によると、ブータン人の間では最近オーガニック志向が広まっており、ブータン人が購入するのはブータン産のオーガニック野菜が多いと話していた。一方、一般国民には市場で買うオーガニック野菜は普通の野菜と比べて高価で購入することができないため、オーガニック野菜を食べることができるのは、農家をやっている実家の田舎に行くときだけだと話す都市労

働者の方もいた。また、青年海外協力隊の方の話によるとオーガニック野菜のみの販売店が存在しないため他の野菜との区別化が困難であることや、オーガニックの認証を行うことで値段が高くなってしまい、売り上げが減少するという制度の未整備による課題が存在していた。

農業支援については、質問の対象者によって回答が異なる傾向がみられた。まず JICA のナショナル・スタッフの方へのインタビューでは、農村から都市部に人口が流出し農業人口が減少しているものの、農業の機械化や IT 化による smart agriculture への取り組み、農家と市場を結ぶ流通システムの整備が進展しているため、ブータンが抱える農業問題はいずれ解決に向かうというポジティブな意見が聞かれた。一方、ポブジカの農家の方は、現在は種が無料で購入できたり、国の機関が農作物を全て買い取ってくれるが、じゃがいもの価格変動が激しい中で、そういった支援が有料になったり打ち切られてしまうのではないかという不安を感じていた。また、実際に農業機械の支援などを行う AMC (agriculture machinery centre) では、国からの支援が一時的に打ち切られるという事態が起こっていた。また、JICA 海外協力隊の方の話でも、現場ではうまく農業政策が機能していない、ブータン人の発展への意欲の低さゆえにプロジェクトがある程度のクオリティで終わってしまう、という開発側と現地の人々の意識のギャップが存在することもわかつた。

#### 4. 考察

調査前の予想では、栽培する作物が変化することで食べるようになったものもあれば食べることがなくなったものもあり、そこに文化の喪失を感じている人が存在するのではないかと考えていた。しかし、実際調査をすると、ポブジカではじゃがいもという換金作物の栽培を始めることで、ブータンの農家はじゃがいも栽培を始める前に栽培していたそばのような作物を貨幣で購入することができるようになっていた。結果、ブータン人は料理にさまざまな食材を使用できるようになっていた。食生活は生存に欠かせないものであり、さまざまな栄養が摂取できるようになることは、それまで伝統的に続けられてきた食生活を文化として維持していく以上に重要だとみなされたのではないかと考えられる。また、他の地域でも同様に食文化の変化は他の文化よりも変化が早く進んでいるのではないかと考えられる。日本料理の取り入れに消極的な姿勢や、煮込み料理が多いことから、食卓で使用される食材は多様化している一方、調理法には保守的な姿勢があり、調理法の変化は緩やかだったとわかった。このことにも先述した生活との密着度が関係しているのではないかと考えられる。調理法は変化することによって摂取することができる栄養が大きく変わることはないため、調理法の変化はあまり速度を伴わないと考えられる。

また、食事のとり方の変化は、食材の変化と同様にかなり早く進んでいるということがわかった。食事のとり方は、家族の構成員がどんな仕事をしているか、どこで仕事をしているかに大きく影響を受ける。急速に商業など第三次産業が進展したブータンでは若者を

中心に、デスクワークに就く人や地元を離れて都市部に働きに出る人が増加している。食事のとり方はそれに伴って変化していくので、家族での食事ではなくそれぞれに食事をとる人が増加しているのではないかと考えられる。そして、食事をとる形態の変化は食材の変化よりも人の心理に影響を与えるのではないかと考えられるため、それに対して抵抗感を感じるような意見が多く聞かれたのではないかと考えられる。この状況は、本来ブータン社会に存在していた家族や近所の人々をはじめとしたコミュニティ内での助け合いの習慣を喪失させ、現代の日本で問題となっているような孤食や家庭における育児の負担の増加などの課題が生まれてくるのではないかと想定される。

農業支援の分野では、農業支援を企画する人々と実際に支援をしている人、支援を受ける人々の間に大きな認識や目指すものの乖離が存在していることがわかった。ブータンの所謂エリートである JICA のナショナル・スタッフが話す政策は、オーガニック食品の件や、農業の IOT 化のように、現地で話を聞いてみるとあまり実現されていないものが多く、現実的ではないという印象を受けた。このように現場と卓上の議論とで意識に差が生まれてしまうのはありがちな話であるが、現場の中でも住民と支援者の間で意識に差があり、住民の方が支援に対してのモチベーションが低い、というのがブータンの農業開発への意識という点で特徴的である。これは、ブータン人の精神性に深くみられた「足るを知る」ということから生まれる考え方なのではないかと思う。支援者は被支援国を豊かにすることがその使命であるが、住民の意思が存在しない開発は心理的反発を生み出し、その後の自立した農業の実現につながらないというリスクも考えられる。そのため、支援者は住民との対話を綿密に行い、新しい技術を取り入れることで生じるメリットを住民に広め、それを受け入れてもらえるような時間をかけた支援を行う必要がある。しかし、国の農業問題に対する認識が甘く、支援が十分ではないことは確かである。大国に挟まれているブータンにとってその地位を確かなものにするためには、国の基盤となる食料を外国に頼らず自足していくことが重要になるはずである。そのためにも、国からの農業支援を縮小の傾向から一転させ、IOT 化の実現を急ぎ、安心して農業に就ける、若者が農業をしたいと思えるような現実的な整備を行なっていく必要がある。

## 5. 調査に参加した感想

ブータンの中で生み出された独特な文化の存在や、目に見えた激しい格差が存在しないことが、ブータンでグローバル化や近代化が進むことへの私を含めた外国人の抵抗感を生み出していた。しかし、生活が便利・豊かになることは現地の人々にとっては重要なことである。文化はそういった生活を豊かにする新しい技術を取り入れて新しいフェーズに入っていくもので、この変化は当事者でない我々が止めるべきものではない。しかし、現在急速に進んでいるグローバル化や技術の進歩は、世界を均一にしてしまうという危険性を孕んでいる。私は、文化の多様性は思想の多様性であり、世界の均一化はその中に存在するさまざまな人の思想に不寛容になるのではないか、と考えている。そのため、文化は常

に移り変わってしまうかもしれないが、かつてはさまざまな文化、生き方があったということを示すと同時に人々に選択肢を提供するために、今存在する文化の記録を可能な限り残していく必要があるのではないか、と今回のフィールドワークで気付いた。そして私は、それを実現するためにこれから活動していきたいと思った。今までの興味が深まり、私の今後の人生の指針を明らかにしたという点で今回のフィールドワークはとても意義深いものになった。

## 6. 参考文献

JICA 報告書 PDF 版「第 4 章 ブータンにおける農業生産の状況」

[https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12080818\\_02.pdf](https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12080818_02.pdf) (最終閲覧日 2023/10/28)

National Accounts-Analysis of Main Aggregates “Basic date selection-Bhutan”

<https://unstats.un.org/unsd/snaama/Basic> (最終閲覧日 2023/10/28)

西岡京治, 西岡里子 (2016) 『ブータン 神秘の王国.第 6 版』 NTT 出版株式会社

# ブータンにおける開発 －近代化と伝統文化の観点から－

文教育学部人間社会学科 2年  
吉村 紫織

## 1. 調査テーマ

### 1.1 テーマ

本調査では「途上国に暮らす人々は本当に開発を望んでいるのか」という疑問から、ブータンにおける開発の捉え方を「近代化」と「伝統文化」の観点から調査する。先進国が主導権を握ってきた開発において、通常、経済や産業の発展が最終目標に据えられ、その中で伝統的な文化が廃れ、近代社会へと向かう開発対象地域も少なくない。だが国民総幸福量（Gross National Happiness、以下 GNH と記す）の最大化を政策の根幹に据えるブータンは、伝統文化と近代化のバランスの維持を重視するという、従来の開発の考え方に対し挑戦的な開発アプローチを掲げる。こうした指針のもと 2023 年で LDC からの卒業を予定するほどの目覚ましい発展を遂げているブータンだが、同時に伝統文化の維持、都市と農村の格差や若者の海外流出といった課題も抱える。ブータンにおいて開発は何をもたらし、何を失わせたのか、開発のあるべき姿を考察したい。

### 1.2 先行研究

ブータンにおける伝統文化の役割と政府の基本姿勢について、上田は以下のように言及している。「近代化に直面するなかでブータン政府は伝統文化の保護に大きな努力を続けており、それは中国とインドという大国に挟まれている地政的な状況からブータン人がある意味の危機感を常に抱いていることと関係している。ブータン政府は自国のユニークな文化を、国家主権を維持するための武器として位置づけ、その発展を推し進めている。

（上田 2006,pp11-12）近代化のマイナスの影響は認識しつつも、政府は、社会経済的開発と文化的継続性は原則として相容れないものではないという基本姿勢を保ち続けている。そして政府の開発の方針は経済的豊かさと精神的豊かさの調和を目指すものであるといつていている。（上田 2006,pp.133-134）」ここから小国ブータンとしての独自の伝統文化の捉え方と開発路線が窺える。

## 2. 調査設問

質問項目は上田を参考に以下の 6 つを設定した。（上田 2006,p102）現地では直接英語で聞き取りを行う場合と、通訳を介した場合とがあり、対象は現地で出会った様々な人である。

①あなたにとって幸せな生活とは何か。

- ②開発によって生じた、ブータンにとって肯定的な変化は何か。
- ③開発によって生じた、ブータンにとって否定的な変化は何か。
- ④あなたにとって（誇りに思い、続いて欲しい）伝統文化は何で、それはあなたにとって何を意味するか。
- ⑤伝統文化を維持しながら、近代化を進めることは出来ると思うか。もしできないのであれば、どちらを優先すべきか。
- ⑥30年後のブータンはどのようにになっているか。

※①の幸せな生活について、回答に困る様子が見られた際は GNH を提唱した第 4 代国王が GNH を国民に説明する際に多用したとされるガトト・キトト（心身が充たされた状態）という言葉を用いて説明を加えた。④の伝統文化については、4 日目以降は、「あなたが誇りに思う」「あなたが続いてほしいと願う」といった修飾の言葉を付け加えていた。

### 3. 調査結果

合計で 21 名の回答が得られた。以下の表がその一覧である。

表 1 インタビュー協力者基礎情報（空欄は不明な箇所）

	場所	年齢	性別	補足
A	JICA ブータン事務所	30 代	男性	ナショナル・スタッフ
B	JICA ブータン事務所	30 代	男性	ナショナル・スタッフ
C	JICA ブータン事務所	30 代	男性	ナショナル・スタッフ
D	JICA ブータン事務所	30 代	男性	企画調査員
E	メモリアル・チョルテン		女性	
F	ブータン日本語学校	20 代	女性	学生
G	Bhutan Delight Tours & Treks 社員		男性	
H	ポブジカ農家（ホームステイ先）		女性	
I	ポブジカ農家（ホームステイ先）	30 代	女性	コスメビジネスをしている
J	ポブジカ/ネイチャー・トレイル		男性	「クル」というダーツの矢の部分を丘で作っていた
K	ポブジカ/男性が相続している家	50 代	男性	父
L	ポブジカ/男性が相続している家	30 代	男性	息子
M	JICA 海外協力隊	30 代	女性	
N	JICA 海外協力隊		女性	
O	パロ/市場		女性	
P	パロ/農家		女性	
Q	日本語ガイド	30 代	男性	
R	日本語ガイド	30 代	男性	
S	現地ガイド	30 代	男性	
T	Bhutan Delight Tours & Treks 社長		男性	
U	帰りの Drukair	20 代	女性	

（・で区切られた意見は同一人物によるもの）

### 3.1 幸せな生活について

質問①への回答

健康面：自分や家族の健康 (I,R,S,U)、丈夫な体 (K)、ストレスがない (R)

衣食住：昔と比べると暮らしも食べ物の入手も楽 (H)、食べ物と着るものに困らない (P)、満ち足りた衣食住 (U)

社会面：良い教育 (I)、無償化された教育と医療 (L)、君主制 (A)、良い仕事 (C)

精神面：自分のマインドセットと *forgiveness* を持つ・相手と比べない・冷静でいること (T)

人とのつながり：家族と暮らすこと (I)、観光客と話すこと (E,J)、国民・国王・国相互の助け合い (K)

その他：ブータンに生まれたこと (O)、(動物ではなく) 人間として生まれたこと (Q)

健康に言及する人が多く、都市/田舎やホワイトカラー/ブルーカラーで回答に差はあまり見られなかった。

### 3.2 開発の意識

質問②への回答

生活面：機械の導入で農業が楽になった (P) ホームステイや換金作物で収入が安定した (H)

社会面：教育や医療の質向上 (F,R)、教育や医療の無償化 (F)、留学の機会 (I)

その他：家族とのコミュニケーションが容易に (R)、デジタライズ (C)

教育や医療のアクセスと質の向上への言及が多い。一方でポジティブなことは何もないと言いつ切る人もいた。 (S)

質問③への回答

自然：生態系への影響 (C)、地球温暖化 (農業への影響) (P)、動物の天国が壊れる (Q)

人口流出：留学で生産人口が減少・オーストラリアでの差別 (I)

精神面：人を羨むようになる、人と自分を比べてストレスを感じる (R)、ネガティブ思考 (A)

文化面：伝統文化の保護ができない (C,G)、人々が英語とゾンカ語のみを話す (G)、家族の時間が減少 (C, R)

その他：多すぎる観光客・高い税金 (S)、子どもが外で遊ばず、携帯で目が悪くなる (R)

伝統文化の衰退に限らず、多様な問題が指摘された。ネガティブな影響はないと言いつ切る人もいた。 (A,H)

### 3.3 伝統文化への意識

質問④への回答

伝統文化は何か。

民族衣装：伝統衣装（B,H,I,K,P,U）すぐにブータン人とわかる（H）、世界中どこにもない（P）

仏教：仏教文化（C,Q,S,U）仏教徒としての誇り（B,I）、他の国からも学びに来る・神様もすぐに願いを叶えてくれる（P）

その他：伝統音楽（R）、祭り（C）豊かな森林（U）伝統建築やペイント（C,U）、GNH（C）、人との交流（S）、国王や年上を尊敬する気持ち（K,U）、独自の言語（A,C）

伝統衣装や仏教文化を上げる人が多かった。

あなたにとって伝統文化は何を意味するか。

ブータン人としてのアイデンティティ（B,F,G,I）

独立を維持していくための1つの手段（D）

質問⑤への回答

可能：維持に集中・文化を忘れず優先度を高くする・他国に追随しない（S）、GNHに則る（C,U）、変化のスピードに注意する（ゆっくり）（A,G）、王様による国づくり（P,Q）

難しい：学生は英語を話す（言語が違うと考え方が違う）・田舎から都会・都会から海外への人口流出（R）

その他：両立しなくてはならない・他国が発展していてブータンだけしなかつたらそれは国民の幸せではない（B）、アメリカやオーストラリアのブータン人コミュニティではアーチェリーや伝統衣装を維持（R）、若い人ほど文化の維持について考えている（T）

どうすれば伝統文化を維持できるかまで言及する人が多く、日頃から伝統文化について考えている様子が見てとれた。

### 3.4 ブータンの将来像について

質問⑥への回答

マイナスの意見

社会：医療や教育の有料化・物価上昇の懸念（H）、高齢者しかいない（R）

自然：地球温暖化（K,L）

文化：会話が英語・今ある雰囲気の消滅（G,R）

その他：メガシティプロジェクト（土地はブータン、住むのは海外の金持）（I）

全てのサービスがロボットの手に渡る・テクノロジーに支配される（B）

プラスの意見

社会：教育の質の向上（I）、インド政府との関係が良好に（I,Q）、電気、道路、灌漑のインフラ整備（S）

技術：新しい建築・テクノロジー（R）、田舎の人もスマホが使える（R）

その他

他の先進国（日本やイギリス）のようになっている（G,U）、王様がいれば大丈夫、いい状態（P,Q）

ここ最近の変化が著しいから、と回答に悩む様子が見られたものの、プラスマイナス様々な将来像を思い描いていることがわかった。

#### 4. 考察

現地調査を経て次のことが考察できる。

第一にブータンの人々は基本的には開発を必要なものとして捉えていることだ。開発によるポジティブな影響として教育や医療に始まる、日々の利便性向上があげられ、実際、現地の開発のアクターとしての JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフは「いつまでも伝統様式で暮らすわけにはいかない」「他国の発展を前に、ブータンも発展しなかつたらそれは国民にとって幸せではない」と断言した。同時に、多くの人がそのネガティブな影響も認識しており、伝統文化の衰退に限らず、自然環境から人口流出まで多様な問題を挙げた。渡航前は日本のメディアの影響で、幸せな生活とは何かという問いに「家族さえいれば幸せだ」や「衣食住さえあれば幸せだ」といった回答が得られると予想したが、実際は健康や教育、医療や仕事といった声が多く聞かれた。やはり開発をする際は「伝統的な生活様式を維持してほしい」といった価値観を押し付けるのではなく、実際にそこで暮らす人々が幸せな生活をどのように思い描いているのかという観点を中心に据えるべきだと感じた。

第二にブータンにおける伝統文化は後進性の象徴ではないということだ。誇りに思う、続いてほしい伝統文化として伝統衣装や仏教文化を中心に様々なものが挙げられ、その保持はブータン人としてのアイデンティティに寄与していることがわかった。また上田の先行研究の通り、独立を維持するための手段という捉え方も存在した。しかし、この調査で明らかになった重要な視点として先行研究では言及のなかった国王への尊敬の念があげられる。インタビューの中で王様という言葉がたびたび聞かれ、街の至る所で写真を目にするほど国王を大切にしているブータンの人々だが、おそらく伝統文化の維持も王様の教えだから大切にするという側面も強いのではなかろうか。途上国において後進性と捉えられがちな伝統文化がブータンの文脈においては、アイデンティティや国王、宗教、国の存続・ブランド化などと強く関連し、開発と共に存する必要がある重要な観点であることがわかった。この点は従来の開発と伝統の関係の捉え方に新たな示唆を与える、重要な気づきであろう。

第三にブータンの人々は政府と同様に、近代化と伝統文化は相容れないものではないと認識していることだ。ブータンの将来像については、ここ 30 年の目まぐるしい変化を前に

悩みつつ、教育やインフラの充実、テクノロジーの進化を主に挙げながらも、伝統文化については「～すれば可能だ」の形で、努力や工夫で維持できる、すべきだとの声が多く聞かれた。ここに、他国への追随ではなく、変化のスピードに注意しながら国王や GNH に則り、ブータン独自の開発路線をとる姿勢が見てとれた。

その他認識した開発に関わる諸課題を 2 つ挙げたい。1 つ目が若者の海外流出だ。調査中至る所でオーストラリアへの頭脳流出が話題に上った。高い若年失業率のもとでブータンの生活に将来性を描けなくなっている若者が増えているようだ。2 つ目は開発のアクターと現地の人々の求めるレベルの不一致だ。ブータンの人々が「これで十分」と満足するレベルが JICA や協力隊の方が思い描くものより低いことがあり、それが活動する上で葛藤や衝突につながることがあると聞いた。協力隊の方は「選択肢を与える」と開発を捉えており、現地の人々の意見を尊重して最終的な決断を行っていた。

これらの観点からブータンは開発を考える上で、非常に興味深いフィールドであり、多くの示唆を与えてくれるといえる。

## 5. 調査に参加した感想

渡航時の空港で掲げた目標は「将来開発にどのように向き合うか判断するための示唆を得る」であった。春に渡航した初めての途上国、インドネシアで人々と交流する中で、先進国が途上国を“開発”するという考え方そのものへの疑問や、“現地の人々は本当に開発を望んでいるのか”“開発は良い影響をもたらすのか。負の影響にはどのようなものがあるか”といった疑問を抱いた。将来、開発に携わりたいのか、携わるにしてもどのように向き合えば良いのかわからなくなってしまい、精神的な豊かさが残るとされ、独自の開発路線を掲げるブータンでフィールドワークをすることで、将来の道へのヒントを得たいと思った。研究を進める中で現地の人々は悪影響も踏まえた上で、開発による便利な生活を望んでいることがわかった。ブータンで発展とは直線的なものではなく、多面的なものであることを学び、将来途上国における開発に携わりたいとより強く思う今、その悪影響をいかに減らすか、いかに現地の人々の思いを汲む形で開発を進めるかという新たな問い合わせが生じ、進むべき道が明確になった。開発をする人々、そこで暮らす人々それぞれから話を伺い、開発、そして自分の将来を問い合わせ契機を得たことがこのスタディツアーパートに参加した大きな意義だと考えている。

## 6. 参考文献

上田晶子（2006）『ブータンにみる開発の概念 若者たちにとっての近代化と伝統文化』  
明石書店

# ブータン社会は男女平等であると言えるのか

文教育学部言語文化学科 3年

阿部 綾舞

## 1. 調査テーマ

### 1-1 先行研究：ブータンのジェンダーギャップ指数

2022 年に公表された世界経済フォーラムが示す世界ジェンダーギャップ指数の統計によると、ブータンの場合、経済が 0.537、政治が 0.093、教育が 0.955、健康が 0.962、全体で 0.637、世界ランクは 126 位である。2023 年度版においては、ブータンの場合、経済が 0.708、政治が 0.093、教育が 0.963、健康が 0.962 であり、全体は 0.682 で、世界ランクは 103 位である。

また、2023 年のデータを細かく見ると、ブータンは、経済分野において、女性参画率や給料、管理職の順位は比較的良好（それぞれ 15 位、48 位、38 位である）が、専門職・技術者の割合が極端に低く、119 位である。さらに、農業において女性が管理する割合は 32.80%、男性が管理する割合は 26.30% となっており、農業においては女性の就業率・管理率が高いことがうかがえる。一方で、仕事を持たない人口・パートタイムで働く人口はどちらも女性の割合が高く、無償の家事やケアに当てる時間も女性の方が多い。また、政治分野においては、議席の割合が 110 位、閣僚の割合が 123 位、女性首相の継続年数も数値が 0 である。一方で、経済的サービスへのアクセス、遺産相続、土地以外の相続については男女平等であるという結果が見られ、土地の相続は「ほとんど平等の権利を有する」という結果であった。教育分野では初等・中等・高等教育のすべてにおいて数値が 1.000 で男女平等であると言えるが、識字率は 0.807 という数値であり、教育分野の順位を引き下げている。健康分野においては、男女の出生率に差はなく、健康寿命は男性より女性の方が年数が長いが、その差は他国以上に小さいので順位は低い（132 位）。

### 1-2 調査テーマ

以上の世界ジェンダーギャップ指数のデータから、教育水準に男女差が見られないものの経済格差が開いていることを疑問に思った。また、パートタイムで働く人口や家事に当てる時間の長さなどから女性が結婚後の家事と仕事の両立が難しい状況にある可能性があると考えた。その背景には男女間で家事・育児・介護の分担や、理想とされるジェンダー規範が影響を与えていたのではないかと思い、その点について調査することにした。また、はじめは法や政策の有無やそれらに対する国民の意識について関心を抱いていたが、ブータンに渡航し、文化や宗教の信仰心、そして国王への忠誠心の強さから、そのような思想的側面についてより詳しく調査したいと考え、テーマを修正した。

## 2. 調査設問

調査対象に共通して質問した内容は、①プータンは男女平等の社会であるか・ジェンダー差別を受けたことはあるか、②女性として・男性として期待されていることに違いがあるか（親世代は子どもに期待することも含め）、③家事・育児・介護は誰が担当しているか・キャリアとの両立ができるのか、の3点である。それに加えて、④そのほかジェンダーに関わることについてインタビューした。

## 3. 調査結果

### 3-1 JICA プータン事務所：ナショナル・スタッフの男性 A・B

男性 A. ①都市部では男女平等が進んでいるが、農村部は不十分である。特に政治の場面などの女性リーダーは増えてきてはいるものの未だ少ない。②特に東部では女性は家にいることが期待されている。③介護や育児は男女ともにバランスよく行っている。

男性 B. ①都市部では女性の方が男性より失業率が高い。女性がしたい仕事に就けるかについては、機会は平等に与えられていると思う。農村部では女性は農業を行っている。②男は外で仕事を行い、女性は家事をする責任がある。③介護は女性に期待されているが夫婦でバランスを保つ。④プータンには男女別学はなく、学生の男女比率も概ね同数である。

### 3-2 日本語学校の学生：女性 C・D・E

女性 C. ①職種の点で男女平等ではないと考えるが、政府は平等だと言うのでギャップがある。過去に比べると平等な社会になってきた。④結婚とキャリアならばキャリアを優先したい。

女性 D. ②父は勉強してほしいと言い、母は好きなことをしてよいと言う。

女性 E. ①男女差別を感じたことがある。タトゥーアーティストやバーテンダーなどは、雇用主が、女性が夜に外に出る危険性や女性がやるべき仕事ではないという認識のため雇用しない。特に若い女性の安全を守りたいとう意識が世間に浸透している。成人男性ならばできることが若い女性という理由で断られることは嫌な気持ちがする。

### 3-3 日本語ガイドの男性 F・G

男性 F. ①男女平等だ。②娘が家事（料理など）ができないと恥ずかしいので、まだ娘は幼いが教えている。娘の方が優しいので自分たちの介護は娘にお願いしたい。③家事は自分もよく手伝っている。④財産は女性が継ぐものだ。親と同居すると子育てに協力してもらえるだろう。

男性 G. ①男女平等だ。特に教育を受けている人は男女平等への意識が高い。教育を十分に受けていない人は無理解な場合もある。

### 3-4 BAOWE（ブータン女性起業家団体）の代表である女性 H

①ブータンの東西で状況が異なり、女性は土地などの財産を相続する代わりに家にいなければならぬが、男性は自由に外に出て働く。どちらが幸せなのだろうか。男女はお互に尊敬し合う。かつては協力して農作物を作り販売していたが、ライフスタイルが変化してきた。男性は身体的に女性よりも強いので、男女は平等でも身体的な違いはあるものだ。東部では教育や財の分配を男性優先にしていたが、今は平等に与えるようになってきた。仏教の教えはジェンダーギャップに関係がない。政治分野に女性が少ないので、政治は育児などの他のタスクの上に降りかかってくるので積極的に参加できないからだ。（③と関連あり）

②子どもたちには優しく、忠誠心があり、正直で、シンプルな人になってほしい。これは男女関係なく誰もが目指すべきである。女性の目線では、男性に紳士的であることを求める。男性が女性に何を求めているかは、私が女性なのでわからない。

④子どもたちの幸せが自分の幸せであり、子孫を持たないことで自分にお金を使えるという自由さは子孫をもつ幸福とトレードオフの関係にある。子孫を持つことは DNA を受け継ぐということなので、自分の存在の証明になる。子どもを産むことができるかどうかはカルマ<sup>1</sup>によって決まる。

### 3-5 ポブジカの農家：父 I・息子 J（両者は同意見）

②特に教育の面で男女ともにたくさん勉強してほしい。因果応報という考え方を念頭において、苦しみの少ない人生を送ってほしい。農業は体力的にきつく、仏教の不殺生の教えにも反するときがあるので子どもたちには継いでほしくない。しかし都会への移住や海外留学によって、マネーマインドを持ち欲深くなることは心配だ。そして子どもたちが家を出ることによって、自分たちが人手不足でますます苦しむことになることも心配だ。

③女性は家事・料理・部屋の片づけを行い、男性は木材の採集を行う。換金作物であるジャガイモの栽培・収穫は家族総出で行う。このような役割分担はあるがもし人手が足りなくなったら互いに補い合う。教育については十分な教育を受けていない人もいるので、両親に限らず、できる人が子どもたちの勉強の面倒を見る。乳幼児のケアは母親が行うべきだが、母親が病気などで動けない場合は男性も手伝う。女性が男性の仕事をやりたいと言ったら家族で会議をするが、女性が身体的な理由で男性の仕事を十分に行えずに周りに迷惑をかけるよりは各人が自分できることをやった方がいいだろう。

④男性が相続した理由としては、ブータンでは一般的に女性が財産を相続する文化があるが、男性 I が父から兄弟平等に相続したので、子どもたち（息子 J と 2 人の娘）にも平等に相続したいと考え、男性にも相続させた。それに対して周りの家の男性たちからはうらやましい、と思われている。息子 I は自分に充てられた量が多いと感じたので、自分の取り分をさらに姉と妹に分け与えた。

### 3-6 ポブジカでのホームステイ先：女性 K・L

女性 K. ②子どもたちには男女どちらもやる気のあることをやってほしい。そこに男女の違いはない。健康でいてほしい。③子育ては親だけでなく親戚間の皆でやるべき。④財産は3人の娘と1人の息子に平等に分けた。

女性 L. ①夫婦間にもジェンダーの差はあり、問題があつたら女性の責任とされ、家事は女性がやるべきとされている。結婚や出産で仕事との両立ができないので離職するしかないが男性は自分の仕事を継続できるということが不満だ。

### 3-7 パロの市場：女性 M・N

女性 M. ①ブータンは家庭内でも社会でも男女平等である。リーダー的ポジションの人数も男女同数である。②娘には教育を受けてよく勉強して自立した女性になってほしい。自分の親は教育を受けていなかったので勉強をしてくれれば良いと思われていた。③旦那は出張が多いので日々家事を担うのは自分だが、旦那が家に帰ってきたときはよく家事を手伝ってくれる。仕事と家事の両立は難しいので、母に手伝ってもらっている。

女性 N. ①ブータンは男女平等である。②いつかは結婚した方が良いと思っているが、今は働いて親の面倒を見なければいけないので忙しくてできない。

### 3-8 パロの農家：女性 O

①かつては女性差別があった。特に家事は女性、外の仕事は男性に任されていたり、仏教の教えのなかで女性は9回生まれ変わると男性になれるという教えがあったり、畑を耕すときにウシを操るのは男性の仕事なのでそれを女性がやるとウシが泣くということわざがあったり、お寺には女性禁制の部屋があったりした。今では女性差別は減ってきていて、政府の方針によって仕事や教育において男女平等が目指されているものの、変わらない部分も残っている。

②2人の子どもたち（どちらも女性）には社会人になったときに困らないように良い教育を受けてほしい。神や国王を忘れずにいてほしい。財産を増やしたいという欲深さが湧いてきても来世のために節制してほしい<sup>2</sup>。学業が終わったら就職し、結婚して家庭を持ち、仏教を信仰してほしい。しかし娘は仏教を熱心には信仰していないようだ。

③夫はよく家事を手伝ってくれる。

④もし孫が生めたら子育てをぜひ手伝いたいし、それは文化として当たり前である。

### 3-9 王立ブータン大学パロ教育カレッジ：女子学生 P・Q（両者は同意見）

①男女差別は経験したことがない。②男性には紳士であることを求め見た目は気にしないが、男性は女性に見た目の可愛さを求めていると思う。③仕事と家事は両立が難しいと思う。結婚して子どもを持ちたいので両親に手伝ってもらいたい。

#### 4. 考察

①に対してほとんどの人が男女平等であると回答した一方で、過去には女性差別があつたことを示唆する人（女性 O）や、女性が家庭内の責任を背負わされていると答えた人（女性 L）もいた。このことから、教育や会社の制度における男女平等は確立されているものの、家庭内及び社会通念レベルにおいては、完全に平等な状況にあるとは言えないと考えられる。また、遺産相続については、母系継承が伝統的ではあるものの、最近では男女関らず平等に分ける家庭も増えているように見受けられた。さらに、女性 H が示したように、家に留まりケアをすることが期待されてきたために母系相続の伝統が築かれたが、それは女性を土地に縛り付け自由を奪っている一方で、男性が相続する家庭に対して男性の目線では羨ましいと思うという状況から、相続をめぐる男女それぞれの葛藤があるようだ。

②について、親が子に対して抱く期待については性別に関わらず教育と健康が挙げられていた。また、欲深くなることへの心配や仏教への信仰を促す点には、親子間で仏教が継承されていることがうかがえた。女性に対して家事ができることを必須項目としたり（男性 F）、女性は守るべき存在であるという考え方に対する不快感を得ていたり（女性 E）、ルッキズムの視点で男性から見られていることを不満そうに語っていた（女性 P・Q）人もいた。これらのことから、「女性である」という理由で期待されている事象もあり、若い世代の女性たちは、たとえ男女の身体的な差異を全く無視することはできなくても、それらに違和感を抱いているように思われた。

③については、社会に出て働く女性も増えてきた中で、特に都市部（ティンプー・パロ）では夫婦が家事や育児を分担している傾向にあるが、それでも女性は子どもを産むことが幸せであり、家事や育児をやるべきである、という意見が見受けられたことから、女性に家事や出産・育児が期待されていることがうかがえる。また、仕事と家事・育児の両立が難しいため、両親の支援を得ているケースが多く、まだ家庭を持っていない人もそれを期待しているという回答があった。しかし、核家族化が進んでいると言われているブータンにおいて、そのような家族の在り方を維持することの実現可能性は十分とは言えないだろう。今後保育園等の施設が必要になる可能性が高い。

また、世界ジェンダーギャップ指数で示されていた経済におけるジェンダーギャップについては、学歴と職業がリンクすることが一般的であるが、その学歴に男女差はなく、昇進のスピードについても男女に差がないとほとんどの人が回答していたこととの矛盾があると考えた。

さらに、女性 H や男性 I・J が示唆したように、男女の身体的差異については、当然であり仕方がない、といった見方があるようだが、そこには「足るを知る」という仏教の教えや、「貪欲さ」への忌避という仏教的観念をベースとして、「自分にできることをする」ということが美德とされた価値観が根底にあるのではないかと考えた。また、別の調査における「国王のおかげで幸せな暮らしができている」という発言などから、国王への信頼

や忠誠心も根付いていることが分かった。これらから、ブータン社会において「個」以上に家族・コミュニティ・国が重視されていると捉えることができる。これらの価値観は、日常生活のあらゆる活動において行動指針になっており、批判的に捉える姿勢は確認できなかったことから、それほどまでに国全体に浸透していることがうかがえると同時に、女性たちの抑圧の黙認に繋がる危険性も孕んでいるように思えた。時代の変化とともに淘汰された女性蔑視はありつつも、今でも続く女性への家事や出産・育児への期待や守るべき存在とされている状況は、女性たちを抑圧している可能性があるにも関わらず、本人たちまでもがそれが抑圧だと気づいていない、あるいは仮に抑圧であるように感じていても、解放されることを求めるべきではない、と自分でさらに抑圧している可能性もある。このように制度上では男女平等に見えるものの、国際基準で正義とされている女性の自由な選択や期待からの解放などの「個」の保護よりも仏教的価値観や国王への忠誠心などの伝統的思想が優先され、そのような伝統の保護を推進するブータンの状況は、グローバル化のなかで今後変化していくのだろうか。

## 5. 調査に参加した感想

調査のなかでインタビュー対象者は皆協力的で笑顔で迎え入れてくれたことから、人々の温かさやホスピタリティの強さを感じた。グローバル化の中で多様な人種や民族、宗教観を受け入れる体制が整えられていく一方で、カテゴライズすることの危険性も理解しているが、ブータンという国と人々の国民性について、うまく言語化はできないものの日本を含め他の国との違いを感じ取ることができた。それと同時に、外国人の視点で見える日本はどのようにあるのかについて関心を抱いた。そして、ブータンのもつ温かさは、時代が変わっても続いているらしいと思った。

また、今回の調査で調べきれなかった点について、男女別の就職先とその給料水準が挙げられるだろう。また、その就職先選択や雇用主の採用者決定の過程においてジェンダー規範が影響している可能性についても調査することができるだろうと考えた。

## 6. 注

1. カルマ（業）とは、仏教の因果応報にまつわる概念で、日々の行いなどを指す。
2. 来世について言及するのは仏教観で生まれ変わることが信じられており、何に生まれ変わるかは、現世での行いに基づくとされているからである。ブータンの人々は人間に生まれ変わることを目指し、そのために徳を積もうとする。傲慢になるなどの不徳を行うと畜生などの人間よりも苦しい一生を得ることに繋がるので、節制してほしいという意味で女性Oは回答している。

## 7. 参考文献

World Economic Forum, “Global Gender Gap Report Insight Report June 2022”

[https://www3.weforum.org/docs/WEF\\_GGGR\\_2022.pdf](https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2022.pdf) (2023/10/31 最終閱覽)  
World Economic Forum, "Global Gender Gap Report Insight Report June 2023"  
WEF\_GGGR\_2023.pdf (weforum.org) (2023/10/31 最終閱覽)

## ブータンにおける高等教育の「出口」

人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 M1  
林 卓菲

### 1. 研究テーマ

近代化が進展する中で、ブータンは他の途上国と同じように、地域格差の拡大、若者の農業離れ、若者の海外流出、第二次産業の不十分な発展などの難問に直面している。社会経済状況は若者にどのような影響を与えており、また若者たちはそれについてどのような答えを出すかという問題関心を、高等教育を受けた若者の進路選択の影響要素を調査することによって解明していきたいと思う。

ブータンにおける高等教育の「出口」に立つ若者が進路選択をする際の背景を 3 つの側面から述べる。

#### 1) セカンドチャンスとしての留学&進学

ブータンの大学入試は全国統一入試試験ではなく、第 12 学年（日本の高校 3 年に相当）時に受ける修了試験の成績で選抜されるかたちである。国内の高等教育機関に進学できなかつた場合は、インドへ海外留学（私費）の後、帰国して公務員試験を受け修了試験での失敗をご破算にしてやり直す（杉本 2016）という選択肢がある。今現在も公務員試験に対する若者の熱は高いままなのか、コロナ以降の世界の経済低迷、物価高騰が続く中、留学を断念することが考えられるのかを見てみたい。

#### 2) 産業の不在、地域格差と低賃金への抵抗

高等教育を修了する若者たちが労働市場を前にする際、まず考えなければならないのは、長年にわたって教育を受けた「実り」として、労働市場にて「知識の価値」をどれほど還元できるか、ということだと思われる。第二次産業が少ない状態のブータンでは、その還元率は欧米やオーストラリアと比べてずっと低いと考えられる。そこで近年、ブータンの若者の出稼ぎブームが注目されている。仏教が信仰されている文化背景において、その出稼ぎを若者たちの「現世の物欲」に対する執着だと解釈するのはなかなか腑に落ちない。若者の海外進出について、稼ぎ以外に何らかの理由があるのかを調査を通じて探求したい。

#### 3) 学歴社会への加速、「ブルーカラー回避」と農業が主に女性により担われる実態：

近代化に伴い、ブータンも消費社会へ突入しつつある。消費社会における学歴は、「人的資本<sup>1</sup>」や賃金への還元という役割が弱まり、文化消費及び文化的再生産の性格が強まる。中流及び中流以上の階層が拡大し、文化的再生産が一般的に行われ、学歴は地位表示的な機能を持つようになり、それとともにホワイトカラー志向が高まっている。ほとんど

の学歴社会で見られる「ブルーカラー回避」と「第一次産業離れ」はブータンでも存在しており、人手不足だとよく言われる建築業や農業に対する抵抗が見られる。建築業などの第二次産業は出稼ぎ労働者の流入によって成り立っているが、国として決して良い対策とは言えない。第二次産業の欠如と若者の海外流出とは互いに影響していると推測し、インタビューの中で検証していきたいと思う。

以上を踏まえて、高等教育に進学する理由・動機、生活と仕事のバランス、若者の海外流出、外国人労働者に対する態度を中心に7つの質問を設けた。

## 2. 研究設問

- 対象者：20代～30代のブータンの若者8名

高等教育を修了するか修了したばかりの若者は進路に対する新鮮な感覚を有しているため、職業意識<形成前一形成中>の年齢の方に絞った。

- インタビュー実施場所：

①ブータン日本語学校（ABC）、②ポブジカの村（D）、③市場（E）、④食事会（F）  
⑤王立ブータン大学パロ教育カレッジ（GH）

- 質問：

- 1) 海外での暮らしは、どのようなイメージですか。
- 2) 周りに海外へ出稼ぎや留学に行く家族、友達はいますか。自身も「行ってみよう」と思うことはありますか。
- 3) 進路選択時、安定性と高賃金のバランスをどのように考えましたか。
- 4) 良い仕事に就くため、「絶対必要」なのは何だと思いますか。
- 5) -A 将来はどのような仕事に従事したいですか。その仕事には学歴的な制限がありますか。  
-B 今の仕事に満足していますか。満足していない場合、理想な仕事はどのような仕事ですか。理想な仕事に就くために、何か計画や段取りを組んでいますか。
- 6) 若者の海外流出について、どのような対策を考えられますか。
- 7) 外国人労働者について、どう思いますか。

- 個別質問：

（日本語学校の学生ABCへ）なぜ日本に留学しに行きたいのですか。

（日本語ガイドFへ）子どもに従事してほしい仕事・業界などはありますか。

（王立ブータン大学パロ教育カレッジの学生GHへ）この学校を選んだ理由を聞いても良いですか。

## 3. 調査結果

ティンプー、ポブジカ、パロで出会った20代～30代の若者8名（ティンプー日本語学

校の学生 3 名 (ABC)、うちオーストラリアの大学の MBA 進学予定者 1 名 (C)、インドに留学中の大学生 1 名 (D)、若手中学校教師 1 名 (E)、日本語ガイド 1 名 (F)、王立ブータン大学パロ教育カレッジの 2 年生 2 名 (GH)）へのインタビューと現地での参与観察を通じて、ブータンの若者の高等教育に対する進学意欲、卒業後の進路選択についての回答をまとめた。

### 1) 高等教育に進学する理由・動機について

8 名とも高校卒業後は高等教育へ進学すべきだと表明した。進学の理由について、留学を選ぶ 2 名の回答者は国内には進学先は数少ないため、やむをえず海外の大学への進学を考えるようになったと回答した。日本語学校の学生 3 名は、家族が日本で生活しているため、日本の大学への進学を決定したと回答した。ブータンでは人気の留学先ではない日本を選んだ理由について、3 名とも家族からの支えが一番重要な理由と話した。また、教育者の視点として、中学校教師の回答者は、「ブータンにおいて教育は人生を変える鍵である」と教育の重要性を強く強調した。また日本語ガイドは、自分の子どもに高等教育を受けさせる理由は将来の選択肢を広げるためだと話した。

回答者の 8 名とも高等教育に進学する必要性を認識し、教育で将来性を広げる前提で人生を設計するイメージが強かった。

### 2) 生活と仕事のバランスについて

回答者は 8 名全員が全員生活>仕事という意見を表明した。若者でも「仕事は全てではない」という物欲を抑える悟りが見られる。8 名のうち、将来は海外に留学する予定がある方でも、卒業後は国に帰る意志を強く語った。インドへ留学中の大学生は国の奨学金で留学しているため、卒業後 8 年は国で働くかなければならないが、本人はそのことを理不尽だとはとらえていなかった。専門の看護婦になるための留学とのことで、将来はブータンで老人ホームを経営したいと語ってくれた。

8 名の回答者は明確に人生目標が掲げられており、生計のためというよりも意義のある人生のための仕事を追求し、仕事と生活を両立しようとしている感じた。

### 3) 人材流出について

いわゆる生活と仕事のバランスについて、一番よく語られたのは「生まれ育った国を離れたくない」ことである。仏教の説教によると、この世で思う存分物欲に従うと六道輪廻において来世の不利に繋がる。そのため、物欲を先行させただ良き生活を追求するために先進国でブルーカラーの仕事に従事するということについて、回答者のほとんどは否定的な意見を出した。

今現在の若者の流出について、ブータン国内では産業の不在、就職のチャンスの不足が指摘された。社会人の 5 名の回答者からは中国の産業化過程を聞かれ、ブータンなりの才

一ガニック産業の振興で人材流出を止めるという案も示された。

#### 4) 外国人労働者について

ブータンでは、インド人をはじめとした外国人労働者がよく見られる。外国人労働者がブータン人の就職のチャンスを奪う可能性について質問したところ、8名とも建設業界などは彼らの労働力を借りなければならないため、競争相手としてではなく、むしろ歓迎している旨を表明した。

ブータンでの調査において、外国人（片言でしか通じない外国人でも）に対して友好的なブータン人の姿勢が見られた。

その他の設問については下記の表1～3にまとめている。

表 1

②周りに海外へ出稼ぎや留学に行く家族、友達はいらっしゃいますか。ご自身も「行ってみよう」と思うことはありますか。	
A	兄が日本にいるので、留学に行きたいです。
B	姉が日本で何年も生活していて、姉の紹介で来年日本に行きます。
C	オーストラリアに行った友達に誘われて、ビザの問題もクリアしたのでこれから行きます。
D	周りは多いですが、行きたくないです。海外は厳しい世界だから、時間厳守などの認識もブータンとだいぶ違うし、体力的な仕事も大変だし、ブータンにいるのが一番良い。
E	家族もいるから、行きたくても、もういけない状況です。（ブータンにいたい）
F	奨学金をもらっているので、卒業後はブータン帰らなければなりません。（チャンスがあれば海外に行きたい）
G	多いです。行きたくないわけではないけれども、将来は公務員になるから、留学以外だと海外に行けないと思います。
H	多いですね。まだわからないです。体力的な労働が多いらしいですが。

表 2

④良い仕事に就くため、「絶対必要」なのは何だと思いますか。	
A	大学卒業
B	勉強（学力）
C	学歴
D	教育
E	教育（事業）
F	良い教育を受けること
G	豊かな人間を育てられる教育
H	才能（例ええば音楽の才能など）

表 3

⑥若者の海外流出について、どのような対策が考えられますか。	
A	社会福祉の充実（老人ホームの開設を志向している）
B	学業分野が充実した大学を開設する
C	増賃
D	奨学金の提供、家族との繋がり
E	教育を通じて若者が国に対する誇りを持つようになり、学歴に見合う職業に就く
F	第二次産業の確立
G	アクティブな教育
H	良い就職機会

#### 4. 考察

「出口で彷徨う若者たち」という言い過ぎかもしれないが、「目標に向けて直進」している方は多くないと思われる。ブータンの教育体制では、いわゆる業績主義的な競争意識よりも、学生の人間性が育まれることを大切にしていることが、王立ブータン大学パロ教育カレッジへの訪問でわかった。ガイドからも、ブータンの学校の試験はロジックや考察を重視するわけではなく、暗記でクリアできる、と聞き、先進国の教育目標とはだいぶ違うように感じた。ブータンならではの文化背景、仏教信仰は国民の心に浸透しているが、国が推進するナショナリズムと外部から来た資本主義の浸透とのぶつかりが所々に現れている。学校内の世界はブータン政府が設計する通りの「ブータニズム」のままだが、高等教育の「出口」から出た後、業績主義が満ちた世界と直面した際の彼らの葛藤は、インタビューを通して強く感じられた。

「海外へ行く」ことを選択した対象者は、本調査において、いずれも「家族・親友」が実際に海外にいることが前提条件となっていた。年齢が若い方は特に海外の暮らしに対する憧れが強い（「（海外は）辛いけど豊かな世界である」）が、故郷にい続けたいという気持ちも伝わってきた。「③進路選択時、安定性と高賃金のバランスをどのように考えましたか。」という質問に対して、ほぼ全員が「将来はブータンに帰りたい」という回答を出した。特に海外経験がある対象者は強い決意を表した。その理由は「（海外は）辛いからブータンがいい」「（移民のように）生まれ育った土地から離れてはいけない。この土地に居続けるべき」というものだった。

「④良い仕事に就くため、「絶対必要」なのは何だと思いますか。」と「⑥若者の海外流出について、どのような対策が考えられますか。」を並べて見ると、ブータン社会で勝ち抜くために「絶対必要」なのは「教育・教育関連」だと考えている若者の割合がかなり高いことが分かる。それはまた、若者の海外流出への解決策にも繋がっている。対象者のうち、就職前の方も社会経験のある方も、海外流出のブレーキに必要な要素として「就職」と「第二次産業」を挙げた。どちらも、ブータンに不足し、若者が海外生活を選ぶ理由である。その他、出稼ぎの理由の1つである「金銭面の欲求」について、対策を講じる回答者から理解が示され、「お金があれば何でも買える」という回答も聞けた。そういう物

欲は、仏教を信仰するブータン国民にも浸透していることがわかった。さらに、若いうちに海外に行き、数年後もしくは老後は「やはりブータンに帰りたい」(A B) という人生設計を何人かが語っていた。そこからは、「hard work, high paid」(H) という生活を人生経験として一度味わって、その後に慣れた生活に戻る、というライフコースが見えてくる。「一度きりの人生を楽しむ」という消費社会の価値観がここに窺える。

## 5. 調査に参加した感想

ブータンにおいては、近代化が進むうえでどうしても避けられない「変化」が起こりつつあるが、若者の国に対する信頼感、故郷への愛着と依存が今回の調査で一番印象的だった。途上国でありながらも、先進国が及ばない高い「幸福指数」の国として知られ、その異常に高い「幸福指数」は実施された国勢調査の手法や客觀性からすると確かに疑問視されても仕方ないが、今回若者を対象とした調査では、「国に対する愛着」が「ブータンでの生活は幸せである」ということに繋がると理解した。

今回、文化人類学、社会学における質的調査法を実践に生かす場面があり、街頭インタビューや参与観察などの現地調査を行った。今まで街頭インタビューを行うことに戸惑っていた自分が、一人の調査者として、ブータンの街頭で知らない人に声をかけ、不器用ながら英語でコミュニケーションをすることができたことは「大きな進化だと感じる。知らない世界に挑戦していく勇気を、ブータンでの調査を通じて持つことができた。その後の第二歩、第三歩も躊躇わず、踏み出していきたいと思う。

## 6. 注

- 1 人的資本 (Human Capital) は、「個人的、社会的、経済的厚生の創出に寄与する知識、技能、能力及び属性で、個々人に備わったもの」とされている。

## 7. 参考文献：

杉本均 (2016) 『ブータン王国の教育変容——近代化と「幸福」のゆくえ』岩波書店

OECD (経済協力開発機構) の 2001 年の報告

[https://www.oecd-ilibrary.org/education/the-well-being-of-nations\\_9789264189515-en](https://www.oecd-ilibrary.org/education/the-well-being-of-nations_9789264189515-en)  
(最終閲覧 2023.10.31)

## (4) 訪問記録

### 1) JICA ブータン事務所訪問

日時：9月12日（火） 15:00～17:00

場所：JICA ブータン事務所

面会者：山田智之さん（JICA ブータン事務所長）（ご挨拶のみ）、須藤伸さん（JICA ブータン事務所企画調査員）、JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフの皆さん（3名）

概要：

ティンプー市内にある JICA ブータン事務所を訪れ、ナショナル・スタッフ 3 名の方にそれぞれインタビューを行った。会話は全て英語で行われたが、各々が良い学びを得ることができた。その後、須藤さんから JICA ブータン事務所と自身の経験から見たブータンを学ぶ意義についてお話をいただいた。須藤さんには事前学習の SDGs セミナーでも講義をしていただいている。

JICA ブータン事務所には 10 名のナショナル・スタッフ、10 名の日本人スタッフの方がおり、他に長期派遣の専門家が 7 名と海外協力隊 29 名が活動している。また経済協力班、ボランティア班、総務班の 3 つに分かれて事業を行っている。

以下、須藤さんが語ってくださった、自身の経験から考える他国を学ぶ意義と異文化理解の必要性を述べる。須藤さんはそれを「社会を学ぶ/知見を広げる」こと、「自分を知る/置き換えて考える」の 2 つだと指摘する。須藤さん自身とブータンの出会いは、私たちと同様、スタディツアードだった。当時、将来の道を定めることや就職が差し迫っていた須藤さんは「若者の職業選択」をテーマにしていた。そこで、ブータンの人材不足でありながら、失業率が高いという矛盾、その背景にある急激な学歴化に伴う職業のミスマッチに気づかされたことで、「職業選択には何らかのバイアスや圧力がかかっている」という日本との共通点を発見し、「他国は日本や自身を映し出す鏡になる」と結論づけたという。

また須藤さんはなぜ「ブータン」を学ぶのかという点について、GNH や王政・民主主義といった政策面、民族や言語、宗教といった文化的な多様性、仏教的価値観、温和、親日感情といった価値観・人間性の 3 点がユニークであると言及された。

内容：

Q1. なぜ一度青森に戻って市役所に就職されているのか。

A1. JICA など国際協力に直接関われる仕事に思い至らなかった。ちょうど新聞で市役所の求人を見つけ申し込んで、興味のあった都市計画に従事することができ、3 年間勤めた。Twitter で外務省の育休の人の代わりのポストを見つけて申し込み、国際経済やサミットなどに関わっていた。しかし、もっと現場に近いところで働きたいとの想いから、JICA に転職。コロナ禍にイギリスの大学院で学位を取得した。

Q2. 就職や職業選択における社会的圧力との向き合い方について何か助言はあるか。

A2. 社会的圧力があることを認識することがまず第一歩だと考えている。

Q3. 再植民地化という考え方があるが、その観点で、日本の有償資金協力や無償資金協力をどのように捉えているか。

A3. JICAとしては資金協力をを行うに当たっても、ブータンの意向を尊重するようにしている。ブータン政府の指針が最初にあって、それに沿う形で支援を行うことを大切にしている。

考察：

須藤さんとブータンの出会いが我々と同じスタディツアーであったことが興味深い。我々も調査報告書の分析において、ユニークな国であるブータンと日本を照らし合わせて考え、新たな気づきが得られれば良いと思う。

個人のインタビューについては、同じ JICA ブータン事務所で働かれているナショナル・スタッフ間でも GNH の捉え方やブータンの 30 年後のブータンの姿などの回答が多様であることが印象的であった。

コメント・備考：

14 時からの訪問予定だったが、我々の到着が 1 時間遅れてしまったため、山田所長はご挨拶のみとなった。

担当者：吉村 紫織

## 2) 安西舞子さんとの昼食会

日時：9月 13 日（水） 12：00～13：00

場所：ティンプー市内レストラン（ゾンバラ 2 レストラン）

面会者：安西舞子さん

概要：

長期（6ヶ月滞在予定）留学中の安西舞子さんから、ブータン事情や留学中の感想などを聞いた。

内容：

Q1. なぜブータンを留学先として選択したのでしょうか。

A1. 所属する広島大学総合科学部では留学経験が卒業要件になるため、同級生はほとんど 1

年生の時から留学のことを計画し始めるそうである。ブータンを選んだ理由は、高校時代からブータンに興味を持ち始め、何年か前から情報を集めていたので、留学先として選んだとのこと。同級生の留学先は欧米が主流であるなか、自分で手続きをし、ブータンへの半年間の留学を計画したそう。

**Q2.** ブータンに来る前と来た後のイメージは変わったりしたのでしょうか。

A2. 特に変わったところはないが、留学先の学校で出会ったブータン人学生がアメリカに対する嫌悪を示していたことについて驚いた、とのこと。

**Q3.** 普段はどのような留学生活を送っているのでしょうか・どのようなスケジュールでしょうか。

A3. 授業はそこまで多くはなく、ゾンカ語の授業プラス1、2科目。ゾンカ語は日本語の発音によく似ていると言われるが、授業数は週に4回あり、少し大変とのこと。

**Q4.** 現地の人との交流から特に感じたことがありますか。

A4. 周りのブータン人が助けてくれる姿勢にありがたく思う、とのこと。

**Q5.** 留学先では知り合った外国人は多いですか。

A5. 日本人は少ないが、アメリカ、オーストラリアとスイスからの留学生が多いそう。

**Q6.** 将来の進路についてどう考えていますか。

A6. まだ2年生で具体的な計画を立ててはいないが、広島から出たい気持ちだけは強いとのこと。

考察：

安西さんが、本当にブータンが大好きでブータンを選んだのか、あるいは「留学必須」という大学の条件の下、大学経由での留学がうまく進まず、仕方なくブータンに留学したのかについては、初対面という状況ではなかなか聞けなかった。ただ、長年ブータンのことを探っていた、という話からは、前者だと考える。

異文化コミュニケーションにおいて一番重要なポジションの1つといえる留学では、短期調査よりもずっと広く深くブータンの社会を理解できるだろう。今回安西さんはご自身で留学を申請したことだが、大学の交換留学プロジェクトの協定校はほとんど先進国の大学だと気づいた。ブータンのような途上国の留学先を増やす意義は、途上国に住み調査することで、現在暮らしている先進国の社会において足りないことに気づくこと、また豊かな消費社会から距離を置くことで自然、資源、持続可能な発展など全人類に関わることを実際に考えさせされること、と考える。

その後訪問したブータンにある日本語学校で分かったのは、現在ブータンから日本への留学生はほとんど公費留学となることだ。30 年前の中国—日本間の留学事情も同様だったが、その後民間ベースの留学の増加で、経済や文化の交流が深まり、お互い双赢（win-win）の資源最適化が進んできた。安西さんのような途上国への留学は、これまで主流だった先進国への留学からすると異色の存在といえるが、異文化コミュニケーションにおいてはそれなりに大きい価値があると信じ、心から安西さんのような方を応援したい。

#### コメント・備考：

安西舞子さん：広島大学総合科学部 2 年生、2023 年 7 月にブータン到着、現在王立ブータン大学ロイヤル・ティンプー・ガレッジ留学中。

担当者：林 卓菲

### 3) ブータン日本語学校訪問

日時：9 月 13 日（水）13：30～16：00（～18：30）

※16：00～18：30 は日本語学校の学生との市内散策

場所：ブータン日本語学校

面会者：青木薫さん（ブータン日本語学校校長）、ブータン日本語学校の学生、OB、教師  
計 10 名

#### 概要：

日本語で自己紹介をするという形で、日本語を学び始めて約 1 ヶ月程度の学生たちの勉強を手伝った。互いに気になることを、研究課題に限らず質問しあい、交流後には SNS を交換して親交を深めた。

訪問後、日本語学校の学生とティンプー市内を散策し、ブータンの学生の日常を体験した。

#### 内容：

10 年前と今と比べて食生活で変化した点はあるか、という質問に対して、学生のような 10 代や 20 代前半の人からはあまり変化を感じたことがない、という回答が、OB のような 20 代後半より上の世代の人々からは、ハンバーガーなどのファストフードが普及した、という回答が得られた。伝統的な文化は守っていく必要があると思うか、という質問に対しては、男性が優先されるような古い風習はなくなるべきだと思うが、中国とインドという大国の間で生き残っていくためには文化を守っていく必要がある、というような意見があった。伝統的な料理が失われることに対する意見を尋ねたところ、ガスの導入などによっ

て料理にかかる手間が格段に少なくなり便利になったので、以前の方が良かったとは思わないし、便利さには勝つことはできない、という意見があった。

ブータンではアルバイトはあまり存在しないが、日本語学校の学生の中には日本へ留学予定がある学生や留学したいと考えている学生も存在し、そのような学生からは、日本ではどのようなアルバイトをしているのか、と言う質問をされた。

考察：

ブータンの若い世代の間でも伝統文化を守り継承しようという意思が強く存在していることが見受けられた。これはブータンの学校で幼い頃から GNH を基本とした教育を行っている結果だと考えられる。しかし、生活が便利になることを重視しているという事実も存在し、都市部や若い世代では特にその動きが顕著だということがわかった。このような生活の便利さによってブータン独自の文化が衰退し、ブータンという国のアイデンティティが失われることによって、中国とインドという二大国に飲まれてしまわないようにするために、国家が主導し民族衣装を学校などの公の場で着用するよう定めているのではないかと考えた。

コメント・備考：

日本語学校の学生と市内散策をした際には、学生の皆さんから、いつも食べているお店のスナックなどをプレゼントでいただいたり、街を歩きながら街について多くのことを教えていただいた。ブータン人のホスピタリティを強く感じた時間であり、日本語学校の学生の皆さんに深く感謝する。

担当者：伊藤 更紗

#### 4) ペマ・ロセルさん、ドルジ・ノルブさんとの交流会

日時：9月13日（水） 19:00～21:00

場所：ティンプー市内のレストラン（Singapore Chicken Rice Corner）

面会者：ペマ・ロセルさん（Bhutan Delight Tours & Treks 社長）、ドルジ・ノルブさん（日本語・中国語ガイド）

概要：

学生からそれぞれに質問し、回答を得た。開発と伝統文化の両立の重要性や、出身地とティンプーとの食文化の違い、娘に対する期待などについて聞いた。一対一の形でお話・質疑応答をしてもらったので、他のメンバーが話した内容については個々には記載しない。記録者は、ドルジ・ノルブさんにティンプーの女性の生活及び親として娘に期待すること

について尋ねた。ドルジ・ノルブさんには娘と息子が一人ずついる。

内容：

Q1. 女性・娘に期待することは何か。

A1. 女性は家事をするべきであり、親は娘に、家事の手伝いをさせることを教育する必要がある。それを怠ることは親にとっても娘にとっても恥ずかしいことである。

Q2. 自分の老後は誰に面倒を見てもらいたいか。

A2. 娘の方が優しいから娘にお願いしたい。

Q3. 女性が財産を継ぐ文化は、現在も続いているか。

A3. はい。

Q4. ブータン女性の地位については、どのようなか。

A4. 地域差があり、インドに近い南部では依然として権力が弱い。

Q5. 育児に対する親の負担、家族からの協力体制はあるか。

A5. 両親とともに生活すれば協力を得られる一方で核家族ではそれは難しい。

考察：

女性のステータスとして、家事ができるということは結婚市場において重要視されている可能性があると考えた。また、女性の地位については、インドに近い南部の男尊女卑に近い状況を批判する姿勢を見せたことから、ドルジさん自身は男女平等が望ましいと考えており、同時にドルジさんの周りの状況は比較的男女平等が達成できていると感じているようだ。さらに、育児については、両親（子にとっての祖父母）とともに生活することで協力を得られるので、仕事と育児が比較的両立可能であるように考えられたが、都市部では核家族化も進んでおり家庭内で仕事・家事・育児のバランスを保つことには困難が伴うようである。つまり、生活の基盤には親族間での相互扶助が必要であるため、それが実現不可能な状況を抱える家族（核家族など）が十分にサポートを得られる状況ではないということが分かった。南部と比べて西部では比較的男女平等が達成できているものの、女性に家事のスキルを期待するのは、女性が仕事と家事の二重の責任を背負っている可能性が考えられる。それはつまり、仕事と家事の両立が不可能であると感じた妻が家族からの期待のために離職を強いられている可能性も考えられる。

コメント・備考：

家事と女性を結びつける文化があるものの、男女平等であるというのは、日本をはじめとしたアジアの先進国においてよく見られる家事への軽視・蔑視が存在しない可能性があ

ると考えた。

担当者：阿部 綾舞

## 5) 王立自然保護協会訪問

日時：9月14日（木） 10:00～11:45

場所：王立自然保護協会（Royal Society for Protection of Nature: RSPN）

面会者：ワンチュク・ナムゲイさん（RSPN ディレクター）、ツェテン・ドルジさん（RSPN チーフ）、ジグメ・ツエリンさん（RSPN ナショナルコーディネーター）、サンゲイ・デマさん（RSPN コミュニケーションオフィサー）

概要：

RSPN は、絶滅危惧種の保護、地域コミュニティの持続可能な発展、環境教育、研究活動の4つの柱を中心に自然保護を行う国内最初の NGO である。中でも、ラムサール条約に指定されている湿地「ポブジカ谷」を飛来地とする絶滅危惧種「オグロヅル」の保護活動に力を入れており、質疑応答ではポブジカ谷のエコツーリズムについて質問した。

内容：

Q1. エコツーリズムは、環境保護のために観光客のアクセスの困難さを維持する一方で、観光客の利便性を追求する矛盾を含んでいると考えるが、これらのジレンマを克服するためにどんなことをしたか？

A1. GNHに基づいたプロジェクト内容にし、湿地の研究を欠かさない。エコツーリズムは地元も利益を受けるため、ホームステイや地元ガイドの登用など、地元がオーナーシップをとることで地元のプライドや文化保護を重んじられるアプローチをとった。

Q2. ポブジカ谷のエコツーリズムに関して、開発に対して地元の人々はどのような態度だったか？

A2. 政府から保護地域の認定があった当初、ほとんどの人が理解を示したが、中には否定的な人もいた。しかし、収入を直接もらえる体験を経てポジティブな姿勢へと変化した。

Q3. 他組織と協力する際の RSPN の役割とは？

A3. NGO なので市民社会組織（CSO）として政府と社会を繋ぐ役割である。政府とのパートナーシップを持続させ、国内の他組織と協働していく立ち位置である。色々な活動をしている分、もっとインターナショナルパートナーを増やしていきたい。

RSPN のエコツーリズムは“community” based program であるため、どんな支援が持続

可能で、どのように地元住民に従事させるかは、地元の“interest”と伝統的システムへの“respect”に着目しながら地元の特性に落とし込んで考えている。

考察：

4つの柱を中心に多方面に活動を展開する RSPN の活動指針は、曼荼羅のような包囲性を備えていると思った。ブータンの憲法は最低でも森林の 60%を将来の世代に残すことを要求しており、現在は 71%の森林被覆率を保っているものの、RSPN は持続可能性を重視して地元に寄り添った活動を模索し続けていることが分かった。発展途上国として経済成長を行うと同時に文化も保護したい、というブータンが抱える葛藤とエコツーリズムが抱える矛盾に立ち向かう上で、GNH に沿うことが「中道」を実現させられる策であると感じられた。質疑応答のなかでも“GNH Philosophy”という言葉が何度も登場し、GNH が担う完全性と総意性を根拠に RSPN がプライドを持って活動していることが読み取れた。

コメント・備考：

RSPN スタッフの皆さんには、訪問前に RSPN の紹介動画をご用意下さり、長時間のインタビューにも一つ一つ丁寧に答えてくださった。インタビューの中で「ホームステイ先で（Q2 に対する）答えが得られるかもしれない」という言葉もいただき、ポブジカでの調査活動を積極的に行うことができた。

担当者：岩波 七菜

## 6) ブータン女性起業家協会訪問

日時：9月 14 日（木） 14：00～16：30

場所：ブータン女性起業家協会（Bhutan Association of Women Entrepreneurs: BAOWE）

面会者：ダムチョ・デムさん（BAOWE CEO/Founder）

概要：

BAOWE が行うプロジェクトについて、背景と現在考案していることについて聞いた。

内容：

Q1. なぜ女性を支援するのか。

A1. ダムチョさんの人生の、あるエピソードにまつわる。ある時、ひとりの女性が生計を立てるために売るものを失い道端で泣いていて、一方、その市では路上で放浪することが許可されていなかったので、逃げていたという。ダムチョさんはそれを見て、人生が順調

にいき忘れていた人々を助けることの重要性、そして人生のうちで自分が経験した困難を思い出し、彼女を助けようと思い立った。そして市長室に赴き、訴えかけたが、「それが法律だ」と突っぱねられてしまった。そこで、街頭での行商も禁じられていたので、女性に小さな土地を与え販売する場所を提供し、銀行口座の開設も手助けした。

農村部では状況が異なり、家族の支えがあり、お金も必要なかった。他方、土地や肥沃な土壤で育てた作物でお金をを得ている人もいれば、金銭的余裕のない人もおり、貧富の格差が広がっていた。ダムチョさんらは、各農村の換金作物を特定し、それが市場にどのように出回っているかを調査した。換金作物は供給量が少なく、最高値になっていた。起業家は慈善活動ではなく自身の生活のために働くので、ブータン国内のオーガニック野菜よりもインドの安価な作物を買おうとする。つまり農村地域の人々には一貫したサプライチェーンがない。そして政府が全ての作物をオークションにかけると、国境を越えた人々（インド人）が指図して安価な値段で買っていく。これを解決するために、付加価値をつける必要性を見出した。

逆質問 i) どうすればブータンのソバを日本に売ることができるか。

→（我々の回答）ソバ枕、そば茶、高級ブランドのレストランなどに卸す。

逆質問 ii) ブータンには麺を作るためのお金も技術もない。ソバはグルテンフリーなので、たんぱく質の豊富なキヌアと混ぜ、健康によいことを謳い文句に製品を作るのはどうか。大学で意見を募ってくれないか。商品の名前、キャッチコピー、パッケージはどのようなものがよいか。

→（我々の回答）キヌソバ、「幸せの国ブータンのキヌソバ」、「幸せのキヌソバ」、ブータンの国旗とブータンの人々の笑顔をプリントする。

逆質問 iii) 商品開発のためにインターン生を呼ぶことはできるだろうか。大学で募ってみてほしい。

Q2. ブータンに男女差別はあると思うか。

A2. 地域によって異なる。北部・西部は女系社会だが、南部・東部は家父長制社会である。前者の地域では、彼女たちは土地を継いで、財産は得ても、男性は遠くに出かけていく。男女のどちらが幸せだろうか。

Q3. 女性の政治家の少なさについてどう考えるか。

A3. 女性は家事や乳幼児のケアなど家の世話や畑の世話で忙しいので、会議に参加することは負担になる。男女は平等だが身体的に女性が弱いので男女で仕事・役割が分かれることがある。

**Q4.** ティンパーのような都市部では、女性と男性がともに働くようだが、家事や乳幼児のケアは誰が担うのか。

**A4.** 家庭によるが、教育を受けている人ほど、共働きで、家事も分担する。しかし女性が料理をすることを期待されている。

**Q5.** ブータンの女性たちにとって幸せな暮らしは何か。

**A5.** ダムチョさん自身にとって、子どもたちが幸せそうな姿を見ることが幸せである。

**Q6.** 女性は子どもを持つべきか。

**A6.** 子どもがいたら子どもを中心に尽くして暮らし、子どもがいなければ稼ぎを自分自身に使うことができるが老後に 1 人は寂しい。しかしそれは各人の選択であり、カルマの結果だ。

担当者：阿部 綾舞

## 7) ポブジカ農家ホームステイ

日時：9月 15 日（金）～17 日（日）

場所：アム KD さん（女性）宅

面会者：アム KD さん宅の皆さん

概要：

ポブジカのアム KD 宅に 2 泊 3 日のホームステイを行った。この家庭ではポブジカのエコツーリズムの一環で観光客の受け入れを行っている。ポブジカはその豊かな環境を守るためにエコツーリズムを率先して導入した地域である。その取り組みの 1 つであるネイチャー・トレイルを行うなどポブジカの自然も満喫した。ホームステイ先では、飼っている牛の乳搾りの見学や畑でジャガイモ堀りの体験をした。ホームステイ先の方々へのインタビューもを行い、首都のティンパーの人々とはまた違う視点からの回答が得られた。

内容：

ジャガイモ栽培を近年になって開始したポブジカ地域で、栽培する作物がソバからジャガイモに変化したことによる生活の変化について尋ねたところ、換金作物であるジャガイモを栽培することにより、収益を借金の返済に充てられるようになった他、自給自足の生活が崩れ、ジャガイモ栽培で得た収益で他の野菜の購入や温室栽培をするようになった、という回答が得られた。農家の方にしか尋ねられないような農業支援に対する不安についても質問した。それに対して、現在は無料で農業支援が行われているが物価の変動が激し

く、ジャガイモのレートも変動しやすいので、いつか支援が有料になるのではないかという不安がある、という回答が得られた。農業のこと以外にも、文化が変化することについて質問した。最年長のアム KD さんは文化が変化することに否定的であり、フルキラ（女性の民族衣装、正式なもの）に対し、簡易で便利なハーフキラ（女性の民族衣装だが上下にわかれしており、着やすい）をあまり良いとは思っていない、という返答が返ってきた。アム KD さんの姪のカルマさん（女性、30代前半）は現在、パロとティンパーを行き来する生活を送っているため、都会と田舎の暮らしの比較という視点で話を聞くことができた。

#### 考察：

ジャガイモという換金作物の栽培開始は、ポブジカ谷の人々の自給自足という今までの生活スタイルを変化させたが、それにより、自分たちで栽培している作物とは他の作物を入手できるようになり、食生活が豊かになったと考えられる。質問の回答からは、利益を追求する資本主義社会への嫌悪感がみられた。これは、ブータンの人々に深く根ざしている仏教観や、「足るを知る」の精神から来る意識なのではないかと考えた。

#### コメント・備考：

ホームステイ先の方々には、研究課題の他にも、いろいろなお話を聞かせていただいた。また、食事の際にゲストである私たちが食事を終えるまで食事をしないなど、徹底したホームステイ客へのおもてなしを感じた。3日間という長い間私たちを受け入れてくださったアム KD さん宅の皆様に深く感謝する。

担当者：伊藤 更紗

## 8) 男性が相続している家訪問

日時：9月16日（土） 14:30～16:00

場所：ポブジカ谷の農家

面会者：クンブーさん（57歳男性）、ペマ・ドルジさん（34歳男性、クンブーさんの息子）

#### 概要：

クンブーさんには長女、長男、次女の3人の子どもがいる。現在同棲しているのはクンブーさんと息子家族（奥さん、4人の子ども）だが、ポブジカ谷の中で別の家を持つ長女・次女の家を順にまわって暮らしている。相続の仕方、農業家庭の男女の役割の違い、男女別で子どもに期待すること、農家の生活・人手不足、ホームステイへの賛否、伝統文化への思い、農作物の内容と食生活の変化について質問した。

#### 内容：

**Q1. 相続の仕方はどのようにあるか。**

A1. クンブーさんがお父さんから男女平等に遺産を相続したので、自分の子どもたちにも平等に分けた。一方で、長男のペマさんは、自分の分け与えられた分を持て余してしまうと考え、自分が継いだものを長女・次女にさらに分けて与えた。これは女系社会が主流のポブジカ谷では珍しいので、周りの家庭からはうらやましがられる。

**Q2. 農家における男女の役割分担については、どのようにあるか。**

A2. 女性は家事・料理・部屋の整理などを担当し、男性は木材の調達を行い、換金作物であるジャガイモ栽培は家族総出で行う。木材の調達が男性に任されている理由については、体力やフィジカルの丈夫さと、女性が遠方へ出かけることは心配であるからである。教育については、教育を受けていない人もいるので、親戚の中の教育を受けた人が担当し、乳幼児のケアは女性が行なうことが好ましい。これらの男女別の役割分担はあるものの、人手が不足した場合には、男女問わず補填し合う。また、女性が男性の仕事をやりたいと言つたら、家族会議を開くが、身体面が心配であり、仕事を十分にこなせず人に迷惑をかけてしまうよりは、各人は自分のできることを行なうことの方が良い。

**Q3. 子どもに対し何を期待するか。**

A3. 男女問わずよい教育を受けることであり、進学してほしい。さらに農家の仕事は体力的にも仏教の不殺生の観点からも子どもには継いでほしくない一方で、農村に残る人がより苦しい状況になることは不安であり、教育を受けて都会や海外へ行くことは、よりお金を稼ぎたいという欲深さをもつことに繋がってしまいそうで不安である。

**Q4. ポブジカで行われているホームステイプロジェクトについてどのような意見を持っているか。**

A4. 現在はホームステイの受け入れを行っていないが、近いうちに家を建て直すつもりなので、経済的利益を期待して、新しい家ではホームステイプロジェクトに参加したい。

**Q5. 伝統文化としてブータンの好きなところはどこか。**

A5. 年上の人や国王を敬い、年下の人の面倒を見る精神。これは守っていきたいが、最近では裕福さを自慢するような人も増えてきていて心配である。

**Q6. ゴ/キラの着用についてはどのように考えているか。**

A6. 着ることになれているので楽である。子どもたちにも着てほしいが、子どもたちは楽ではないとして嫌がる傾向が見られる。

**Q7. ハーフキラなどの簡易化された伝統衣装についてはどのように考えるか。**

A7. 時代の変化として必然の流れではあり、今では若者だけでなくお年寄りも着ている。しかし人とのご縁や関係性も半分になるようで縁起が良くない感じがする。また、簡易化されていることで文化の継承の心配がある。

Q8. 30年後のポブジカはどのように変化していると考えられるか。

A8. 最近は天気・気温の変化が感じられているので、今後も暑くなるのではないだろうか。暮らしはより便利になるだろう。

Q9. 暮らしの豊かさと文化の継承のバランスはうまく取れるだろうか。

A9. 文化継承がうまくいくか不安がある。

Q10. 農作物と食生活に変化はあるか。

A10. 温室を使うようになり、これまで市場で買わなければ手に入らなかつたトウガラシ、ナス、キュウリを自分の家で栽培できるようになった。さらに、かつてはソバしか育てられなかつたが、クンブーさんが若い頃にジャガイモや大根やカブの栽培も始めた。換金作物の栽培で収入も得られるようになった。料理についても好きなときに自分の畠から収穫して好きなものを調理することができるようになった。そのため、昔できていたことで今できなくなつたことはなく、豊かになった。

コメント・備考：

訪問先の家の規模や衛生状況、教育水準として裕福・高学歴と呼べる環境ではなさそうであると見受けたが、男女平等への意識や教育の熱心さは他の家庭に劣るわけではないようだ。これは、他の方へのインタビューで「教育を受けていない人は男女平等の意識が低い」という意見に反する点である。

担当者：阿部 綾舞

## 9) RSPN オグロヅルエデュケーションセンター訪問

日時：9月16日（土） 16:00～16:45

場所：RSPN オグロヅルエデュケーションセンター

面会者：サンタ・ライ・ガジュマルさん（センター長）

概要：

RSPN オグロヅルエデュケーションセンターでは、オグロヅルに関する RSPN の活動記録、ポブジカ谷についてのドキュメンタリー動画、地域にもたらす利潤を紹介し、観

光客がポブジカの天然資源を学ぶことで保護意識を持つつくりになっていた。センター内には研究室があり、保護された2羽のオグロヅルも暮らしていた。

内容：

Q1. エコツーリズムは、環境保護のために観光客のアクセスの困難さを維持する一方で、観光客の利便性を追求する矛盾を含んでいると考えるが、これらのジレンマを克服するためにどんなことをしたか？

A1. エコツーリズム計画の導入の前に、プロジェクトをいくつか導入していたため、特に問題を起こさずに済んだ。しかし、多くの観光客が来るようになると、いつかオグロヅルが来なくなるのではないかと懸念している。RSPNはNGOなので、人々を強制することはできないが、アドバイスを通して解決に向かうことはできる。

Q2. ポブジカ谷のエコツーリズムに関して、開発に対して地元の人々はどのような態度だったか？地元の人はポブジカ谷の環境の希少性を知っていたか？

A2. （ティンパーのRSPNスタッフの回答を踏まえ）たしかに収入効果を経て多くの人が前向きになった。そのため、ホームステイ先に志願する家が増えたが、コロナ禍によって観光客が減少すると、意義を感じない人が増え、供給過多を免れた。希少性の認識に対しては、定期的に政府の人が来るため、住人は地元の資源に大きな関心があると思う。

Q3. オグロヅルエデュケーションセンターの仕事とは？

A3. オグロヅルの観察と湿地の保護がメインの仕事である。観光客の教育や住人の教育も担っているが、環境保護により重きを置いている。また地元に根付いた存在でありたいため、住人の入場料は無料であり、年中無休である。最近はゴミ問題が目立つようになったため、オグロヅルと観光客対応に加え、美化活動も行っている。

考察：

オグロヅルエデュケーションセンターはRSPNの執行機関として、国境を超えた環境保全に力に入れていることが伝わった。人々は独善的な開発によってオグロヅルの生息地の喪失と劣化が問題になっていたが、「今はもう絶滅危惧種ではない」とセンター長が断言するほどオグロヅルの生体数は回復している。そのため、本センターはポブジカ谷の現状を維持することに尽力しているように感じられた。センター長は、ポブジカでのプロジェクトは完了し、谷の向こう側に新たなホームステイ先を導入するプロジェクトを始めていると教えてくれた。ポブジカの現状維持は、オーバーツーリズムやオグロヅル数の減少を防ぐことができるが、地元の観光業による収入は停滞するのではないか。

コメント・備考：

センター長はご多忙な中、アポイントメントを受けてくださいり、ご自身が日本で研修を受けたこと、命についての話などもお話下さり、大変貴重な時間となった。

担当者：岩波 七菜

## 10) JICA 海外協力隊員の方々との夕食会

日時：9月 17 日（日） 19：00～21：30

場所：パロのホテル Shomo Chuki Resort 2階レストラン

面会者：浅田瑠理さん（JICA 海外協力隊員・野菜栽培・1年と5ヶ月目）、花里さくらさん（JICA 海外協力隊員・マーケティング・11ヶ月目）

概要：

パロで活動中の JICA 海外協力隊員のお二人とパロの市場と Mountain Café で合流した後、宿泊先のホテルにて夕食をご一緒しながらお話を聞いた。浅田さんは昨年 5 月から赴任しており、野菜栽培に、花里さんは昨年 11 月から赴任しており、マーケティングに携わられている。普段の活動の様子やブータンの実情に始まり、将来の進路についての不安まで、学生それぞれが様々な会話を交わした。

内容：

Q1. 1日のスケジュールを教えてください。

A1. 朝 8 時半から仕事で 13～14 時がランチタイム、17 時に終わる。ブータンの人々はマネーマインドではなく、半官半民の企業であることもあり、たとえ早い時間であっても、マーケティングにおいて 1 日に 1、2 個商談が成立すれば満足してしまう。（花里さん）

Q2. 活動をしていて悩むことはありますか。

A2. 元々農業機械を貸し出す際に国から補助金が出ていたが、昨年急にそれが打ち切りになってしまったこと。ガソリンや燃料を貰うことが出来ていないのが現状。また、支援慣れが起きてしまっていて、お金が JICA から出ることを前提に考えてしまっている様子が見受けられる。（花里さん）

Q3. 衛生面で気になることがあった場合はどのように指摘していますか。

A3. 文化的に本人があまり気にしていない場合がある。その際は、衛生面が劣った商品が市場に出回った際に、信頼が落ちることになる、と伝えている。しかし、信仰心が強いため、害のある生き物であっても殺せない。昔、JICA ブータン事務所でネズミが発生した際に、ネズミ捕りを設置したけれど、ナショナル・スタッフが捕まったネズミに餌をあげ

ていたというエピソードを聞いた。それほど、生き物を大切にする文化が根付いている。  
(花里さん)

**Q4.** 開発や自身の活動によって、ブータン本来の豊かさが失われているのではないかといった葛藤を感じることはありますか。

A4. 赴任したての頃は深く悩んだ。ブータンに流れるゆったりした時間や穏やかな空気に、資本主義的価値観を持ち込むことが正しいのか自問した。しかし、伝統文化、伝統的生活を維持してほしいというのはこちら側のエゴであって、そこで生活している彼らはインターネットの発展などで情報を得られるようになり、便利で快適な生活を求めている。開発に携わる者がするのは選択肢を彼らに提示することであって、どのような生活かを選び取るのは彼ら自身だと今は考えている。だが、その葛藤は開発に携わるのなら、一生問い合わせ続ける問題だとは思う。(浅田さん)

**Q5.** 活動していて、ブータンの人々について何か気づきはありますか。

A5. ブータンでは支援したものがちゃんと利用されていると感じる。農業機械を例に挙げると、アフリカでは寄附した機械が雨晒しになって使えないという状況になることが多いと聞いたことがあるが、ブータンではきちんと手入れされ、現地の人々の生活に活かされている。

また、プライドが高いこと、目上の人や地位が上の人を敬う文化を強く感じるため、ブータンにあった方法で地域の人々とコミュニケーションを取っている。ポブジカのエコツーリズムでは、JICAスタッフと現地の人との間で温度差が生じ、揉めた事例もあると聞いた。(浅田さん)

**Q6.** 30年後のブータンはどのようにになっていると思いますか。

A6. オーストラリアに出て行った人たちが 50/60 代になり、一握りではあるかもしれないが、帰ってくると思う。現在でも体の具合が悪くなると、治療を受けるために帰ってくる人がいる。(浅田さん、花里さん)

ブータンの同化政策（特に民族衣装の着用義務）に対して、自由を求めるムーブメントが起きる一方で、ブータンの well being のあり方がより一層世界の注目を集めようになり、国民のなかでも、ブータンに浸透してきた資本主義的価値観から距離を置こう、というような原点回帰の動きが出てくるのではないか。(浅田さん)

考察：

実際に現場にいるお二人も、多くの悩みや葛藤を抱えながら、ブータンの人々の考え方や文化に合わせて活動をされていることが見てとれた。私自身の研究テーマに開発を掲げる契機となっている、開発への疑問や葛藤について、浅田さんの「選択肢を提示する、最

終的に選ぶのは現地に暮らす人々」という考え方はとても腑に落ちた。この問いは開発に携わる者なら一生向き合う課題とも述べられていたため、私も考え続けたい。

コメント・備考：

憧れの JICA 海外協力隊員のお二人から率直な話を聞くことができ、開発への向き合い方へのヒントが得られたように思う。引率の小田先生（JICA 出身）や現地ガイドのレトさんにも改めてじっくり話を聞くことができた。

担当者：吉村 紫織

## 11) パロの農家訪問

日時：9月 18 日（月） 18：45～21：45

場所：パロの農家（チェンチョ・デマさんのご自宅）

面会者：チェンチョ・デマさん、ペマ・ワンチュクさん（ガイド）

概要：

パロで農業を営んでいるチェンチョ・デマさんのご自宅に訪問し、お話を聞き夕食をいただいた。夕食会には、ガイドであるペマ・ワンチュクさん（2022 年度の「国際共生社会論実習」ブータン現地調査でガイドを務められた方）も合流され、お話を聞いた。夕食会の終盤では、ペマ・ワンチュクさん、チェンチョ・デマさんとその親戚の方にブータンの伝統的な歌を歌っていただいた。

内容：

### 【チェンチョ・デマさん】

Q. チェンチョ・デマさんの二人のお子さんは、将来は何を志しているか。

A. 長女は海外でエンジニアをすること、次女は軍隊に入ること。

Q. 機会があればお子さんに海外留学をさせたいと考えるか。

A. 自分たち親の世代はブータンでの農業をしながらの生活に満足しているが、子どもたちはブータンの教育に満足していない気持ちが多いように感じる。

### 【ペマ・ワンチュクさん】

Q. ブータンの人材が海外へ流出していることについてどう考えるか。

A. 海外へ行った人はお金を稼いだらブータンへ帰りたいと考えるが、ブータンに仕事がないので、帰りたくなくなる。実際には仕事はあるが、賃金が海外と比べると低いため海外

で働き続けることを選んでしまう。しかし、今までではSNSなどに先進国に出稼ぎに行った人たちの優雅な生活の様子がよくアップされていたが、最近はそのような投稿に対する忠告や、過酷な労働の状況を伝えるような投稿をする人が増えてきた。

考察：

パロの農家ではドツオという伝統的な石焼き風呂に入る機会もあり、ある学生がドツオに入っている間に他の学生がインタビューをするというように有意義な時間を過ごせた。チェンチョ・デマさんからは、ご自身の世代はブータンでの農業生活に満足しているが、その子世代はそれに満足せず海外に行きたがる、というお話や、食生活のお話など、時代の変化を感じられるお話を聞くことができてとても参考になった。学生たちにとってこの訪問はインタビューだけでなく、ドツオの体験やブータンの伝統的な歌を聞くことができて意義深いものになったと感じた。

担当者：林 知里

## 12) 王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問

日時：9月19日（火） 10:00～12:00

場所：王立ブータン大学パロ教育カレッジ

面会者：ドルジ・レトさん（王立ブータン大学パロ教育カレッジ教員、以下教員）、ツェワン・タシさん（教員）、ツェリン・ドルジさん（教員）、デチェン・ツォモさん（教員）、ツェリン・ペンジョルさん（教員）、ヨハン先生（教員）、ブンツォ・ワンモさん（記録者がインタビューした学生。クラス全体の学生数は約30名）、ウゲン・レンドウップさん（学生）

概要：

① 挨拶と自己紹介

ドルジ・レト先生が教育カレッジを紹介、メンバーが自己紹介を行った。

② 校内見学

音楽教室と美術教室を見学し、ドルジ・レト先生が竹の筆でゾンカ語のフレーズを書いてくれた。

③ 授業参加、インタビュー

伝統楽器習得の授業にメンバー全員が参加し、学生に楽器演奏を習ったり、インタビューをしたりした。

内容：

**Q1.** (先生へのインタビュー) どんな学部が開設されていますか。

A1. 教育カレッジでは Diploma (体育)、General (総合科目) とゾンカ語の 3 つの専攻がある。その後継続する学生は General (総合科目) の 2 年生となる。学生たち将来は公務員になり、小学校の教師として務める。

**Q2.** (先生へのインタビュー) 教育カレッジでなぜ芸術を教えるのか。

A2. 学生たちは将来小学生を教える。初等教育において芸術感覚の育成は非常に重要だと考えられる。楽器習得の授業には、例え楽器ができない学生にも参加させる。その理由は、将来先生になる本人たちが楽器を弾けないとあっても、彼らに芸術を理解してもらうことで、将来生徒に教える時、教師の人生観、価値観及び芸術感覚も生徒に伝わるからである。楽器や絵ができるか否かに関わらず、芸術の存在やそのあり方をこれらの学生に示し、芸術を理解してもらうことは、いつか彼らの教え子で実を結ぶ。そう考えれば、現在の授業はとても有意義である。

**Q3.** (学生へのインタビュー) 海外での生活についてどう思いますか・海外に出稼ぎに行くことについてどう思いますか。

A3. 現在は 2 年生で、卒業はまだ先だが、マスターを取得するためにオーストラリアに留学に行きたい学生が何人か周りにいる。海外の生活とブータンの生活を比べると、辛い、ハードワーク、時間管理が厳しい、などのイメージがある。

**Q4.** (学生へのインタビュー) 外国人労働者についてどう思いますか。(外国人労働者の増加で国内の就職活動が難しくなったり、国本来のルールを守ってもらえないかったりする可能性があると思いますが、どう思いますか。)

A4. 確かに外国人の労働者が増えていると感じている。例えばインド人は主に建築業に携わったりする。でもそれは悪いことではないと思う。なぜかといったら、ブータンに出稼ぎに来る外国人労働者は、それなりの talent を持つておらず、そのお陰で様々な産業が発展することができたから。建築業などの業界にはブータン人はあまり従事しないので、就職競争にはならないと思う。もちろん外国人労働者がもっと増えたら、ルールを作つて管理しないといけないが、ブータンに来てくれてありがたく思う。

考察 :

数日間の調査で、ブータンの国民性のベースには仏教の教えがある、と感じた。その教えは学校で教わるものではなく、家庭等で自然に身につくものようだ。また、教育カレッジでは、現代社会における業績主義的な競争意識よりも、学生の人間としての感性を大事に育てることを大切にしていることを知り、感心した。現地ガイドさんからは、ブータンの学校の試験はロジックや考察を重視するわけではなく、暗記でクリアできる、と聞い

て、先進国の教育目標とはだいぶ違うように感じた。

授業は、最初は一列に並び、文殊菩薩等に捧げる歌を歌い、出欠確認、教師による挨拶の後、学生が選定した楽器グループでの自由演奏がメインになる。教師一学生という教える側一教えられる側のような厳しい上下関係ではなく、分からなかつたら気軽に周りに聞ける環境が作られている。学生の中には上級者も初心者もいるが、恥ずかしがって楽器を弾かない、という学生は見当たらない。この授業は自分が興味があること、伸ばしたいところに集中でき、仲間に囲まれ誰でも気軽に参加できる雰囲気がある。日本の大学の授業とは一番異なる特徴だと思う。

こういった教育環境があるからこそ、学生が陽気で、愛想が良く育つのではないかと感じる。何人かの学生に話しかけたが、「いやちょっとごめんなさい」と言われたことはなく、ブータン人は人との距離感を縮めることに抵抗感がないと感じる。

#### コメント・備考：

王立ブータン大学パロ教育カレッジはブータンの公立師範学校であり、学生が在学中に公務員試験を年に1、2科目受け、合格することで次の試験を受けられる。全科目の合格者は卒業後公務員になり、公立小学校の先生になる。またブータンでは、4年間の公立大学教育を受けて公務員になった学生は、卒業後海外へ就職してはいけないが、マスター学位を取得するための留学には制限が特にない。

担当者：林 卓菲



## (6) 写真



ブータン到着直後の履修生たち



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへの  
インタビュー



メモリアル・チョルテン（仏塔）でのインタビュー



ブータン日本語学校の生徒との交流



ブータン日本語学校の皆さんと



王立自然保護協会（RSPN）訪問



ブータン女性起業家協会（BAOWE）訪問



RSPN オグロヅルエデュケーションセンター訪問



ホームステイ先の農家



ホームステイ先での夕食作り



ポブジカ散策(ネイチャートレイル)



ジャガイモ収穫のお手伝い



市場でのインタビュー



タクツアン僧院訪問



農家のインタビュー



王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問

### 3. 事後学習成果（徽音祭発表・ 大学ウェブサイトでの報告）



## (1) 写真

お茶大生が取り組む国際協力	
・途上国でのスタディツアー報告（カンボジア・ブータン） ・JICAインターンシップ報告 ・「共に生きる」スタディグループ活動紹介	
発表日時・発表グループ	11月11日（土）13時～14時30分 ・ブータンスタディツアー報告 ・STUDY FOR TWOお茶大支部活動紹介
11月12日（日）10時30分～12時 ・カンボジアスタディツアー報告 ・JICAインターンシップ参加報告	
発表場所	国際交流留学生プラザ2F多目的ホールB
常設展示	11月11日（土）10時～17時30分 11月12日（日）10時～16時30分
展示場所	国際交流留学生プラザ2F多目的ホールC

徽音祭発表の案内板



入口に展示したブータン女性の民族衣装（キラ）



ポスターの常設展示の様子



動画上映の様子



ブータンスタディツアー報告の様子①



ブータンスタディツアー報告の様子②



カンボジアスタディツアー報告の様子①



カンボジアスタディツアー報告の様子②

## (2) 常設展示ポスター

# カンボジアの政治における女性活躍度

生活科学部人間生活学科 2年  
三枝 馨

## 1. 調査テーマ

### リサーチクエスチョン

- ①女性は政治にどれほど参加しているのか
- ②カンボジアでは、なぜ政治における女性の活躍度が低いのか

### 先行研究

- ・ジェンダーギャップ指数ランキング(政治分野) 115位 /146位中
- ・女性議員20.8%、女性閣僚11.1%
- ・与党は半ば独裁状態になり、調査対象者が国政について率直な意見を述べることは難しい→地方自治について質問を行うことに

## 2. 調査設問と対象者

### 調査設問

- ・女性の村長はいるか
- ・男女の不平等はあると思うか
- ・政治の場で女性の活躍度が低い理由（もしくは村長が女性である理由）

### 調査対象者

- ・農村部の市民—コオロギ農家の方 4名、RTCの生徒 5名
- ・都市部の市民—CJCCの生徒 4名
- ・JICA日本人職員の方 1名



2

## 3-1. 結果:市民へのインタビュー

コオロギ 農家		女性の村長	男女の不平等	活躍度低い原因	
				30代男性	40代女性
		×	ない	特になし	
		×	ない	わからない	
		×	ない	家事	
		×	ない	家事	
	女子1	—	ある	—	
	女子2	×	あまりない	教育△、慣習、社会的立場と重複する傾向	
	男子1	×	あまりない	女子2と同じ	
	男子2	×	あまりない	女子2と同じ	
	男子3	×	あまりない	女子2と同じ	
	女子1	×	ある	教育△、慣習、社会的立場と重複する傾向	
	女子2	×	ある	女子1と同じ	
	女子3	×	ある	女子1と同じ	
	女子4	×	ある	女子1と同じ	

## 3-2. 結果:JICA日本人職員の方へのインタビュー

### カンボジアの政治における女性の活躍度が低い理由

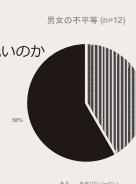
- 1) 女性がリーダーシップをとる経験をしないこと
- ・従属的な立場にいることは快適な部分もある
- ・自分自身のリーダーシップによって物事が変化し、その恩恵を受ける経験がない
- 2) 論理的思考力の不足
- ・教育の程度が低いことによる

4

## 4. 考察と課題

### 考察

- ①女性は政治にどれほど参加しているのか  
→女性村長なし→女性の政治的活動は活発でない
- ②カンボジアでは、なぜ政治における女性の活躍度が低いのか  
→女性の活躍度が低い原因は3つ
- 1) ジェンダー不平等の考え方が浸透していない  
・男女の不平等があると答えた人は42%  
・不平等は存在しているが、認知されていない



### 2) 女性が政治に時間を割けない

- ・女性は家事・育児・仕事のすべてをこなす必要がある

### 3) 教育レベルが低い

- ・中学校修了率45%、高校修了率19-33%
- ・論理的思考力・リーダーシップ能力が鍛えられない

→現状に女性たちが変化を求める、男性が積極的に女性をリーダーに登用しない

### 本調査の課題

- ・都市部と農村部の回答傾向を比較しようとしたものの、対象者によって教育の程度が異なっていた

→ジェンダー問題への理解は教育の程度が反映されやすいため、比較できず

5

# 都市化と幸福度の関係

生活科学部人間生活学科2年  
杉本 愛莉

## 01 調査テーマ設定の背景

- ▶ カンボジアは都市と農村部の差が（日本より）開いている
- ▶ 農村は家族や地域コミュニティを大切にしている
- ▶ 都市化で孤独などの新たな問題は発生していないのか
- ▶ 開発支援では経済発展だけでなく心の豊かさも注目されてきている（幸福のパラドックス）

## 02 調査設問

- ① 都市化に対するイメージについて
- ▶ 都市部（プノンペン・州都）と地方部の印象
- ▶ カンボジアの都市化が進むと日本の都市部のような課題（孤独、過労など）が生じると思うか
- ▶ 将来は都市部と地方部のどちらに住みたいか

## 02 調査設問

- ② カンボジア国民の幸福感について
- ▶ 幸せに生活するために最も大切な要素は何か  
「家族・友人、お金、仕事・勉強、信仰、時間、その他」から選択
- ▶ 日本とカンボジアで生活・文化・価値観に違いはあるか

## 03 調査結果

- ① 都市化に対するイメージについて
- ▶ 都市化に対してプラスなイメージを持つ人が多い例）「交通面が便利になると嬉しい」
- ▶ 「日本に比べて仕事をそこまで重視しないため過労や孤独などの問題は生じにくいと思う」
- ▶ 「鬱などの精神疾患についての理解が進んでいない、多忙や競争の激化などで自殺率の上昇は起こり得る」

## 03 調査結果

- ② カンボジア国民の幸福感について
  - ▶ 幸せに生活するために最も大切な要素は何か
- | 家族・友人 | お金 | 仕事・勉強 | 信仰 | 時間 | その他 |
|-------|----|-------|----|----|-----|
| 10    | 3  | 5     | 0  | 1  | 0   |
- ▶ 「カンボジアでは日本に比べ家族>仕事という印象」
  - ▶ 「ひとり行動が苦手だと思う」

## 04 考察

- ① 人間関係の希薄化だけが都市部の幸福度を下げる要因ではない
- ② カンボジアと日本では人間関係の築き方・捉え方に違いがある
- ③ カンボジアの都市化・経済成長が幸福のパラドックスに当たるにはまだ不十分である

# カンボジア女性の社会経済的立場の状況

文教育学部言語文化学科 4 年  
林 希枝

## 調査背景

- 内戦の影響で、40歳以上の男性人口くそれのが女性人口
  - 女性世帯主が全世帯の27.1%を占める(2013国勢調査)
- ⇒カンボジア社会や経済復興において重要な役割を持つ女性への期待
- カンボジアのジェンダーギャップ指数のランキングは92位(2023)と低い水準  
依然として女性の社会的・経済的地位は低い(女性の政治参加や金融サービス利用など)

## 本調査の問い合わせと調査設問

- ◆本調査の問い合わせ  
何が女性の社会経済的立場を低下させているのか
- ◆調査設問
  - 住んでいる地域や出身地の男女の進学状況は?
  - 男女の給料の差は?
  - あなたが思う男女の格差は?



## 調査結果① 教育

- 以前に比べ、カンボジア人の教育に対する態度が変化  
→教育を重視するように
- 男女間の顕著な格差はない(主に初等教育・中等教育。高等教育では男女に進学の差があり)
- しかし、農村部では教育を受けられない子どもも  
・家が貧しく、小学校までしか出られない
- 両親の仕事を手伝ったり、アルバイトや他の仕事を見つけ働く
- 学校までが遠くて、道のりが危険(主に女子。連れ去りやレイプの危険性あり)
- 「伝統的な慣習」が存在  
男子→教育は必要ない。早く働くべき。  
女子→早期結婚・出産で家族を支えるのが仕事

## 調査結果① 教育 考察

- ✓学校を増やすという選択肢以外にも、  
どこに建てるか  
多くの生徒が通えるように公共交通機関を整備する  
→スクールバスの利用
- 道路などインフラ整備
- ⇒安全安心な通学路に
- ✓農村によって、伝統的「慣習」がどれほど残っているのか、  
男女によって、学校に行けない理由が異なる(根本には貧困も影響している?)  
⇒地域ごとに解決のためのアプローチを考える必要がある

## 調査結果② 労働

- 主に能力に基づいた給料  
→同じ仕事に対して男女の給料に差はない  
→男女平等…?
- しかし、男女が就く職種の違いや昇進に関して課題あり  
→外科医などの医者は男性が、看護師は女性が多い。  
小学校などの初等教育の教師は女性が、大学などの高等教育の教師は男性が多い  
→重要な役職であるポジションはほとんど男性(会社や政治)

## 調査結果② 労働 考察

- ✓男女で就く職業に偏りがある(+エンジニア系などの理系分野を学ぶのは男子が多い)  
→男女によって学ぶ機会が異なるのか?  
→女性がなる職業が外部の可視的なまたは不可視的な原因によって制限されているのか  
日本においても研究者の大半を占める工学分野及び理学分野の研究者に占める女性の割合は、大学等の研究本務者で12.6%  
(工学11.1%、理学14.6%)、企業の研究者で8.1% (工学7.6%、理学14.8%) と低い水準  
→周囲の進学動向、親の意向、ロールモデルの不在が原因  
⇒カンボジアでも同じようなことが起こっているのか、他の原因があるのか?
- ✓女性の管理職や昇進が少ない  
→「女性はできない」という伝統的社会規範の存在  
→全員の意識を変えることや、女性に自信を持ってもらうことも必要では(家事が女性に偏っていることも、女性のキャリアを止める要因になっているかも)

# 「復興」を問い合わせる—ポル・ポト政権時代以後に紡がれる語りに着目して—

文教育学部人文科学科 2 年  
平子 七海

## インタビュー調査の目的

- ポル・ポト政権時代から 40 年以上が経過した現在だからこそ語られる語り、人々の心理的要素、内的体験に着目
  - 重層的な社会状況、心情、未来へのまなざしを調査によって可視化
- ⌚ ポル・ポト政権時代からの「復興」とは一体何を意味するのかを改めて問うていく
- ✉ インタビュー調査にご協力していただいた方々
- 調査①：ガイドのブティーさん  
→ ポル・ポト政権時代の労働キャンプでの経験や、ご家族との思い出、これからカンボジアの未来を生きる子どもたちに伝えたいことや残したい想いなどを伺った。
  - 調査②：Ecologie 社カンボジア人スタッフ 1 名、JICA カンボジア事務所職員 2 名、王立ブノンベン大学の学生 4 名、Wonderly(株)教育アドバイス入小学校教員 2 名  
(ポル・ポト政権時代以後に生まれた人々のインタビューアー調査)
  - ポル・ポト政権時代のことについての学びの経験や、カンボジアの歴史を未来へと語り継いでいくことの必要性などについて伺った。

## 「タブー」としてのポル・ポト政権時代

- 二重の語りにくさの問題

「今日におけるカンボジア政治の中にも、当時の政権でいうところの加害者側と被害者側が混在している。」「祖母から自分でポル・ポト政権時代のことを話すことはあるが、孫である自分から祖母に当時のことを聞くことはない。」

⌚ 人为的な秩序混乱を経験したコミュニティに向けて使用される「復興」概念の複雑さ

- 公教育において

「もっと先の未来では、学校の先生たちがポル・ポト政権時代のことを説明できなくなるかもしれない。」「ポル・ポト政権時代のことを表立って話すことができない状況にある。私立学校ではポル・ポト政権のことやその時代に関連する場所を訪れて学ぶ機会があるが、公立学校ではあまり聞いたことがない。」

⌚ 公教育は風化の装置として機能しつつあるか

## 記憶の継承を担うものたち

- ブティーさんの発言：

「語ることは辛いが、当時を生きた人々は若い世代に伝えたいと願っており、教科書に詳しく書かれていないからこそ口で伝えていきたい。」

- 10代の学生たちの発言：

「ポル・ポト政権時代の大量虐殺のことや労働キャンプでの辛い生活について、ソーシャルメディアの動画を見て知った。」「母親から学んだ。」「当時のことを知るには、自分でソーシャルメディアや報告書を通じて調べたりする必要がある。」

⌚ ①家族間での口承 ②ソーシャルメディア を通じて、次世代に記憶が伝えられている

## 受け継がれる傷、託される希望

For many survivors, the passage from trauma to mourning means living with loss, not just of things in the past but of a future that may have been but will never be. For the generation that follows, it is about living with a "double awareness," as Genard Fromm puts it, a simultaneous sense of knowing and not knowing.

(多くの生存者にとって、トラウマから真向に至るまでの道は、過去の出来事だけでなく、本来はありえたかもしれない未来への喪失とともに生きることを意味する。次の世代にとっては、ジェナード・フロムが言うように「二重の意識」つまり知っているようで知らないという感覚を同時に持ちながら生きることである。)

Khatharya Um (2015) From the Land of Shadows: War, Revolution, and the Making of the Cambodian Diaspora, the USA: New York University Press, pp.258.

⌚ ポル・ポト政権時代からの復興とは何を意味するのか

→ 次の世代もその出来事を語り継いでいるという状態

## 受け継がれる傷、託される希望

- 10代～20代の若者たちの発言：

「祖母が母に語り、母が自分に語ったように、自分も子供へと語り継いでいきたい。」「歴史を学ぶことはとても重要で、歴史を学ぶことによって過去の過ちを避けるべきである。」

- ブティーさんの発言：

「同じ国や世界に生きる人々が、お互いのことを恨み合っていたら、いつまでも戦争が終わらない。だから、恨むということをしないでほしい。でも、子どもたちにポル・ポト政権時代のことを教えてくれた人のことをいつまでも覚えていてほしい。そして、将来このようなことが二度と起こらないようにしてほしい。」

⌚ ことばで想いを紡いでいく、語り継いでいく

## 最後に

- 日本語の教科書で学ぶ「ポル・ポト政権時代」と、当事者やカンボジアの子どもたちにとっての「ポル・ポト政権時代」
- 「復興」の概念にまで立ち返り、再定義し続けていくことの重要性



# カンボジアの地雷問題と被害者の社会的立場

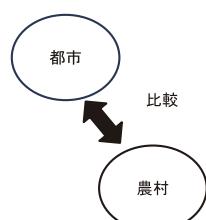
文教育学部言語文化学科 2年  
矢野 紗彩

Page 1

## カンボジアの地雷問題と被害者の社会的立場

### 調査設問

- 1) 地雷についてのイメージ
- 2) 地雷回避教育
- 3) 地雷被害者への支援
- 4) 地雷被害者へのインタビュー



Page 2

## カンボジアの地雷問題

- 1979-2000 約6万5000人の死傷者
- 減少傾向 → 近年は交通事故の方が大きな問題に
- 一般市民、子供の被害（無差別性）
- 半永久的に残る（残存性）
- インフラ整備・農業活動の妨げ
- 国際NGO・NPOの地雷撤去活動

Page 3

## 調査結果【地雷のイメージ】

→共通の答え：「怖い」「危険」

※最初は「地雷」と聞いても「分からぬ」という反応が返ってきた

### 障がい者

「地雷の被害に遭うと、手足を失う」  
「命が助かっても、障がい者になれば、仕事がなく将来への不安が大きくなる」

### メンタル

「メンタルへの影響が大きい」  
「社会復帰が難しく、不安定な生活を送ることで自殺する人もいる。」

Page 4

## 調査結果【地雷被害者支援】

→政府、NGO・NPO、地域コミュニティ

### ID poor

- 政府の貧困削減政策（2007年～）
- 割り当てを決めるのは各村の村長
- 承認後、医療扶助や物資援助など
- の支援を受けることが可能

### NGO NPO

- 地雷撤去活動、地雷回避教育
- 地雷被害者支援など
- 地雷回避教育については政府とUNICEFの協働

Page 5

## 調査結果【当事者インタビュー】

### 被害の経験

志願兵として戦場で戦う  
帰宅途中に地雷被害にあう  
病院で治療後は地元に帰される  
その後のサポートはなし

### 現在の生活

現在まで政府の支援を受けてこなかった  
物乞いをして生活している  
(妻も同じく物乞い、子供は8人)  
子供たちは十分な教育を受けておらず皆貧しい生活を送っている

Page 6

## 考察

### □地雷問題が他人ごと化、形骸化

→都市部では、被害者の存在が見えにくい

→被害者数の減少

### □政府主体の支援の必要性

→地雷被害者に特化した支援の少なさ

→歴史教育を制限していることも影響か

### □地雷被害者の抱える複雑な問題

→地雷被害者に農村部出身者や貧困者が多い

→障がい者となることで、社会の中での差別・孤立感

→仕事の機会の減少 etc.

# カンボジア国民の仕事と生活満足度の地域比較

文教育学部人文科学科 2 年  
吉村 花香

## 調査テーマ

### カンボジア国民の仕事と生活満足度の地域比較

#### 【リサーチエクスチョン】

- ・カンボジアの人々が就いている仕事や経済的な生活満足度は、都市部と農村部で異なるのか
- ・カンボジアの学生が抱く将来像は、都市部と農村部で異なるのか

#### 【調査設問】

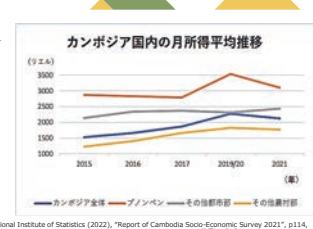
- ・あなたとあなたの家族が就いている職業は何か
- ・収入は月（年）何\$か
- ・現在の収入に満足しているか（+回答理由）
- ・将来どんな職業に就きたいか（+回答理由）

1

## 調査背景

- ・2016年、低所得国から低中所得国へ  
⇒国全体の経済発展は順調

- ・都市部と農村部の所得格差には  
2015年からほぼ変化がない  
⇒地域格差が埋まらない現状がある



National Institute of Statistics (2022), "Report of Cambodia Socio-Economic Survey 2021", p114, Table 1 Income composition, average per month, 2015 – 2021を用いて作成

## 調査結果① 平均収入と生活満足度の違い

在住地	家族人数	家族年収( \$ )	1家族の月生活費( \$ )	1人あたりの月生活費( \$ )	生活に満足しているか
家族A タケオ	3	1450	120.8	40.3	×
家族B タケオ	4	10500	875.0	218.8	○
家族C タケオ	6	4060	338.3	56.4	×
家族D シエムリアップ	6	3600	300.0	50.0	×
家族E シエムリアップ	6	5400	450.0	75.0	無回答
家族F ブンベン	4	12000	1000.0	250.0	○
家族G ブンベン	4	12000	1000.0	250.0	○
家族H ブンベン	3	12000	1000.0	333.3	○
家族I ブンベン	3	18000	1500.0	500.0	○

- ・農村部の方が都市部よりも家族年収が低い傾向にある
- ・農村部の方が平均家族人数が多いことから、一人当たりの生活費が低くなる傾向にある

3

## 調査結果② 従事する産業の違い

- ・農村部には第一次産業、都市部には第三次産業に従事する人が多い傾向にある
- ・都市部と農村部での産業構成の違いが、就く仕事の違いに表されている

勤務地	
農村部	都市部
米農業	農業
米農業	機師（飛行機）
米農業	機師（飛行機）
米農業	警察公務員
米農業	小売（機器販売）
米農業	教師（小学校）
米農業	小売（電子販売）
米農業	教師（講師）
米農業	起業家
漁師	漁師（漁師）
漁師	漁業会社経営
建設工場	清掃業
建設工場	清掃業
建設工場	清掃業（エアコン掃除）
建設工場	料理人
建設工場	計11人
計：第一次産業	
第二次産業	
第三次産業	

黄：第一次産業  
緑：第二次産業  
青：第三次産業

## まとめ・考察

- ・都市部と農村部では家族年収に差があり、生活満足度も農村部の方が低い  
⇒農村部の方が経済的に厳しい生活を送る人が多く、地域間の経済格差は埋まっていない。

- ・農村部には第一次産業、都市部には第三次産業に従事する人が多く、地域による産業構成の違いが表れている  
⇒従事する産業によって職の安定性や収入が異なるため、地域間の経済格差との関連が予想される。

- ・都市部の学生と農村部の学生では就きたい職業・業種が異なっている  
⇒都市部と農村部では学生の養育環境や裕福度、両親の職業が異なり、学生のキャリアにも影響していると考えられる。

## 調査結果③ 学生が将来就きたい仕事

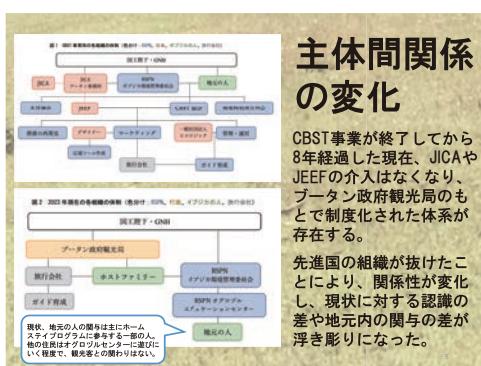
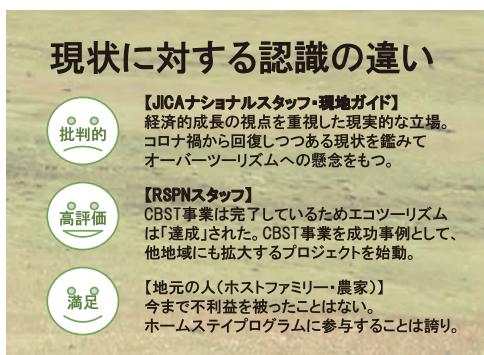
農村部	将来就きたい職業	理由
19 正 動植物の仕事	小さいときから好きだから。	人の下で働くのではなく、自分で経営してみたいから。
20 男 稲作業	自分が好きなことだから。	ニアコンや専門修習業者
20 男 ニアコン専門修習業者	自分が好きなことだから。	ニアコンやエアコン修理などが收入につながるから。
23 男 電気技術者	技術開拓やニアコン修理などが收入につながるから。	

- ・都市部と農村部で将来就きたい職業が異なっており、都市部の学生は外交官などエリート志向が多い

5

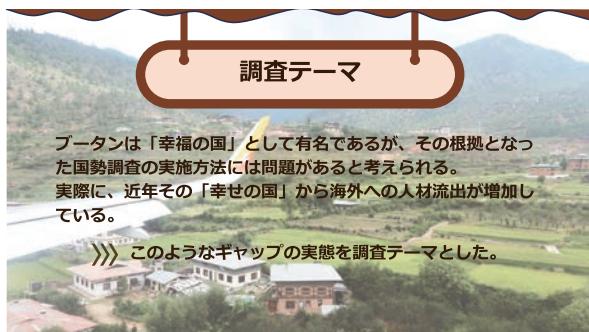
# ポプジカから学ぶ持続可能な エコツーリズムに必要な支援体制

# 文教育学部人文科学科 1 年 岩波 七菜



# 幸せの国であるブータンの政府と若者のギャップの実態

文教育学部人文科学科 1年  
林 知里

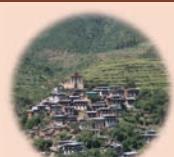


## インタビューの結果①

Q1) 将来の夢は何か。  
医者や教師など、第三次産業の職業で、人の役に立つような仕事に就きたいと答える人が多かった。



Q2) Q1の実現のために海外へ行く必要はあると思うか。  
国内で十分に学べるという意見もあったが、ブータンでは学べない新しい知識や技術を得るために海外へ留学に行きたいという声の方が多いかった。



## インタビューの結果②

Q3) ブータンにおける人材流出についてどう考えるか。

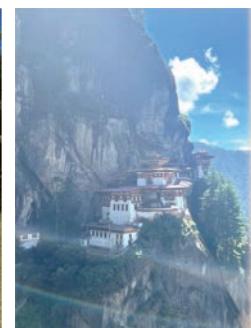
公務員や専門知識を持つ人が国内から減少していくと問題視する意見もあったが、彼らが帰ってくるのならブータンの将来のためにも良いことだというポジティブな見方があった。



## インタビューの結果③

Q4) 人材流出について政府はどのように対処すべきだと考えるか。

インタビューを行った人に共通して、賃金の上昇という意見が出た。ブータンで1ヶ月働いてもオーストラリアで数日働いたときの賃金にしかならないという状況になっている。賃金が働いた時間と見合うようになることが求められている。その次に多かった意見は雇用機会の創出であり、先進国と競えるようになる必要があると答える人もいた。



## 考察①

幸せの国から出て行こうとするというすれば違いはブータンの国民の性格が関係していると考えられる。



人々が穏やかで仏教が広く浸透しているブータンだからこそ精神的な豊かさを重視するGNH (Gross National Happiness、国民総幸福) という考えが生まれた。  
しかし、ブータンの人は手作業でやるきつい仕事は敬遠する傾向にある。また、国内では賃金が低いので、高い賃金を求めてブータンよりも職業の選択肢が多い海外へ行くことになるのだと考える。

## 考察②

きつい肉体労働はしたくないブータン国民とブータンにある仕事のミスマッチが起こっている。よって政府はこのようなブータンの人々の性格を踏まえた上で賃金の上昇や農業などの政策の見直しが求められていると考察する。



# ブータンの農業と食生活

文教育学部人間社会学科 1年  
伊藤 更紗



## ブータンの農業データ

- 第一次産業GDP構成比  
17.7%
- 耕作面積 5130km<sup>2</sup>  
(国土の約13%)
- 主な作物  
コメ、メイズ、ジャガイモ、  
リンゴ、オレンジ

## ブータンの食生活

- ブータンでは米が主食として食べられる。
- 唐辛子が好んで食され、基本的にブータン人が食べる料理は辛い。
- 食材の調理の仕方に保守的な面が見られる。実際、さまざまな食材が使われているが、調理法としては、チーズで煮込んだタリーや唐辛子炒めなど少ないジャンルにカテゴライズすることができる。
- インド人労働者の増加やインド人観光客の増加を受けて、インド料理がホテルなどで多く提供される。
- 同じチベット文化圏に属することもあって、ネパールで有名なモモという餃子のようなものも広く食されている。
- 最近では、食の欧米化が進み、都市部ではインスタント食品やファストフードが購入できる店も増加している。



## ブータンにおけるジャガイモ栽培

- ブータンでは換金作物としてじゃがいもの栽培が20世紀以降に始まった。
- ジャガイモ栽培の開始により、農村部ではそれまでの自給自足の生活や物々交換の社会が崩れ、貨幣社会へ移行した。
- このようにして貨幣社会になつたことで気候条件や土地条件が厳しく栽培できる作物に限りがあるブータンの人々は、自分たちが栽培しているものとは別の食材を獲得できるようになつた。
- ジャガイモ栽培の開始はそれまで存在していたジャガイモ栽培者たちの収穫の偏りなどの問題を解消し、食卓を豊かにした。

## 日本のブータンへの農業支援

- 日本のブータンへの支援は1964年の西岡京治氏の派遣から本格化した。
- 西岡京治氏はブータンの寒暖差の激しい気候にあう大根の栽培を導入し、1年目から栽培に成功、その後もブータン農業の発展に貢献し国王からダシューの称号を贈られた。
- 現在も日本から多くの支援が行われている。日本製の農業機械が多く提供されている。
- 若者の農業離れを解消するための農業のIoT化を進めようとしている。
- 流通システムが未整備なブータンの流通を健全化し、農家の収入に地域差が出来ないような制度の実施のためのプレシステムを準備している。



## ブータンの農業の現状

- 食料自給率は68%（2016）で低下している。
- 輸入食品の9割はインドからの輸入に頼っている。インドからの輸入食品の方が国産のものよりも安いため国産品の消費が減少している。
- ブータン国内では国産志向、オーガニック志向の風潮も見られるが、都市部に住んでいる市民にとっては高級品である。
- 外国へのブータン人の流出、インド人労働者の増加のため、都市部の市場にはインド人客が来ることが多く、インド人客向けの作物が多く用意されている。
- 農村部では、若者が都市部に流出し後継者不足である。

## ブータンの農業の課題

- 国の農業支援に対する先行きの不安が存在する。実際に、農業機械を提供している団体では支援金が一時的に停止された。
- 農業支援を行なう機関や政府機関のような所謂デスクワーク側と実働を担っている側で現状認識にギャップが存在していて、実際はうまく機能していない政策が存在している。
- 現地でも、より開発を進めたい支援者側と、現状に満足している住民の間に意識の違いが存在し、開発支援がうまくいくっていない。

↓  
長期的な視点で見た  
現実的な政策の必要性



# ブータンにおける開発 —近代化と伝統文化の観点から—

文教育学部人間社会科学科 2 年  
吉村 紫織

## 01 調査テーマ

「途上国の人々は本当に開発を望んでいるのか？」  
先進国が主導権を握ってきた開発  
経済や産業の発展が最終目標に据えられ、伝統的な文化が廃れ、  
近代社会へと向かう開発対象地域も少なくない  
伝統文化と近代化のバランスの維持を重視するという、従来の開発の考え方方に挑戦的な  
開発アプローチ、GNH（Gross National Happiness、国民総幸福）を掲げるブータン。  
2023年度でLDC（後発開発途上国）卒業を予定するほどの目覚ましい発展を遂げる。  
ブータンにおいて開発は何をもたらし、何を失わせたのか。  
開発のあるべき姿とは？

## 02 先行研究

上田晶子 2006  
『ブータンにみる開発の概念 若者たちにとっての近代化と伝統文化』  
からみえる小国ブータンとしての独自の伝統文化の捉え方と開発路線  
中国とインドという大国に挟まれている地政的な状況からくる危機感  
→政府は自国のユニークな文化を国家主権を維持するための武器と捉える  
社会経済的開発と文化的継続性は原則として相容れないものではない  
という基本姿勢  
→開発の方針は経済的豊かさと精神的豊かさの調和を目指す

## 03 調査設問・方法

調査設問

①あなたにとって幸せな生活とは何か。  
②開発によって生じた、ブータンにとって肯定的な変化は何か。  
③開発によって生じた、ブータンにとって否定的な変化は何か。  
④あなたにとって（誇りに思い、続いて欲しい）伝統文化は何か、それはあなたにとって何を意味するか。  
⑤伝統文化を維持しながら、近代化を進めることは出来ると思うか。  
⑥30年後のブータンはどのようにになっているか。

### 調査方法

現地では直接英語で聞き取りを行う場合と、通訳を介した場合がある。  
対象は現地で出会った様々な人である。

## 04 調査結果-1

◆ 合計で21名の回答が得られた。（性別・年代様々）

### 幸せな生活について

自分や家族の健康  
満ち足りた衣食住  
良い教育と医療  
ブータンに生まれたこと  
人間に生まれたこと  
etc...

### 開発の認識

ポジティブ  
教育や医療の質とアクセス向上、  
楽になった農業  
ネガティブ  
自然への悪影響、人口流出、衰退する伝統文化/独自の言語

### 開発に関する諸課題

若者のオーストラリアへの頭脳流出  
開発のアクターと現地の人々が求めるレベルの不一致

## 04 調査結果-2

伝統文化への認識  
誇りに思う伝統文化  
民族衣装  
仏教文化  
国王への尊敬、独自の言語  
あなたにとって伝統文化とは?  
ブータン人としてのアイデンティティ  
国を維持するための一つの手段

近代化と伝統文化の両立  
可能  
GNHに則る  
変化のスピードに注意  
王様の存在  
他国に追随しない  
難しい  
言語が英語に変わる  
人口流出が著しい

ブータンの将来像  
プラス  
インフラと教育の質の向上  
テクノロジーの普及  
インド政府との良好な関係  
マイナス  
教育や医療の有料化、  
地球温暖化  
今ある貧困気の消滅

## 05 考察

### 1 開発は必要とされている

ネガティブな影響も認識した上で、開発による日々の利便性向上を求める。

現地に暮らす人々が幸せな生活をどのように思い描いているかの観点が開発に必要。

### 2 伝統文化は後進性の象徴ではない

国王への尊敬という新たな視点

伝統文化はアイデンティティ、  
王様、宗教、国の存続などと強く関連

### 3 近代化と伝統文化の調和は取れるとの認識

努力や工夫で維持できる、  
すべきだ（政府と同様の認識）

他国への追随ではなく、変化のスピードに注意する  
王様やGNHに則る  
ブータン独自の開発路線をとる姿勢

参考：上田晶子（2006）

『ブータンにみる開発の概念 若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店

# ブータン社会は男女平等と言えるのか

文教育学部言語文化学科3年  
阿部 綾舞



現地でのインタビュー①				
遺産相続	女性への期待①	女性への期待②	身体的差異	女性の仕事
・女性が継ぐのが一般的 ・女性が継ぐのは家に留まることが多い ・女性にとって男性が相続することは羨ましい	・子どもを産むことで得られる幸福一人で自由に暮らす中の楽しさはトレードオフ→子どもを産むことはカルマの結果	・守るべき対象危険から逃げたい(ターゲイナー) ・魅力的な容姿 ・家庭と仕事の両立ができないので離職	・男性の方が女性より身体的に力強いことは仕方ないこと ・女性が身体的に無理をするより自分のできることをした方がいい	・女性は家庭で家事・育児、男性は外で仕事をするのが伝統的 ・最近では男性も家事をよく手伝う

現地でのインタビュー②		
育児の担い手	子への期待①	子への期待②
・夫婦だけでなく両親やその他親戚も手伝い合う	・男女に問わらず健康で、よい教育をうけてほしい ・娘が家事ができないことは恥ずかしいことなので小さいから手伝わせる	・国王や仏教を想っていてほしい ・来世のために、貪欲にならずに節制してほしい

考察①	
○「ブータンはgender equalな社会か」という問いに対し、誰もが首肯した ⇒昇進のスピードや教育の機会などの観点においての判断であり、家事や育児の負担や、女性は守るべき対象であるという価値観などの度外視されている観点もあるのではないか？ ○家事・育児を家族総出で行う体制は都市部や海外への移住が増え核家族化が進む中で維持が難しいのではないか？	

考察②	
○「男女それぞれできることをすべき」という意見は、仏教的価値観で貪欲さが忌避され、「足るを知る」という姿勢が善とされる考え方によく来るのかもしれません。 ⇒この価値観は女性を抑圧している可能性がある一方で、その状況に気づいていない可能性がある。また、若い世代では、女性への期待に違和感や不快感を得ている人もいるので、今後ジェンダー規範や仏教的価値観にも変革が起こる可能性がある。 ○国王・仏教・コミュニティのために貢献することが美德とされ、「個」が重んじられていないのではないか？	

今後の展開
・LGBTQへの理解が進んでいるという話をきいたので、男女についても改めて見直される可能性がある ・GNHに基づき伝統文化の維持が目指されているので個人の自由に対する意識の変化には時間がかかるかもしれない

# ブータンにおける高等教育の「出口」

人間発達科学応用社会学コース M1  
林 卓菲

## 【先行研究からわかったこと】



- ・公務員志向とセカンドチャンスとしての留学＆（大学・大学院への）進学
- ・国内製造業の欠如、地域格差と低賃金への不満
- ・職種選択の不均衡、「ブルーカラーレビュ」、農業が主に女性により担われる実態

## 設問

1. 海外での暮らしは、どのようなイメージですか。
2. 周りに海外へ出稼ぎや留学に行く家族、友達はいらっしゃいますか。ご自身も行ってみよう」と思うことはありますか。
3. 進路選択時、安定性と高賃金のバランスをどのように考えましたか。
4. 良い仕事に就くため、「絶対必要」なのは何だと思いますか。
- 5-A. 将来はどのような仕事に従事したいですか。その仕事には学歴的な制限がありますか。
- 5-B. 今の仕事に満足していますか。満足していない場合、理想的な仕事はどのような仕事ですか。理想的な仕事に就くために、何か計画や段取りを組んでいますか。
6. 若者の海外流出について、どのような対策が考えられますか。
7. 外国人労働者について、どう思いますか。

## 調査結果まとめ（対象者A～Hさん計8人）

- ・高等教育に進学する理由・動機について  
(高等教育に進学する必要性を認識し、教育が将来性を広げる、という前提で人生を設計するイメージが強かった)
- ・生活と仕事のバランスについて  
(生活>仕事 「仕事を全てではない」が、若いうちに海外に出てみたいという考え方があった)
- ・人材流出について  
(製造業の振興で人材流出を止める、という意見が語られた)
- ・外国人労働者について  
(競争相手でなく、力を貸してくれる人と見なされた。観光客に対しては友好な態度で、距離感が近いと感じた)

## 考察

- ・業績主義的な競争意識&仏教信仰と「ブータニズム」から生まれる葛藤
- ・「家族・親友」が前提条件の海外流出：「将来ブータンに帰りたい」  
⇒コミュニティへの依存は強く、コミュニティを離れてでも心理的な依存を求める傾向
- ・教育熱が高い社会だが、高学歴に見合う職業が少ない  
⇒「海外流出」は海外に「行きたい」のではなく「行かざるを得ない」：消費社会としての価値観が窺われる



## 一番印象に残る対象者：Eさん



- ♪属性：30代半ば/男性/ガイドさん/  
♪Q：子供にどのような仕事をしてほしいですか  
A：ストレスのない仕事。（生活>仕事）  
音楽など芸術系の仕事をしてほしい。今(自分が)子供に音楽を教えている。本物の音楽が学校では学べないから。  
(本当に好きなことで生計を立てたい、という自分の願望があるからこそ、子供には夢を追求してほしいのだろう。自分は家族もいるので「留学」を断念したが、ブータンで学べないことがあるなら、自分の次の世代は海外に行って欲しい、と思っている様子)  
♪Q:人材流出について  
A:ブータンの農産物も製造品も中国産とインド産の商品には勝てない。強国との商品の輸入は避けられず、ブータン商品は売れ残るしかない。唯一ブータンに勝ち目があるのはオーガニック商品だと思う。ブータンなりのオーガニック産業が確立できたらよい。  
(外国の大量生産品に勝てないブータン国産品は受け身的な状況。オーガニック産業として確立するには長い道のり。強国に囲まれる小国としての弱さを感じた)

## 所感

- ・30年後のブータンどころか、10年後のブータンも予測できないほど、激変が起きている国
- ・このような変化に伴い、若者の価値観も変わりつつある
- ・途上国のシレンマ：独立と依存
- ・豊かな人間性、コミュニティー社会、人情味溢れる社会

### (3) 大学ウェブサイトでの報告 【スタディツアーレポート】

#### 2023年度カンボジアスタディツアーリポート

2023年8月22日から29日にかけて、203年度「国際共生社会論実習」のカンボジア現地調査（スタディツアーリポート）を実施しました。

現地調査中に訪れたのは、首都のプノンペン、南部に位置しベトナムと国境を接するタケオ、アンコール遺跡群などの世界遺産地域として有名な古都シェムリアップの3都市です。プノンペンではJICAカンボジア事務所や小学校、カンボジア日本人材開発センター、トゥール・スレン虐殺博物館を訪問しました。タケオではecologgie社事務所やecologgie社の協力農家を訪問し、インタビュー調査を重ねました。シェムリアップでは、職業訓練センターで学ぶ学生たちとディスカッションをしたり、アンコール・ワットやアンコール・トムを訪れたりしました。



JICA カンボジア事務所訪問



現地大学生との交流の様子

スタディツアーリポートの中で最も印象的だった瞬間の一つは、現地の人々が集う市場に足を踏み入れ、その土地の文化や生活様式を肌で感じたときです。プノンペンのロシアン・マーケットやオルセー・マーケットをはじめとして、各都市の市場に何度も足を運ぶことができました。特に朝の市場には、野菜や果物、魚介類、生肉や昆虫、スパイスなど現地の食材がたくさん並んでおり、カンボジアの食文化を理解する上でとても貴重な経験となりました。

そして、私たちの8日間のスタディツアーリポートを無事に終えることができたのは、ガイドのブティーさんとドライバーのナンさんの手厚いサポートや優しいお人柄があってこそものだと感じています。お二人への感謝の気持ちを、ここで改めて伝えることができればと思います。

ポル・ポト時代に生きた人々の記憶に焦点を当てた調査研究を進めていた私は、移動中のバス車内や空き時間に、ブティーさんと2人でお話しすることがよくありました。ブティーさんご自身のポル・ポト時代の経験を語っていただく中で、ブティーさんが私に打ち明けてくれたことがあります。それは、「今生きていることが夢だと思うことがある」という言葉でした。この言葉の重みを、果たして私はどれほど誠実に対峙し実感できるだろうかと、今でも考えています。ブティーさんがポル・ポト時代の経験を語るときの言葉には、当時感じた心身の強烈な痛

みや、当時のカンボジアの景色が潜んでいました。また、ナンさんが運転してくださったバスの車窓越しに、私はたくさんの風景と出会いました。渡航前の事前学習の期間に写真や映像といった媒体を介して見てきたカンボジアの人々の暮らしが実際に目の前に広がり、確実にこの場所にカンボジアの人々の生活が息づいているという実感が込み上げてきた瞬間を、今でも思い出すことができます。朝の時間の道路沿いには、屋台で生肉をうる女性たちの姿があり、お昼には、ハンモックに揺られる少年たちがゆったりと流れる時間の中を生きていました。5時間にも及んだプノンペンからシェムリアップへの道中では、都市部から農村部へと徐々に変化する景色を見ることができ、朝ご飯のお店へ向かう道中では、私たちが乗っていたバスの周りに現地の方々が集まり、女性たちや子どもたちが車窓越しに果物などを売りに来る姿がありました。首都のプノンペンには高層ビルや大きなショッピングモールが立ち並び、朝の道路にはバイクやトウクトゥクがごった返し、夜になれば綺麗な街明かりが車窓を彩りました。これらのカンボジアの多様な“顔”を目撃つきながらバスに揺られていた時間は、ブティーさんとナンさんの素敵なお心遣いの数々のおかげで、私にとって特別な体験となりました。

カンボジアでのスタディツアーを通して、ここに書ききれないほどの多くの人々と出会い、私たちのインタビュー調査に協力していただきました。王立プノンペン大学に通う現地の学生とディスカッションを行った日の最後、私は、ひとりの女の子から彼女が大切に持っていたヘアクリップを譲り受けたのを覚えています。お互いが異なる言語や習慣を持ちながら、私たちが当初想定していた形のインタビュー調査を実行していくことは決して簡単なことではありませんでした。しかし、彼女が大切にしているものを私にプレゼントしてくれたその行動から、ことばや生きる国や文化の違いもないような、限りなくまっすぐな友情を受け取ったような気がしました。そして、コミュニケーションを通じて新たな考え方出会い系に出会い、深いつながりを構築することができた感覚を味わいました。海を隔てた先に生きる、今回の調査で出会ったカンボジアの皆さんことを想うことは、ときに、私自身が私の国でこれから日々を懸命に生きていく中での心の支えとなると思います。そして、いつかまた世界のどこかで皆さんと再会できることを願っています。

(文教育学部人文科学科2年 平子七海)



タケオでの農家インタビューの様子



早朝の市場視察（タケオ）



首都プノンペンのロシアン・マーケットにて…



早朝のアンコール・ワット

## 2023年度ブータンスタディツアーミニレポート

2023年9月11日から20日にかけて、2023年度「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」のブータン現地調査（スタディツアーミニレポート）を実施しました。

現地調査前には、6月初めころから、ブータンの歴史や現状を調べたり、JICA ブータン事務所駐在の須藤さんのご講演をお聞きしたりして、ブータンへの見聞

を深め、ひとりひとりが研究課題を設定しました。参加者6名はそれぞれ、「ブータンから学ぶエコツーリズム形成に必要な観点」、「ブータンの人々が抱く理想はGNH政策によって達成できるか」、「グローバル化による農業の変化に伴う文化・生活の変化」、「ブータンにおける開発はどのような“豊かさ”をもたらしたのか」、「ジェンダーギャップに対する法・政策の実態と市民の認識（変化）」、「ブータンにおける高等教育の“出口”」をテーマに掲げ、それぞれインタビュー項目を作成し、訪問先を検討しました。



JICA ブータン事務所訪問



ブータン日本語学校の生徒との交流

現地調査中は、首都のティンプーに3泊、ポブジカでホームステイとして2泊、空港のある都市パロで2泊滞在しました。ティンプーでは、JICA ブータン事務所、ブータン日本語学校、王立自然保護協会(Royal Society for Protection of Nature : RSPN)、ブータン女性起業家協会(Bhutan Association of Women Entrepreneurs : BAOWE)を訪問しました。その合間には、ブッダポイントやメモリアル・チョルテン、タシチョ・ゾンなどに赴き、ブータンの文化や仏教への信仰心を体感し、一般

の方々へのインタビューも実施しました。ポブジカでは、RSPN オグロヅルエデュケーションセンターを訪問し、ポブジカで奨励されているエコツーリズムやホームステイプロジェクトについて調査しました。さらにホームステイ先の家族の農作業を手伝ったり、ガンテ・ゴンパというお寺までネイチャー・トレイルをしたりして、ブータンの農業や仏教の文化、そして自然環境について学びました。パロでは、ポブジカよりも開発の進む環境で生活している農家のお宅でドツオ(石焼き風呂)を体験し、王立ブータン大学パロ教育カレッジを訪問し、18~20歳の若者に対してインタビューを行いました。これらの活動の移動中や休憩先で出会った一般の方へのインタビューや雑談の中でも各自の研究課題に関わる質問をしつつ、ブータン人の愛国心やアイデンティティ、国王への忠誠心、仏教への熱心な信仰心について学ぶことができました。

ブータンは「幸せな国」と呼ばれることがあります、実際に訪問して幸せとは何かをもう一度考え直す必要があるように感じました。伝統的なブータンの生活様式において人々は生きていくために農業を行い、家事や薪ストーブのための木材採集を男女で役割分担して、仏教の教えに従って、欲深くなることもなく慎ましく生きていました。また、公用語のゾンカ語には幸せを指す言葉がなかったため、国王がGNH(国民総幸福)というブータン独自の尺度で開発を進めるなどを国民に説明する際、「ガトト・キトト」(心身が充たされた状態)という言葉を多用したといいます。この言葉は、最高の状態というよりも、十分な状態という意味合いであるようにも見受けられます。実際にインタビュー協力者の多くは、健康であることが幸福であると答えていました。それに対して、日本人の私たちにとって幸福とは何でしょうか。学歴や就職先や経済的余裕ばかりに囚われてしまいますが、ブータンの人々が重視する心身の健康や家族の存在は我々日本人にとっての幸福とも無縁ではないと思います。ブータンは確かに世界的に見て経済的に豊かな国ではありませんが、男女平等の価値観や平和的思考、ホスピタリティについては他国と比べても秀でているようにも感じました。そして、人の豊かさとは何か、幸福とは何か、それを改めて考えさせられました。ブータンへ行ったことが私の大学生活、ひいては今後の人生においてターニングポイントと呼べるだけの貴重な経験になったと思います。

(文教育学部言語文化学科 3年 阿部綾舞)



王立自然保護協会（RSPN）訪問



ポブジカのネイチャー・トレイル



市場でのインタビュー



大学生へのインタビュー

### 【徽音祭での成果発表】

#### 海外実習科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」成果発表（徽音祭学術企画）

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、全学共通科目として、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGsに関する理解を深める目的で、海外実習科目「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」を毎年開講しています。

2023年度は、8月22日から29日にかけてカンボジア現地調査（スタディツアーア）を、9月11日から20日にかけてブータン現地調査（スタディツアーア）を実施しました。

11月11から12日のお茶大大学祭「第74回徽音祭」では、学術企画、そして、この海外実習科目の事後学習の一環として、スタディツアーアに参加した学生（履修生）による調査成果発表が行われました。以下は発表した学生による報告です。



展示の様子

#### ブータン報告（11月11日）

11月11日（土）、徽音祭にてブータンでの現地調査の成果を報告しました。まず、ブータンについての紹介動画とそれに合わせたクイズを行いました。次にスタディツアーアの概要について説明し、その後履修生各自の研究調査を報告しました。発表はブータンの女性用の民族衣装である「キラ」を着用し行いました。さらに11日（土）と12日（日）の2日間にわたって、各自の調査についてまとめたポスター展示も行いました。

ブータンというと「幸せな国」というイメージを思い浮かべる方も多いと思いますが、事前学習の中で実際にはさまざまな課題があることを知り、履修生6人は、エコツーリズムやジェン

ダー問題など各自の興味関心に即したテーマを設定し調査を行いました。各自の報告の中に、ブータンをめぐる課題の紹介や調査結果、考察を盛り込み、発表を聞いてくださった方々に「幸せ」だけではないブータンの一面を伝えられたと思います。

このような機会がなければ、私自身、ブータンに対して「幸せ」以外のイメージを持つことは難しかったと思います。6月に始まった事前学習から約4ヶ月間で得た学びをまとめていく事後学習の過程で、自身の内面の変化や知見の広がりなど、成長した自分を実感できました。この報告会が授業としての最後の取り組みでしたが、今回の経験で築いた新たなつながりをこれからも大切にし、成長し続けたいと思います。

林 知里（文教育学部人文科学科1年）



動画を用いたクイズの様子



ブータンの伝統衣装で発表する筆者

### カンボジア報告（11月12日）

11月12日（日）午前10時30分から11時30分までの1時間、国際交流留学生プラザ2階多目的ホールB・Cにて、「国際共生社会論実習」を履修しカンボジアでのスタディツアーハーに参加した学生6名が各自の調査研究の成果を発表しました。発表では、スタディツアーハーの概要の報告や一人ひとりの調査結果の発表だけでなく、途中にカンボジアに関連したクイズを出題するなど、来場してくださった方々にこの報告会を楽しんでもらえるような発信の仕方を工夫しました。また、発表に加え、会場では、11日（土）と12日（日）の2日間にわたり、各自の研究テーマと調査結果の概要をまとめたポスターを展示したり、現地でのスタディツアーハーの様子が分かる動画を上映したりしました。

発表者の6名は、6月から事前学習を開始し、カンボジアに関する文献の購読や発表を通して、カンボジアについて包括的に学び、各自の興味関心からテーマを設定しました。8月22日から29日にかけて実施した現地調査では、プノンペン・タケオ・シェムリアップの3都市を訪問し、各自が設定したテーマに基づき、都市部や農村部に住む人々や学生、支援に携わっている方々にインタビューを行いました。10月以降は事後学習として、現地調査での結果をもと

に分析や考察を通して報告書を作成し、徽音祭での今回の報告会を実施しました。

今回の発表の準備と並行して、6名それぞれが、各自の調査テーマでの調査報告書を書き上げました。報告を終えた今でも、カンボジアについて、そこに生きる人々について、カンボジアの社会や歴史について、わからないことはたくさんあります。しかしながら、この授業に参加して間もない半年前は海を隔てた向こう側にあったカンボジアという国が、いつの間にか私の心の中にいつも息づいているような大切な存在になっていました。本や映像やカンボジアの人々から多くの学びをインプットし、そして気づけば今度は私自身が誰かにカンボジアのことを伝え、今度はその発表を聞いてくださった方々の心にまた新たな問題提起やカンボジアへの興味が生まれる、半年かけてこの繋がりの一部を担うことができたことを嬉しく思います。そして、カンボジア現地で感じた熱量や音、匂い、違和感、感動の一つひとつをこれから何度も思い返しつつ、今この瞬間も変わりゆくカンボジアをずっと見つめていき、今回の学びの経験を具体的な実践やさらなる研究へと繋げていきたいと考えています。

平子 七海（文教育学部人文科学科 2年）



カンボジア現地調査参加学生（6名）と引率教員



発表の合間にカンボジアクイズを実施

## 4. 資料



## (1) 募集要項

※お茶の水女子大学シラバスより抜粋。

科目名	国際共生社会論実習 国際共生社会論フィールド実習
科目区分・科目種	全学共通科目 共通科目（前期課程）修了要件外
クラス	全学科 博士課程共通
単位数	2.0 単位
履修年次	1~4 年 博士前期課程
担当教員	平山 雄大 小田 亜紀子
学期	通不定期
受講条件・その他注意	履修希望者向け説明会（5月開催）の後、履修希望者が提出する語学試験の成績や小論文を総合的に審査し履修生を決定します。 事前学習（6~7月）、現地調査（8月もしくは9月、8日間程度）、 事後学習（10~11月）への参加が必須です。現地調査のみの参加は認められません。 現地調査の訪問国はカンボジア、ブータンを予定していますが、先方国の事情等によって変更になる場合があります。また新型コロナウイルスの状況次第では、現地調査の日程が大幅にずれることや、現地に行くことができずに代替の活動を行うことも想定されます。
授業の形態	講義／実習・実技／対面授業のみ
主題と目標	<b>■概要（主題）</b> 本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的に実施する実習科目である。 履修生は、開発途上国における研究・国際協力の実績を有する担当教員の指導のもとで、①事前学習（6~7月）、②現地調査（8月もしくは9月、8日間程度／訪問国はカンボジア、ブータンを予定）、③事後学習（10~11月）を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深める。 具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途

	<p>上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会の開催等を通してその成果を外部へ発信する。</p> <p><b>■到達目標</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。</li> <li>現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。</li> <li>現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。</li> <li>プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。</li> </ol>
授業計画	<p><b>【①事前学習】（6～7月）</b> 資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。</p> <p><b>【②現地調査】（8月もしくは9月、8日間程度）</b> 計画に基づいて現地調査を実施し、履修生各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する。</p> <p><b>【③事後学習】（10～11月）</b> 現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会の開催を通してその成果を外部へ発信する。</p> <p><b>◆スケジュール</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履修希望者向け説明会（5月10日（水）、5月12日（金）） 時間はいずれも12:30-13:00。場所は共通講義棟2号館101教室。 両日同じ内容について説明する。履修希望者はどちらかに参加すること。</li> <li>・選考（5月中旬～下旬）</li> <li>・事前学習（6～7月）</li> </ul>

	<p>オリエンテーションを含め 7 回（予定）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現地調査（8 月もしくは 9 月、8 日間程度） 訪問国はカンボジア、ブータン（予定）。申請時にどちらかを選択。</li> <li>・事後学習（10～11 月） 現地調査の振り返り、研究課題の分析・考察、報告書の作成、報告会における発表等。</li> </ul> <p>※事前学習及び事後学習に関して：カンボジアチームは毎週水曜 3-4 限（10:40～12:10）に、ブータンチームは毎週水曜 5-6 限（13:20～14:50）に実施する。</p>
時間外学習	参考文献の講読等を通じた授業の予習、発表に向けた準備、レポートを作成するにあたっての情報収集・文献調査等が必要です。

## （2）全体スケジュール

履修説明会	5 月 10 日（水）12:30～13:00 共通講義棟 2 号館 101 教室 5 月 12 日（金）12:30～13:00 同上
履修者募集	5 月 10 日（水）～5 月 24 日（水）
選考結果の通知	5 月 31 日（水）
オリエンテーション	6 月 7 日（水）10:40～12:10 グローバル協力センター 13:20～14:50 同上
事前学習	6 月 14 日（水）10:40～12:10 グローバル協力センター 13:20～14:50 同上 6 月 21 日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 6 月 28 日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 7 月 5 日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 7 月 12 日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 7 月 19 日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上
渡航前ミーティング	8 月 9 日（水）10:40～12:10 グローバル協力センター 9 月 6 日（水）13:20～14:50 同上
現地調査	8 月 22 日（火）～29 日（火）（カンボジア） 9 月 11 日（月）～20 日（水）（ブータン）

事後学習	10月11日（水）10:40～12:10 グローバル協力センター 13:20～14:50 同上 10月18日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 10月25日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上 11月1日（水）10:40～12:10 同上 13:20～14:50 同上
調査報告書提出締切	10月31日（火）
徽音祭での発表	11月11日（土）13:00～14:00（ブータン） 11月12日（日）10:30～11:30（カンボジア）

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和 5（2023）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツア（カンボジア、ブータン）実施報告書

2024 年 2 月  
発行：お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
Tel&Fax : 03-5978-5546  
E-mail : info-cwed@cc.ocha.ac.jp

---

**グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成**  
– 女性の役割を見据えた知の国際連携 –

**令和5（2023）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（カンボジア、ブータン）実施報告書**